
山田時雨

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山田時雨

【Nコード】

N7888W

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。彼はどこから来たのか、何者なのか。彼の過去に何があったのか。彼は救いを求める人が居る場所へ現れては手を差し伸べ、役目を終えると自分の記憶を消去し立ち去って行く。彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた小説。

Vol. 1 「バーチャル世界」(前書き)

第1話「バーチャル」

毎日の現実世界の生活にうんざりしている源伊織の前に、山田が現れる。

自分の願望をバーチャル体験できるという怪しい場所で、伊織のストーカー男が、伊織との願望を毎日体験しているというおぞましい事を聞かされ、その場所へ案内される・・・

(原稿用紙38枚)

>登場人物<

山田 やまだ 時雨 しぐれ・・・謎の少年。

源 みなもと 伊織 いおり・・・毎日の現実世界にうんざりしながら生きているOL。

デッター・・・バーチャル店で働く男。

柘植 つげ 文人 ふみこ・・・伊織のストーカー。

人間が憎くてたまらない。大嫌いだ。

早く地球なんか滅亡すればいい。人類の自然淘汰なんか待っていたら永遠に人類は増殖し続けるだけだ。人類は滅びてリセットされ無になるべきだ。

「おはようございます」

私は当たり前障りのない微笑みを作り、頭を軽く下げる。

「おはようー伊織。きのうドラマ見た？」

会社の同僚の女子が私に駆け寄ってきた。

「うん、見た。やっぱりかっこいいよねあの俳優さん」

他愛のない会話。

「でしょ！？ もうヤバイって！ かっこよすぎだから！」

毎日毎日同じ会社に行き、当たり前障りない女を演じ、私は今日も心の闇に埋もれてゆく。

「伊織、来週の月曜休みなんですよ？」

「うん」

「えー寂しいー」

もういいよ、そういうのさ。

寂しい？ そんなこと微塵も思っていないくせによく言うよな。

あんたが陰で私の陰口言ってるのなんてバレバレなんだよ。

「お、伊織ちゃんおはよう」

声をかけられ振り向くと、あの男だ。

やたらと馴れ馴れしく接してきて、私の連絡先をどうにか聞き出そうと遠回しにあの手この手を使ってくる同僚の男社員、柘植文人、二十三才。

「おはようございます」

一言普通に返す。

さきほどの女子社員は「ねえねえ、きのうドラマ見た？」と他の

女子社員たちに聞きながら走って行った。

「伊織ちゃんてさ……」

私も女子社員たちの方へ逃げようかと思ったところで、柘植文人に呼び止められた。心の中で舌打ちをする……。

「何ですか？」

私は穏やかな笑みで振り返る。

「本当いつ見ても、女の子らしくて、清楚で、大人しくてちっちゃくて可愛いよね。天使か妖精みたいっていうかさ。声も細くて透明感あって可愛いし。髪もサラサラだし」

私のセミロングの髪を見て柘植が言う。

よくそんな少女マンガみたいなクサイ台詞が吐けるな、と思いなから、

「そんなべた褒めしても何も出てきませんよ」

とニコツと笑って答え何気なくその場を離れた。

「あ、待って伊織ちゃん！ あのさ、明日空いてる？ どうか行かない？」

……うざいんだよ。

そんな言葉を苦々しく噛み殺し、私はまた笑顔で、

「明日はゆっくりしたいから……」

とやりわり断り、今度こそその場からそそくさと立ち去った。

私の外見と中身の激しい二重人格性を知っている唯一の人間は、つい数日前に出会ったばかりの山田時雨という男。

身長が高く、体格もいい。手足も長い。が、オシヤレにも全く興味がなく地味な外見で、顔も地味だし目も細く和風な顔立ち。髪は黒くてぼさぼさのライオンみたいな髪方。オタク系な感じだった。いつも死んだような目をしている。喜怒哀楽もないようで淡々とした低い声で喋る。

ある日の仕事帰り、いつものようにいつものビル街を黒いスーツ姿で私は歩いていた。

その時ふいにこの男に声をかけられた。

「あなた高校生？」

死んだ目で無表情なまま山田は聞いてきた。ナンパという雰囲気ではなかった。全くもって私には興味なさそうな態度だった。

「二十五才ですが？」

スーツ着てるんだからどう見ても社会人だろ、と思いつながら私も無表情で不機嫌に答えた。

「ずいぶん童顔なんだね」

「何か用ですか？」

「いや、何だか世の中の不条理にうんざりしてるような顔してたから」

ニコリとも笑いもせず興味なさそうな声で山田はぼそぼそとそう言った。

そんな理由で普通見ず知らずの他人に声かけるか？

「だったら何だというんでしょう？」

「そのうんざりを一瞬でも忘れられる場所に行ってみる気はない？」

何言ってるんだろ。そんなの行くわけじゃないじゃない。殺されるかもしれないのに。なんなのこの男。

「さよなら」

私はそう言ってまた歩き出した。

「源伊織、でしょ。あなたの名前」

後ろから信じられない言葉を投げ掛けられ、思わず足を止めてゆつくり振り返った。

「……何で名前知ってるの？ ストーカー？」

「ずいぶん自信過剰な人なんだね。あなたみたいのタイプじゃないから安心しなよ」

ムカツ。

「だったらなんでよ？」

「あなたのストーリーカーがよくあなたをそう呼んでたから」

誰？ 柘植文人か？

「よく呼んでたって何でそんな事知ってるわけ？」

「一度あのストーカーがあなたの会社の前であなたにしつこく何か言ってた時に伊織ちゃん伊織ちゃんて言ってた。で、その次にたま電車でストーカーと会って、あなたの事を友達に意気揚々と話して聞かせてた。その時に名字も分かった。次にストーカーが書いたある書類で名前の漢字も知った」

山田はべらべらと喋る。

「ちょ、ちよつと待って。ある書類って何？」

「知りたいの？」

山田は偉そうな態度で言う。いや、偉そうというか、これが素なのだろう。

「知りたいならついてきなよ」

「なんでよ。ここで今言えばいいでしょ？」

「さようなら」

今度は山田がそう言って、くるりと踵を返し去って行った。

その日はそのまま私は諦めた。どんな奴かも分からないのに危ない賭けに出るわけにはいかない。しかし数日後また山田と会った。

会社の昼休み、たまには公園で食べようとコンビニ弁当が入った袋を手にベンチに向かうと、そこには見慣れた後ろ姿。背中を丸めてベンチに座るライオン頭の男がいた。

後ろからそつと覗くと、山田はマンガを読みながら片手間にハトにパンくずをやっていた。パンくずの乗った山田の手の上にハトが三羽乗って羽をばたつかせていた。

山田は私の視線に気がついた。と同時にハトがどこかへ飛んで行った。

「なんだ、あなたか」

そう言って私を一瞥するとすぐにまたマンガに目をやった。

「こんなとこで何やってるの？」

「マンガ読んでるんです。見れば分かるでしょ。ハトにエサも与え

てましたがあなたのせいで逃げてしまいました」

感情のこもってない口調で淡々と山田は言った。

「あ、あの、この前の……」

「ついてこないと一生教えない」

私が用件を言い切る前に山田は言った。

「どんな男かも分からないのに、どこに行くのかも分からないのについていけるわけないでしょ？ 殺されるかもしれないのに！」

バカじゃないの、という思いをこめて私は言った。

「ああ、そういうこと。俺、殺人やるように見えるんだ、あなたから見たら。ついでに、今の言葉を簡潔に訳すと、おまえはバカだろ、でしょ」

私は絶句して言葉を失った。なんなんだこいつ。

「常識的な考えでしょ？ 本当バカじゃないのあんた」

「だったら例の書類のことは諦めな。知りたかったら命賭けて来いよ」

急に偉そうな強い口調になる山田。

「それ何か危ない書類なの？ 私の名前を勝手に書くな……変な契約書とか？」

「さあ……」

もう私には興味なさそうにすっかりマンガに見入ってる。

私はその姿をじっと見る。

最初見た時は地味なダサイ男だと思ったが、よくよく見るとなんだか妙なオーラを放ってて色気がある。

「ねえ、その頭、地毛？」

山田は、は？ と言いたげな顔でこっちをちらりと横目で見た。

その切れ長の目の流し目が余計に色気を感じさせた。

「そんな事聞いてどうするの？」

またすぐにマンガに目をやった。

「聞いただけじゃん。答えなよ。爆発してるよ頭」

「地毛です。それが何か？」

いちいちふてぶてしい言葉使いする奴だ。

「ふーん。名前は？」

「どうでもいいでしょ、そんなこと」

「書類のこと教えてよ、ついてくからさ」

なぜそんな事を言ってしまったか分からない。つい何秒前まで行く気なんかこれっぽっちもなかったのに。

「つい今の今まで嫌がってたのに、どういこと？」

山田はこっちを見ようともしなくなった。

「うーんと、瞬時に気がかわったんだよ」

「嘘つくなよ。本当は？」

「……ついて来いって言ったり、こっちが行くって言ったら何でとか言い出したり、どっちなんだよ一体!？」

イライラしながら私は言った。しかし、山田は少しも動じず、

「その素の姿、あのストーカーにも見せてやりなよ。ドン引きするから。いや、実はあの男DMかもね」

言いたい放題言っている。私はため息をつく。

「で、名前は？」

「山田」

「イメージにぴったりだ」

「イメージ？」

「暗いオタクなイメージ」

「あなたって発想力が乏しい人だね本当」

ムカ……

「で、下の名前は？」

「時雨」

「スマレ？」

「あなたは耳も悪いの？」

「はつきり発音してよ」

私がそう言うと、山田は足元の砂に指で文字を書きはじめた。ふりがな付きで。私はそれを読む。

「し、ぐ、ね。へー変わった名前。女の子の名前みたい」

「それけなしてんの？ 誉め言葉なの？」

「素敵な名前だと思うよ」

「声に心がこもってないよ」

「いちいちいち……ったく。」

「それで、いつどこに行けばいいわけ？」

私が聞くと、山田は残りのパンを口にくわえ、左手にマンガ、右手に何か紙切れを持ち、マンガに目をやったままそれを私に渡してきた。

私はそれを開いて見る。

「……これ一体何？」

そこには見たこともない象形文字のような暗号みたいなものが見え、思わず書かれてた。

「それはあのストーカーのパスワードだよ。彼はうちの店の会員だからね」

「会員て何の？」

「俺が働いてるとこ。まあ、簡単に言えば、バーチャル世界を体験できるってとこだよ。彼はそこであなたとのバーチャルを毎日体験しに来てる」

「どういうこと？」

「バーチャル？」

「ゲームか何か？ 私とのバーチャルって、どんなこと？」

「嫌な予感がする……聞きたくない。けど聞かないといけない気がする。」

「ゲーム……よりリアルだよ。彼が君と体験したい事を、彼の願望をそのバーチャル世界の中で体験してるんだよ」

「だからどういう事！？」

私が声を荒げると、山田はやっと私を横目で見た。

「そんな事聞かなくても分かるでしょ。あんな事やらこんな事だよ」

言い終わる前にまたマンガに視線を戻した。

あんな事や……こんな事……

「ギャー……！」

私は両手で頭を抱えて叫んだ。

「で、彼は会員になった時に君とのバーチャル体験を望み、君の名前を書いたんだよ、俺の目の前でね。あ、もちろん写真もね」

「じゃ……写真……」

私は更にでかい声で悲鳴を上げた。

「明日仕事終わったらこのベンチに七時待ち合わせね」

山田はそう言つと、携帯をポケットから取り出し、ちらっと見てからまたしまい、その場を去って行った。

それがつい昨日の出来事だった。

今日は金曜日。

会社が終わると私は約束通り、公園のベンチに向かった。

辺りはすっかり真つ暗だ。カサカサと秋の枯れ葉が風に吹かれる音がする。けど、まだ夏が終わり切っていないので涼しいとは言い難い。

ベンチにはすでに山田がいた。

私に気がつき立ち上がると、無言でさっさと前を歩いてゆく。

「ねえ、ここから近いの？」

「電車で十五分くらい」

「君の家はこの近所なの？」

「さあね。地球上のどこかにある事は確かじゃない？」

「教えたくないのか。」

「君の事何て呼んだらいい？ 山田くんとか時雨くん？」

「君、でいいよ」

「…… 本当心底私の事どうでもいいみたいだね」

「どうだろうね。タイプじゃない事は確かだけど」

「どんな子がタイプなの？」

「心のキレイな人」

私はそこで、ぷつと吹き出した。すると山田は、
「そういうところで人を笑ったりしない心のキレイな人」
と淡々と笑いもせず言った。

「……ごめん」

私は笑うのを慌ててやめて、少しだけ反省した。

「今は珍しく心がこもってたね、少しだけ」

この男は人の中身を見透かしているようだ。

「彼女はいるの？」

私がまた質問を投げかけると、

「ねえ、あといくつ質問する気？」

両手を上着のポケットに入れたまま、山田はちらりとこちらを横目で見た。

「なんでよ。だめなの？」

「あなたに教える事なんて何もない」

腹がたった私は更に質問を次々浴びせかけた。向こうが黙ってようがおかまいなく。

「君は何歳？ 何でそんな怪しい仕事してんの？ 私に声をかけてきた本当の理由は？ 身長高いけど何センチ？」

しかし、山田は無言。シカト。

「シカトすんなよ。一個くらい答えなよ」

「百八十」

「何が？」

「身長」

「やっぱり高いんだね」

「向こうに着くまで黙っててもらえる？」

「何だよ。じゃあ何だったら喋っていいわけ？」

「あなたは喋ってないと死ぬわけ？」

「死ぬよ」

「そんなわけないでしょ」

「何か喋ってないと落ち着かないんだよ。これから恐ろしいものを目にするかもしれないのにさ」

「恐ろしいっていうか、あれは変態だね。会社での表向き的人格からは想像もできないだろうね」

「へ、変態……」

「人間は怖いね」

山田は興味なさそうに言う。

私はとりあえず黙る。

電車一本ですぐに着いた。

山田の後をついてひたすら歩く。

夜のごくありふれた普通の繁華街。こんなところにあるんだろうか。

と、山田は急に右の路地へ入って行った。段々辺りが怪しい雰囲気になってくる。

そしてある建物の前で止まった。見た目はビデオレンタルショップみたいな感じで何でもない外装だ。

山田はずんずん店に入ってゆく。中も普通のこじんまりとしたビデオレンタルショップだ。

しかし山田はビデオの棚には目もくれず奥のドアを開け入って行った。レンタルショップの男店員は山田をちらっと見たが、暗黙の了解のごとく何も言わず自分の仕事に戻っていた。

「ねえ、どこまで行くの？」

私は声をひそめて聞く。

「本当よく喋る人だね」

「さっきまでずっと黙ってたじゃない！」

「ほんの十分くらいね」

私はまた仕方なく黙る。

不気味な暗い階段を山田はすたすた降りてゆく。非常口の非常灯がその不気味さを一層引き立てている。

地下三階まで降りると、山田は目の前の扉に何かカードを差し込

み入って行った。

私の心臓がドキドキ鳴り始めた。怖い。山田の話は本当に本当だろうか？もしかしたら全部嘘で、私は殺されるんじゃないだろうか。

急にそんな考えが頭を埋めつくし体が震えてきた。

私が入り口でもたもたしていると、山田が私に気がつき私の腕を引っ張った。

「私……殺されない？」

思わず聞く。

「殺さないよ。神に誓う」

山田は私を真っ直ぐ見て真剣な顔つきで言った。私は少し安心する。

「バーチャルの中でそういうことを望む人はたくさんいるけどね」

「どういうこと？」

「誰か自分の嫌いな奴をせめてバーチャルの中で殺したいとかいう願望だよ」

なるほど。それはたくさんいるだろうな。

「対象は人物じゃないとだめなの？」

「どういうこと？」

「例えばさ、地球を滅亡させたいとかは出来ないの？」

山田は私を見て少し間があってから、

「あなた、そんな願望があるの？」

と死んだようなぼーっとした目で聞いてきた。

「うん、早く滅亡すればいいのになって思ってるよ」

山田は、ふーん、と言うと更に奥に歩いて行った。

暗い部屋の中には、ネットカフェのようにたくさんの仕切られた小部屋が並んでいた。異様な風景だ。きつと上から見たら蜂の巣のたくさん的小部屋の大群に見えるのではないだろうか。このひとつひとつに会員の人達が入っているのだ。

カウンターにはコンピューターが並び、オタクっぽい痩せ型の眼

鏡男がモニターをじっと見ていた。

「デッター」

山田はその男にそう呼びかけた。あだ名だろうか。

男は山田に気づくと、

「おう、時雨。……誰、その子？」

と私を上から下までじろじろ見た。

「うーんと、知り合い？」

山田は適当に答えた。

「どんなバーチャルがご希望ですか？」

男は私を見てニヤリと笑った。

「地球滅亡でお願いします」

私が真面目な顔で言うと、男は声を上げて笑った。

「何、時雨の彼女？」

「こんなよく喋る女が彼女だったら鼓膜が疲れてしょうがない」

言いたい放題言つてやがる。

山田は私の腕をまた引つ張り、カウンター奥の小部屋に入った。

小部屋にはモニターやコンピューターが並んでいる。不健康極まりない真っ暗な部屋。モニターの青白い光だけが辺りをうつすら照らしている。

「もうすぐ現れる」

「何が？」

「あのストーカーだよ」

ゾツと悪寒が背中を走った。

山田はカウンター前を映した防犯カメラの映像をモニターでじっと見ている。

私も息を飲んで同じ画面を見つめる。

見たくない。でも見ないとならない。お願い来ないで、と願う反面で、見なければ気がおさまらないという怒りもあった。

頭の中が困惑する。

「来た」

山田が呟いた。
モニターを見る。

カウンターに一人のスーツ姿の男が立っている。
その姿と顔は、まぎれもなく柘植文人だった。
私を思わず息を吸い込む。

「声出すなよ」

山田がすかさず言う。私は頷く。

柘植は手慣れた手つきで手続きをみたいのを済ませると、隅の小部屋に入って行った。

そこで山田が別のパソコンに視線を移した。私もそつちを見る。

「この画面に、ストーリーカーがバーチャルで体験してる映像が出る」
私は画面を食い入るように見つめた。

そして唾然となる……

これがバーチャル？ っていうか、現実の映像そのものじゃないか！

CGでもゲームでもない。リアルな普通の映像がそこにはあった。まるで映画を見ているような感覚だ。

「……これ、どういうこと？」

「何が？」

「バーチャルっていうか……リアルな普通の……」

「うん、そうだよ」

山田はあっさり言う。

画面には、柘植と私の姿があった。仕事帰りのデートのようで、夜の繁華街を二人は手をつないで歩いている。

「き……気持ちわり」

私は寒気がして両腕の鳥肌をさすった。

「こんなのでそんな事言ったら、最後までもう見れないね。シヨク死するんじゃない、あなた？」

私はそれを聞いてはっとした。

「ちよっと待って。最後まで君も見るの？」

「何で？ ああ……あなたのそういう姿を俺にも見られるのが恥ずかしいって事？」

私はぶんぶん首を縦に振り頷く。

「今更そんな事言われてもね。もう飽きるほど見てるし」

山田は興味なさそうに言った。しかも、スナック菓子をどこからか取り出しぼりぼりと食べ始めた。

ここはポルノ映画上映中の映画館か！！

「いや、それでもさ、何となく……私もいるわけだし！ 何か嫌じやん！ こんなリアルっていうか、現実の映像そのものなんて思わなかったし！」

私は必死に訴える。

「あ、ホテルに入った」

山田は私の訴えを無視して、菓子を食べながら言った。

「えっ、もう?!」

私の心臓は最高潮に爆発しそうになっていた。

バーチャルの中の柘植と私はラブラブでホテルの一室へと入って行った。

「こ、これがホテル……」

私はおぞましい気持ちで呟いた。

「行った事ないの？」

「あるわけないだろ！ 汚らわしい。君はあるわけ？」

「まあ何度かね」

な、何だと？

「君、女の子とした事あるの？」

私は思わず聞く。

「それってつまり、俺がした事ないように見えたって事だよね」

「う……」

「あるよ。でもホテルでやったことはない」

「やった……って下品な言い方やめてくんない。じゃ、何でホテルに？」

「いろいろとね」

意味深な言い方で山田は言った。

「いろいろとつて？」

と私が聞くと、山田はモニターを指差した。私はそっちを見る。

……絶句。

バーチャルの中の私がセーラー服を着ていた。超ミニスカートで、足にはガーターベルト。頭はツインテールになってリボンがついていた。

しかもベッドの上にはたくさんのコスプレ衣装がまだまだ他にも並べてあるではないか！！

ベタなものばかりだ。看護婦やロリータファッション、スク水、メイド服、浴衣、エプロンなど……。

私は全身がわなわなと震えた。

ぶっ殺してやりたい！！

「フアーック！！！」

私が小声で、しかしデス声のような声で叫ぶと、

「あのね、これは現実じゃないんだから。腹立てても仕方ないよ。

みんな誰でも頭で妄想するでしょ」

と山田はいたって落ち着いた声で言った。

「だったら頭の中だけで妄想してりゃいいでしょ！？ 何なんだよ、

この店は？ これ犯罪だよ、犯罪！！！」

私は怒りをぶちまけた。

山田は無視している。

コスプレだけで済むかと思いきや、そんなわけもなかった。

柘植はバーチャルの私の全身をくまなく触りはじめた……

この先もつと恐ろしい事が待ち受けているだろう！！

私はぶち切れた。

モニター室を飛び出し、柘植が入って行った個室へ走った。

ドアに思いきり蹴りをかましぶち破り、椅子に座る柘植の後ろ姿に蹴りを入れようとした。

が、

そこには目を疑う何かがあった。

こ、これって……

「これって、ドラクエに出てくるようなポリゴン……のキャラだよ
ね……」

ファミコン時代によくあったあのちゃっちくて小さいキャラ。

柘植が……昔のゲームのような姿になっていた！！ 三頭身に！！
話しかけたが返事がない。気絶しているようだ。

「バーチャル世界にいる時は呼んでも気がつかないよ」

山田がドアに肘をついて後ろに立っていた。

「いや、そういう問題じゃないよね？ 何？ 何なのこれ？」

私は頭がおかしくなりそうだった。

「源伊織さん。あなたは本当に現実？ 自分が本当に存在してるっ
て断言できるの？」

山田は私に顔を近づけ、私の背後にある壁に腕をつけて言った。

「意味が分からない……」

「頭の中の妄想世界が実は現実なのか。いや、アニメの二次元が現
実か、仕事に追われる会社潰けの日々が現実か……どれなんだろう
ね」

山田のやわらかい唇がかすかに私の唇をかすった。死んだような
眼差しで私をじっと見下ろしてくる。

「あなたはどんな現実がいい？ 体験してみたい世界はないの？」

山田は私から離れ、柘植の顔を覗き込んだ。

「……君はなぜ私に声をかけたの？」

私は聞く。

山田は私を横目で見た。

「最初に言ったでしょ。あなたがこの世の中の不条理にうんざりし
た顔してたからだよ」

「でも、君は……私には興味ないって言ったじゃん」

「ないよ。女の子としてはね。ただ何ていうか奉仕活動みたいな感

じだよ」

私は心のどこかが痛んだ。なぜだ。

「……私が体験してみたい世界……あるよ」

「いいよ。どんなの？」

私は一呼吸ついてからその問いに答える。

「君と……君が私に好意を持ってくれてる世界」

心臓が生き物のごとくばくばくいつてる。

少しの間があつて、

「それつまりどういうこと？」

山田はうるたえる様子も全くなく机に腰掛けながら言った。

「どういうことって、そのまんまじゃん」

私は山田を少し睨む。

「いや、分かんない」

わざとからかってんのかコイツは。

「分かるだろ！」

「全く分らない」

山田は表情も変えず即答。

「だから、その……君が……私を異性として……」

「はつきり言ったら？」

山田が私の言葉を遮って言った。

「はつきり……？」

「うん」

「てことは、やっぱり分かってんじゃん！」

「いいや、分からない。だからはつきり言ったらって言ってんだよ」

すると、そこで、

「……つまりは、時雨の事が好きになっちゃったって事だよね？」

さっきのカウンターの眼鏡男デッダーが突然後ろから現れてニヤ

ニヤしながら面白そうに言った。

「……」

私は胸ぐらをつかんでやろうかと思っただが、恥をかいた気分で、もういっぱいばいばいで何も言えず耐えた。

「おい。誰がおまえに言えって言ったよ」

山田が眼鏡男に視線を移し言った。

「だって、面白かったから」

「せっかく本人の口から言わそうと思っただのに」

山田はさらりとそう言うと、机から腰を上げ部屋から出て行った。

「……………てことは、やっぱり……………分かってたんじゃねーかよ!!」

私はつい大声で叫んだ。

すると山田がぐるりと引き返してきた。

「うるせーんだよ。何回言ったら分かんのか?」

私を上から見下ろし冷めた目付きで言う。

「人をわざとからかってイジメて快感得てるわけ?」

「Sっ気があるって言いたいのか?」

「大人しそうなオタクに見えて、嫌な趣味の男だな!」

私は恥ずかしさを怒りに変えて食ってかかった。

「どうぞ好きなだけ嫌ってもらって結構なんで」

山田はすたすたと歩いて行った。

私の怒りは不完全燃焼に終わり、力なく煙のように消えていった。

呆然と立ちすくむ。

本当に何が何だか、どれが現実か分からなくなってきた。

山田は元来た階段を上がってゆく。私は追いかけた。

一階のビデオ屋を抜け外に出る。

「私のバーチャル体験はどうなるのか?」

山田の服を引っ張って私は言った。

「あなたさっきの本気なの?」

「……………本気だけど、悪い?」

「俺と何だったっけ?」

私は呆れてため息をつく。山田はじーっとこっちを真っ直ぐ見て私の言葉を待っている。私はやけくそになる。

「君が好き。すごくすごくね！」

これでどうだと言わんばかりにはつきり強く言っただけ。

「どこが？」

山田は動じず間髪入れずまた質問を返してきやがった！

「えーとえーと、性格とか目つきとか喋り方とか声とか！」

私は負けじと、クイズのように必死に早口で答えた。

「俺はあなたに興味ないの？」

「だからバーチャルで……」

そう言っただけだと虚しくなった。

「申し訳ないけど、俺との体験をバーチャルで体験する事は出来ない」

「どういう事？」

「説明しても難しいから無駄だけど、とにかく出来ない。俺はこの住人じゃないから」

「何言ってるの、この人？」

「あなたがここに、この現実には不満を持っているから、俺はバーチャル世界を教えるためにあなたに声をかけただけ。次があるからもう行かないと」

山田はそう言うのと歩いてゆく。

「待って、待って！！ やだよそんなの！！」

私は山田がどこかへ消えるとなぜか確信した。

「大丈夫。俺の記憶はあなたから消去されるから消去？」

「やめてお願い消さないで！！」

私は自分でも信じられないくらい必死に訴えていた。両手で山田の腕を掴み訴えた。

「何でそんな俺にこだわるの。記憶が消えれば辛くないんだから大丈夫だよ」

山田は相変わらず表情も変えず淡々と言った。

「お願い消さないで！！ またいつか私の前に現れて！！」

私は頭を下げて泣いて泣いて泣いてお願いした。

山田は私を見ている。

「あなたはあなたの生きたい現実を作り出して生きなよ。そんなに言うなら記憶は消さなくておくけど、またここに来るかは分からないよ。永遠にないかもよ？ あなたが生きてるうちはないかもよ」

私は何度も強く頷いた。

「じゃあね。伊織さん」

山田は初めてちゃんと私の名前を呼んだ。

そして夜の闇とネオンの中に霧のように溶けて消えた。

「山田時雨……」

私はその場に立ちつくしたまま子供のようにワンワン泣いた。

でも、もつと一日一日この瞬間を大事に噛み締めて生きようと思つた。 バーチャルは必要ない。

私は翌日会社を辞めた、黙って。

そしてきのこのバーチャルの店がどうなったのかももう一度行ってみた。

が、ビデオレンタルショップの奥にドアなどどこにもなかった。

眼鏡のあの男の事も聞いたが、そんな男はどこにもいなかった。

山田と共に消えたのだろうか。

その後、私は新しいバイトを見つけて働きはじめ、帰りに前の会社のそばをこっそり通った時、がっくりうなだれる柘植の姿を見た。柘植は存在している。けどあの店はもうない。どういふことなのだろう。 たぶん柘植の記憶からもそれらの記憶は消去されたのだろう。私はまたいつか山田と会える事だけを信じて、今日も生きる。

Vol. 2 「ノイズ」 (前書き)

第2話 「ノイズ」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。
彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
小説。

一色ゆうひは田舎から出てきて五年目になる少女。
高校時代自分をイジメた同級生たちから逃れるために出てきたのに、
都会の街で孤独に落ちてゆく。
田舎や家族を恋しいと思うあまりに、その念が部屋にあったテレビ
にこもってしまう。

(原稿用紙22枚)

>登場人物<

山田 やまだ 時雨 しぐれ・・・謎の少年

一色 ゆうひ (いっしき ゆうひ)・・・田舎町から出てきた孤独
を抱える少女。

デッター・・・時雨を訪ねてきた友人らしき男。

vol.2 「ノイズ」

夕暮れ時。

遠くで豆腐売りの音。

カラスの鳴き声。

夏草が風に静かに揺れる音。

川の小さい水音。

夕飯の匂い。

田舎に帰りたい。

近所の小さな電気屋での簡単なバイトを終え、ぼろアパートに帰宅。

「ただいま」

私は誰もいない部屋に向かって呟く。

部屋の中がサウナのように蒸されて暑い。

窓をガラガラと開ける。

沈んだ夜の景色。遠くにビルの寂しい明かりが滲んでいる。

クーラーもないこの部屋で、汗だくになりながらコンビニ弁当を食べる。

風呂に入ってもすぐに汗だく。

部屋を真っ暗にしてテレビをつける。

私は膝を抱えて、どこの番組を見るでもなく、ただ、砂嵐を延々と見つめる。

ザーザーというノイズ音に耳を澄ます。

このままこの中に溶けてしまいたい。

うとうとしてきたその時、

「一色ゆうひさん」

誰かの声がしてはつと振り向く。

暗闇の中、玄関にぼんやりとした人影。

「誰．．．．．？」

「ドア開いてましたよ。お宅の荷物預かってるんで」

私は慌てて眼鏡をかけて玄関に走る。途中何かに足をひっかけて「痛っ」と声を上げてしまった。

急いで玄関の電気を手で探りスイッチを押す。

「す、すみません」

相手の顔も見ずに、汗をふきふき頭を下げる。

「これ。昼間に宅急便の人が来たんですが、一色さんが留守だったみたいなので預かっておきました。足大丈夫ですか？」

男の子の声だ。私は両手でそれを受け取り、何度もぺこぺこ頭を下げた。

「あ、大丈夫です、すみません。すみません。ありがとうございますました」

「いえいえ」

その人が私に背中を向けてからやっと顔を上げてちらりとその背の高い後姿を見る。

あんな男の子このアパートにいたっけか．．．．．

「あ、あの」

私は思わず声をかけた。

男の子が振り向く。

Tシャツに短パン。黒髪のもじやもじや頭。和風な顔立ち。ぼー

っとした目の流し目。

「何ですか」

「あの、お隣さんですか．．．．．？」

「はい。つい最近引っ越してきたばかりで。バタバタしててまだご挨拶に伺ってなくて」

表情もなく淡々とした低い声で男の子は答えた。

「あ、そうだったんですか。あの、荷物ありがとうございました」

私はまたぺこぺこ頭を下げ、部屋に入ろうとした。

「何を見てたんですか」

後ろからふいに声をかけられた。

私は振り向く。

「何を見てた．．．．．？」

「テレビの砂嵐じつと見てたでしょ？」

男の子は言う。

そんなところも見られてたなんて．．．．．

「あ、いえ！ さっきまで普通のテレビ見てたんですけど、いつの間にか寝ちゃって、それで、もう放送終了してたみたいで．．．．．」

「」

変な女と思われたくないので、必死に言い訳をして嘘を言った。

背中を汗が流れる。

「放送終了？ まだ九時ですよ？」

「え」

私は靴箱の上の時計を見た。本当だ。まだ九時過ぎだ。夜中かと思ってた。

何も言えず黙り込んでしまった。

「ノイズ音」

男の子が呟く。

「え？」

「ノイズ音にはあんまり耳を澄まさない方がいいですよ」

男の子はそう言うと、隣の自分の部屋へと戻って行った。

翌日もまたバイト。

あまりお客の来ないこの店で一人店番。

ここまで暇すぎるのも、これはこれで疲れる。

椅子に座ってテレビを見る。見たことのない洋画が流れている。

私にはとても買っことのできないでっかいテレビ。

「あの、一色ゆうひさん」

ぼーっとしてた私は心底驚き振り向く。

「あ、あなたは」

きのこの男の子だった。

「ここで働いてるんですか？」

「はい、暇ですけど………。何かお探しですか？」

「いえ、あなたを見かけたので声をかけてみました。ところで、きのこの荷物、差出人が書いてないみたいでしたけど、中身見ました？」

そういえばまだ見ていない。あの後すぐに寝てしまったのだった。

「まだです」

「そうですね」

男の子はそう言うのと去ってゆく。

「あ、すみません！」

私は追いかけた。

「はい？」

「お名前。何と言うのですか？」

「ああ、まだ言ってませんでしたね。山田です」

「山田さん」

男の子は頭を軽く下げて店を出て行った。

「全く笑わない人」

私は一人で呟く。愛想笑いをやたらふりまく人より何だかホッと
する。

私は田舎の高校を卒業してすぐにこの都会の東京へ出てきた。今年で五年目。

理由は、地元で就職しなくなかったから。

小さな田舎町だったので、同級生もみんな近くに住んでいて、ずっと顔を合わせることになるのだ。

私は高校で女子達からさんざんイジメられた。死にたいと何度も思った。

もう一生会いたくなかった。
なのに、田舎へ帰りたいたい。．．．．．孤独に苦しむ自分が最近
いる。

けど、帰りたくない。帰りたけれど帰りたくない。
どこにも行けない。

夜、またいつものように真つ暗な部屋でテレビの砂嵐を見つめる。
ノイズ音に耳を澄ます。何だか落ち着く。

ノイズ音にはあんまり耳を澄まさない方がいい
ですよ

きのこの山田さんの言葉が頭をよぎる。

「なんであるな事を言っただろう」

またうとうととしてきた。意識が遠のいていく。

その時だった。

砂嵐だった画面に、田舎の風景が映った。

うちの田舎。私の家だ。小さかった頃の風景。

家族がいる。みんな幸せそうに笑っている。

頬を涙が伝った。

どんだん意識が遠のく。

．．．．．ゆうひ．．．．．ゆうひ．．．．．

誰かが私の名前を呼ぶ。温かい声。

「．．．．．お母さん．．．．．」

私はもううつとした意識の中、涙を流しながらテレビに手を伸ば
していた。

「．．．．．お母さん、寂しいよ。お母さん、会いたいよ」

．．．．．ゆうひ．．．．．帰っておいで．．．．．

「お母さん．．．．．!」

その瞬間、

背後から誰かに抱きつかれ、テレビから強引に引き離された。

私ははつと我に帰る。

私に巻きつく腕に思わず触れ、後ろを振り返った。

「や、山田さん………!!!」

私が驚いて声を上げると、山田さんは部屋の電気をつけた。

「何やってたの、あなた？」

山田さんはその場にあぐらをかいて座って私をじっと見て言った。

「何って………何も」

「何もじゃないでしょ。テレビに向かって話しかけて手伸ばしてたでしょ」

私ははつと思い出す。無意識にやっていた。夢かとも思っていたが現実だったのか。

「山田さんはどうやって部屋に？」

「言っとくけどピッキングして開けたとかじゃありませんからね。

また開いてましたよドア」

私はうつむく。最近夢うつつでぼーっとしている事が多いのは自覚している。

「これ」

山田さんはそう言うと、紙袋を私の前に出した。

「何ですか？」

「ご挨拶にまだ伺ってなかったのだから」

「あ、ありがとうございます。お菓子ですね」

私が袋の中を覗いて言うと、彼は突然私の頬にそっと手で触れてきた。

私はびっくりして後退る。

「え、え、あの、急に何ですか？」

私は真っ赤になって紙袋を抱きしめ、彼を警戒した。

「涙。泣いてたでしょ」

山田さんは冷静な口調で言った。

私は自分の顔を触る。本当だ。相当泣いていたのか涙で濡れている。

「すみません．．．．．」

「で、何やってたの？」

私は彼のその問いにうつむいて思い出す。

「言っても信じてもらえな．．．．．」

「誰かが見えて、声がした。そうじゃない？」

私は彼の目を見た。眠たそうなぼーとした目が私を見ている。

「．．．．．はい」

「きのう俺が言った事、忘れたの？」

「何のことだか理解できなくて．．．．．」

「俺に嘘ついてもバレるだけだよ」

山田さんはそう言っ、紙袋の中のお菓子を取り出した。

私の手を取り、個包装のクッキーを私のでのひらの上に乗せ、

自分でも食べ始めた。

「山田さんは何者なんですか？」

「何者でもない。それにしてもこの部屋暑いね」

彼の首筋を汗が小さく光って流れた。

「すみません。クーラー買っお金なくて．．．．．」

「いや、別に文句言っわけじゃないから気にしないで」

「はい。あの、下の名前は何て言うんですか？」

「それ知ってどうすんの」

「いえ、別に。すみません．．．．．」

「あなた、謝ってばっかだね」

「．．．．．すみません。あつ、すみません！」

私は大きく溜め息をつきうつむいた。

その時、玄関の外の廊下で誰かの声がした。

「おい、時雨。いないのか！ 時雨！ おい、時雨のバカ！」

男の人の声だ。隣の部屋のドアをドンドン叩いている。

山田さんはその声を聞くと小さく溜め息をつき腰を上げ、玄関の

ドアを開けた。

「うるせーよ」

「あれ？ お前の部屋そつちだったっけか？」

「いや、隣」

「じゃ、何で？」

そう言うとその男の人は私の部屋を覗き込んだ。

眼鏡をかけた痩せ型の男の人が私を見た。

「おいおい、引越して早々隣の女の子の部屋に上がりこんでんのかよおまえ！ 何してたわけ？」

そう言う男の人の頭を山田さんは軽くはたいた。

私も玄関に向かい男の人に頭を下げた。

「あ、どうも。山田時雨の友人のデッダーです。初めまして。 . . .

. . . .眼鏡っ娘の可愛い女の子か。萌えるなこれは私をまじまじと見て言った。

山田さんがもう一度彼の頭をはたいた。

「あ、良かったらデッダーさんも上がりますか？」

私がそう言うと、山田さんが私を横目で見た。

「あなた、随分と無用心な子だね。今会ったばかりのこんな変な男を簡単に部屋にあげるわけ？」

「おい、変な男とは何だおまえ。おまえだって何やってたんだよ？」

あ、上がってもいいですか？」

デッダーさんはニコニコと笑って言った。

確かに無用心かもしれない。でも、山田さんがいるなら大丈夫という気がした。

「山田さんの下の名前」

「時雨」

「し?」

「時の雨と書いて、しぐれ」

「あ、その漢字ですか！ 素敵な名前ですね」

私はデッダーさんにもお菓子を配りながら言った。

「ええと、ところで時雨と君はどういう関係で？」

「いえ、別に関係というほどでは。ただの隣人です。」

そうですね山田さん？」

私は変な誤解をされないよう焦りながら説明して、山田さんに話を振った。

「うん、ただの隣人」

デッターさんは疑うような目で私達を見ていたが、ふいにテレビの方を向き何かに気がつくとも目をこらしはじめた。

そして何やらバッグからノートパソコンを取り出して、テレビの方を向き、暗号のような文字を入力しはじめた。

「どうしたんですか？」

私の問いに、

「電化製品は人の念に繊細に反応するからね」

山田さんが頬をふくらませてお菓子を食べながら淡々と呟いた。

「こりゃ、量子の半分がこの女の子の念によって構成されてるわ」
デッターさんが意味不明なことを言っただけで笑った。

「何の話ですか？ どういう意味ですか？」

私が混乱していると、山田さんがあぐらをかいた膝のうえに頬杖をつき私の方を見た。

「あなたが田舎に帰りたい帰りたいと思うあまり、その念がこのテレビに魂を吹き込み始めてるんです。あなたの思い描く景色を映し出して、あなたの聞きたい声を作り上げ、あなたの会いたい人の姿を投影した」

なぜ．．．．．その事を知っているの？

私が田舎に帰りたいがってるなんて誰にも話してないのに．．．．．

「このテレビの波動と共鳴してしまうと、あなたの全身を構成してる細胞も取り込まれて一体になって、この世から消えてしまうんだよ」

「ところで、あの包みが気になるんだけど、時雨？」

デッターさんがパソコンに次々と暗号のようなものを入力しながら言った。

「うん。一色さん、あの中身まだ見てないよね？」

「あ、まだ……」

山田さんは立ち上がり包みを手に取ると封を開けた。私も中を覗きこむ。

そしてはっと息を飲んだ。

その包みの中には、黒いペンで雑に書き殴ったたくさんの手紙がぐちゃぐちゃになって入っていた。

手紙の内容は全て、私を非難するものだった。

「ひどい……誰がこんな……」

私は胸を刺されるような思いにどっと涙がこみ上げてきた。

「ひどい？ 本当にそう？」

山田さんが手紙に目をやりながら言った。

「ひどいじゃないですか！ 一体誰なんだろう……」

私が両手で顔を覆い泣きじゃくっていると、私の頭の上に何かが触れた。

山田さんの手だった。

「誰って分かっているでしょ？ 思い出してみなよ」

「思い出せない。知らない、こんなの……」

私はそこで昔の記憶が蘇った。

「そうだ……絶対そうだ！ 高校のときの……！」

「違う」

私の言葉を最後まで聞き終える前に山田さんが口を挟んだ。

「じゃ、誰なんですか？ 教えて下さい！」

私は彼の両腕を掴んで叫んだ。

すると彼は、私の顔を指さした。

私は理解出来ずにただただ彼の目を見た。

「あなた、でしょ？ あなたが自分に向けて書いたものでしょ？」

気絶しそうな悲しみが私の全身を覆い流れて行った。

そうだった。私が自分で書いて自分に送ったものだった。

「自分への劣等感、罪悪感からだろうね．．．．．」
デッターさんがテレビに何か接続しながら言った。
その時、テレビから稲妻のような大きな音がして光った。
途端、部屋が真っ暗になった。
窓の外を見ると、外の街明かりも消えている。
闇だ。

「早いとこ済まさないよ、俺まで連れてかれちゃう」
デッターさんはそう言うと、ピアノストのような軽快な早さで次々とパソコンのキーボードの上に指を滑らした。

テレビ画面が煌々と光り、あまりの眩しさに目を細めた。
．．．．．ゆうひ．．．．．ゆうひ．．．．．

「お母さん．．．．．!!」
画面の向こうから声がする。私は手を伸ばしたが、また山田さんが私を自分の方へ強く引き寄せた。
テレビには懐かしい風景や人が次々と走馬灯のようにものすごいスピードで流れた。

「よし、これで完了！」
デッターさんが最後のキーをおもいきり押した。

静けさ。

窓の外、少ししか時間が経っていないかと思っていたのに、空がうっすら白く明けてきた。

部屋の電気もついた。

テレビはシヨートして煙を上げていた。

「田舎に帰りな。このテレビは引き取ってあげるから」

山田さんが私を抱きしめて言った。

「でも．．．．．」

「大丈夫」

彼はそう言うと、私から離れデッターさんと部屋を出て行った。

私はそのまま三時間ほど気を失うようにして眠ってしまった。
三時間後目を覚ますとテレビが消えていた。
隣の部屋のドアをノックした。
そこは空き家だった。

一週間後、部屋を出る手続きを急遽いろいろ済ませ、私は荷物をまとめる。

物はほとんどないのですぐに荷造りを終え、もう一度隣の部屋をノックした。

誰も出て来ない。返事もない。

「.....ありがとう」

私は独り言で呟き、アパートを後にした。

電車と飛行機を乗り継ぎ、実家へ帰った。

母や父や兄弟が待っていてくれた。

私の心の孤独を打ち明けると、母は泣いて私を抱きしめてくれた。高校時代の同級生達はほとんどが、最近他県にそれぞれ引っ越していた事を始めて知る。

まだ地元に残っている子は思いもかけず、あの当時のことを謝罪しに家まで来てくれた。

私に笑顔が戻った。

懐かしい風景の中、地元で働き、心の安らぎを胸に夕日を眺める。実家に戻る前に、誰かに少しだけ出合い、何か大きな、とても大きな何かで助けてもらった気がする。

背の高い男の子だった気がする。

どんな人だっけな。思い出せない。

いや、そんな人いたっけ？ 夢かな。

でも何か温かいものが胸にじんわりと残る。

vol.3 「光の裏に咲く花」(前書き)

ホスト下積み時代を経て自分の店を持つ男、藤原。新しくオープンする店舗の新人ホストをスカウトしていた所で、山田時雨と出会う。一日だけ無理やり働かされる事になった時雨だが・・・それを承諾した時雨にはその店でやるべき事があったからだった。

(原稿用紙20枚)

>登場人物<

山田 時雨・・・謎の少年

藤原・・・自分の店を持つホスト店の店長。

繭子・・・店の客。

デッター・・・時雨の友人らしき男。

下積みホスト時代を十年経て三十歳になった俺は、やっと自分の店を五店舗持てるまでにのぼりつめた。

太陽の照らす世界からはもう長いことおさらばしてしまったが、夜の光の中で俺は以前よりもっと輝きを得ている。

今俺に出来ることはこの世界を精一杯生きる事だけだ。

昭和六十三年。もうすぐ平成という新時代に突入するこの時に、五店舗目の俺の店を開店する事が決まった。

新しい若い新人ホスト達を自らスカウトしてくるのも俺の仕事だ。俺がその少年に会ったのは、夜の繁華街で新人をスカウトをしていた時だった。

最初に見た時はパツとしない地味な奴だと思った。

背は高く完璧なんだが、ぼさぼさの黒髪に地味な顔立ち。大人しそうで、ホストというには華がなかった。

そう分かつてはいるのだが、どうにも妙なオーラを感じて目が離せず、試しに声をかけてみた。話は上手いかもしれない。

「その君」

俺は笑顔で気さくな感じで声をかけた。

少年が振り向いた。何とも死んだようなうつろな目つきをしている。

「君、今仕事とかしてるの？」

「ホストの勧誘ですか？」

俺が用件を言う前に、向こうからあっさり用件を言い当てられた。

「うーん、そう。まあ、そんなとこ」

「何ですか」

「何でって？」

「ホスト向きじゃないって分かってんでしょ。華がないし」

俺が考えてることがコイツに聞こえたのか？

「いやいや、何かオーラがあるからさ」

俺は笑ってごまかした。

「嫌です」

少年は無表情ではつきり言った。

「ちよつとでもいいからさ。試しに一日でもやってみてよ？」

俺は何とか引きとめようとした。

「男なんてその辺に山ほどいるでしょ」

少年はそう言うと、去って行く。

「ちよ、ちよつと待って君！」

俺が呼び止めても奴は無視して歩いて行く。俺は奴の腕を掴んだ。

「頼む。一日でいいからさ！」

「俺、前科あるんで。今逃亡中なんですよ」

俺はそれを聞き言葉を失う。この死んだような目つき。ありえない話でもない。

「．．．．．そ、それ本当なのか？ 何の罪？ まさか殺人じゃないだろうな？」

「その、まさかですよ」

奴は俺の腕を自分から丁寧に引き離し、また歩いて行った。

「嘘だろ！ 断るための口実だろ？」

俺はその後姿に向かって言った。

「嘘に決まってるでしょ」

少年は前を向いたままそう言って、曲がり角を曲がって消えて行った。

「嘘かよ．．．．．まんまと騙された」

俺は肩を落とし、その日は店に戻った。

俺は翌日の夜も同じ場所に立った。

心のどこかであいつにまた会えないかと期待していたからだ。もしかしたらすごく才能あるホストになるかもしれない。

少年は簡単に同じ場所に現れた。
黒いフードを頭からかぶり、だぼだぼのGパンに両手をつっこんでいる。

俺はバレないようにそつと背後から近づき、声をかけようとしたと、奴がフードの陰から横目で俺をジロリと見た。その目つきにやたら色気がある。絶対コイツは売れるはずだ。

「嫌です」

俺がまだ何も言っていないのに奴は言った。

「まだ何も言っていないだろうが」

俺は溜め息をつく。

「じゃ、他に用件でもあるんですか？」

「いや……そう言われると。君はここで何してんの？」

「さあ」

興味なさそうな声。

「名前は？」

「さあ」

「もし何でもするって言ったら、その条件と引き換えに一日試しに働いてみてくれる？」

俺は強引な駆け引きに出た。

「本当に何でも出来るんですか？ 死んでって言ったら？」

「あ、そういう極端な事は……」

「それ、何でもって言わないですよね」

「う、うん……まあ」

何だかコイツと離していると簡単に言い負かせられてしまう。というか、コイツの持つてる雰囲気を押される。

「何だっいたら働いてくれる？ 金？ いくらくらい必要？」

「金なんていらないし」

「何でだ？ おまえボンボンなのか？」

「金に縛られるこの次元の人は気の毒ですね」

少年はそう言つて一瞬視線を地面に落とすと、また去つて行くこととした。俺は腕を掴む。

「今日は絶対逃さん」

少年は更に冷めた目つきで俺を見下ろした。

「今俺と話してて分かんないの？ 女の客が来てもこんなですよ？」

「いや、逆にその態度の悪さを売りにする！」

「態度の悪さつて……」

俺は強引に奴の腕を引っ張つた。

「今度他の場所に新しい店舗出すからさ、そのためのスカウトなんだよ」

俺が説明しながら店まで引っ張って行くと、どこから声がした。少年は声のする方を振り向いた。

道路の向こうから、

「おい、時雨！ おまえどこ行く気だよ?!」

眼鏡の男が必死な様子で叫んでいる。

「うるせーな」

少年は小声で呟く。

「あれ君の知り合い？」

「さあね」

少年は観念したようで、俺について来た。

鏡張りの壁、煌びやかな電球にまわりを覆われた階段を降り、店へと入つた。

その時、何か低い聞きなれない音がした。

と、少年はポケットから何か小さくて四角い銀色のものを取り出し、自分の耳にあてた。

その四角い何かから、

「時雨！ おまえどこなんだよそこ？」

という声が大きく鳴り響いた。

何だ、これ……？ さっきの眼鏡の男の声じゃないか？

「後にしろ」

少年はそう一言言うと、それをまたポケットにしまった。

「……………それ、何だ？」

「携帯」

「……………？ けいたい？ 今電話みたいな事してなかった？」

「だって電話だもん」

何なんだコイツ？　ますます得体が知れない。　未来から来たとか？

俺はとりあえず少年をつれて店に入った。

他のホストたちや女の客達が少年をじろじろと見た。

「藤原さん、それ新人ですか？」

NO1ホストの大地がからかうように近づいて来て言った。

「いや、一日だけ試しに働いてもらうんだよ」

「にしても、地味じゃない？」

そういうこと言うな。また逃げられるだろうが。俺は溜め息をつく。

少年をチラリと見る。傷ついたりしてないだろうか。

しかし、奴はまったく動じる様子もなく、向こうにいる客をなぜかじつと見ていた。

「どうした？ 知り合いでもいたか？」

俺が声をかけると、いいえ、と言って大地の方を向き直した。

「何か暗そうな奴だな。そのフード取れよ」

大地がライバル意識を燃やしてか、奴に食ってかかる。まあまあ、と俺は大地をなだめる。

「聞こえてんのか？」

大地は少年に顔を近づけ睨んだ。

少年は表情ひとつ変えず大地の目をじつと見ている。相変わらずうつろなやる気のない目で。

「聞いてんのかつってんだよ！」

大地はついに少年の胸ぐらを掴んだ。

それでも奴は動じず黙ったまま。

が、奴の目つきがさつきと違いわずかに光を放ったような気がした。目の色が変わったような。何かゾクツとくるものを感じた。真っ直ぐに大地の目の奥を見ている。

大地も俺と同じ事を感じたのか、一瞬、手をゆるめ、目に困惑した表情を見せた。

「大地やめろ。な?」

俺は大地の手をどけ、少年を裏の事務所に連れて行った。事務所に入ると、

「お腹空いたんで何かもらえませんか?」

少年はソファーにどっさり腰掛けて言った。

俺はふっと笑った。

「お前、大人しそうに見えて、何か肝が据わってるな」

そう言いながらその変の菓子やらを出してやった。

少年は黙々と食い始めた。

「君、名前は?」

「知る必要ないでしょ。どうせ一日だけなんだし」

「ずっと働いてくれる気ないの?」

「嫌です」

最初に会った時と同じ返事が返ってきた。

「じゃ、名前だけでも教えてくれよ」

「山田時雨」

「何だつて?」

少年は机にあったペンと紙で自分の名前を書いた。

「変わった名前だね。そのまま源氏名に使えるな。時雨ね」

「名前なんて知ったって、どうせ忘れるんだから意味ないよ」

「忘れないよ。インパクトある名前だし」

「忘れるんだよ」

時雨は机に視線を落としたまま言った。

黒いスーツに着替えさせ、俺が隣につき時雨を客の横に座らせた。

背がでかいからか、スーツを着ると映える。

時雨の隣に座っている女の子が時雨に笑いかけた。

「繭子です」

シヨートカットの髪を茶色く染め、厚めの化粧の子。時雨は笑いもせず軽く頭を下げた。

「へへ何か今までにないタイプの男の子だね、店長？」

「うん、そうなんだよね。だからずっと働いてもらいたいんだけどね」

「え？ 新人じゃないの？」

「うん、どうしても嫌だつて言うんだよ。で、俺が強引に頼んでこっつて一日だけ働いてもらってんの」

本当に言つてて虚しくなる。非常に残念でならない。

「名前は？」

「時雨」

「しぐれ？」

「時の雨でしぐれです」

「ああ、その時雨ね。源氏名？」

「本名」

「えへかっこいい！」

何とか一応会話は続いている。しかし笑わない奴だな本当、と思
い俺は心の中で笑った。と言ったところで、どうせ一日だけだ。

そこで、店内が薄暗くなった。

今日が誕生日の客のためにキャンドルサービスが派手に行われる
のだ。

俺はそつと席をぬけ、そっちの準備の手伝いに向かった。

ちらりと時雨の方を見やると、さっきの隣の女の子が時雨の首に
両手を回していた。奴はどんな反応するんだろ。

すると、時雨が何かを女の子に話しかけている。その直後、女の
子の表情に暗雲がたちこめた。何か変なことでも言つたんじゃない
だろうな。俺は不安になる。

と、女の子が店から出て行ってしまった！ 何てこった！ あいつ何を言ったんだ！

が、時雨もその子の後を追いかけて行った。

俺はそつと後をつけ、階段踊り場にいる二人の会話を影から聞いた。

「君は誰なの？」

女の子は涙を浮かべて言った。

「何者でもない」

「何で分かったの？ 何で知ってるの？」

「繭子さん、いつまでここに通う気？」

「誰も私なんて見てくれない。みんなみんな私の事なんて忘れていくの。誰も気にかけてなんかくれないの。私はここにいたいのに！」

女の子が怒りを混じえた強い眼差しで言った。

一体何の話なんだ？

「俺だって同じだよ。みんなから忘れ去られるんだよ」

「……. そうなの？」

女の子の表情が少しやわらいだ。甘えるような何かを乞う目で時雨を見ている。

「俺と違ってあなたはそんなことはない。必ず誰かしらの記憶には残ってる」

「残ってなんかないよ」

「残ってるよ。知らないの？」

「え？」

そう言つと、階段前にある大きな鏡の方を時雨は見た。

そこに目を疑うような光景が映し出された。

俺は驚嘆の声を出しそうになる。両手で口をふさぎこらえた。鏡の中に、そこにいる女の子がもう一人いた。光の中にいる。

もう一人見知らぬ男が映った。男は何か話しかけている。

男は写真に向かって話しかけ優しい笑顔を浮かべていた。

その写真に写っているのは、そこにいる女の子だった。

そして男はその写真を棚に戻した。

いや、棚じゃない。

仏壇の上だった。

俺は意識が遠くなりかけた。

女の子は鏡の向こうのそれを見て、子供のように泣いた。

「あなたの婚約者でしょ」

時雨の問いに彼女は頷いた。

時雨は彼女の背の高さまで屈むと、泣きじゃくり顔を覆う彼女の両手を取り、その唇にキスをした。

すると、彼女の全身が透明に光った。

その光は大きく大きくなり天井に上がり丸くなり、そして、消えた。

俺は魂の抜け殻のごとく放心状態になる。

「いつまで盗み聞きしてるんです？」

気がつくと、時雨が俺を見下ろしていた。

「うわっ!!」

思わず情けない声を上げる。

「い、い、今のは何だ……？ ……？ あの女の子はどうなったんだ？」

「やっと心が安らげる場所に行っただんですよ」

「時雨、君は一体……？」

「さあね」

「もしかして、この事を知ってて店に来てくれたのか……？ ……？」

俺はそう確信した。時雨は俺の言葉を聞いて視線を床に落とした。やっぱりそうなのか。

「そんな事より藤原さん。あなたもでしょ？」

「え？」

時雨は俺をじっと見た。何だかさつきまでの時雨と違う。俺に慈悲の目を向けた。

「俺が何だつて？」

「見て」

時雨はそう言うと、店の中を指差した。

俺は店の中を見渡す。何も変わった所はない。

「何だ？」

「あれは誰ですか？」

時雨はある男を指差した。

「誰つて……」

見たことのない男が大地と話しながら音頭を取っていた。ホストではなさそうだ。

その男の胸元を見て俺は声を失った。

男は「店長」と書かれたバッジをつけていた。

「ちよつと待て、何だあいつ？ おい時雨、誰なんだよあいつ？」

俺は時雨の方を振り向いた。

「藤原さん。ここはあなたの店じゃない。あなたは確かに以前ホストだった。自分の店を持つことを夢見て何年も頑張っていた。けど、結局うまくいかず、疲れ果て力尽きた。ちよつどその時、あなたが仕送りで支え続けてきた両親が不慮の事故で二人同時に亡くなった。あなたの唯一の家族だった」

何を言ってるんだ……

そんな嘘ばかりを並べて……

「そしてあなたは、去年、命を絶った。あなたがその後見ていた現実には全て、あなたの願いが作り出した幻想です」

「……違う……」

「いいえ。違くありませんよ」

勝手に涙が頬を次々流れた。

違う。そんなわけはないんだ。

俺は夢を叶え、今一番輝いていられてるんだ。

「いいえ、叶えられなかった。けど、それはあなたの汚点でも何でもありません。あなたにはもっと大事な光があるでしょ」

時雨は俺の心の中を読んだようにそう言つと、俺を抱きしめてきた。

まるで菩薩のようなエネルギーが俺のまわりを流れ真つ白な光に包まれた。

その時、俺の目に両親の光が見えた。あの笑顔こそが俺の一番大切な光。

俺はその光の方へ、光の方へと歩いて行つた。

ふと後ろを振り向いたが誰もいなかった。

さっきまで俺は誰かと話していた気がする。誰だったのか思い出せない。

たぶん、菩薩様だ。

「時雨！ どこ行つてたの？ あれ、何そのかつこ？」

道路に出ると、デッダーが待ち受けていた。

「別に」

俺は重い気を振り払い歩き出す。

「何だよ死んだような目して。あ、それはいつもの事が」

笑い声を上げるデッダー。

出会つた奴等は皆一様に俺の事を感情がないと言つ。冷静だと。

そんなわけはない。

さっきの二人の体温がまだ手に残っていた。

「時雨、飲みに行くか！」

そんな俺とは裏腹に、デッダーが明るく俺の肩を叩く。

俺はいつもこいつのこのバカさに救われる。

voI・4 「白い願い」（前書き）

第4話 「白い願い」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。
彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

雪に覆われた山の中、一人の老女が何かを探し求め歩き続けていた。
そこで老女はある少年に出会い、自分の命がもう長くない事を打ち
明け、不老不死の人間を探している事を明かす。
（原稿用紙18枚）

>登場人物<

山田 やまた 時雨 しぐれ・・・謎の少年

老女・・・不老不死の人間を探し求める女性。

老人・・・山の中で一人暮らす男。

デッター・・・時雨の友人らしき人。

しんしんと降る雪の中、私は曇り空を見上げながら雪道をひたすら歩いている。

「こんな山中に宿なんてあるかしら……」

九十五年の年になったこの老婆の体にはとてもこたえる。

かじかむ手をさすり着物の裾を直す。草履を履いた足の感覚が無くなってゆく。足袋に溶けた雪で一層冷たさが増す。

その時、雪の中に人影が見えた。こちらに背中を向け岩に腰かける人。

私は後ろからそっと傘をさしかかけた。紫色に白木蓮模様の傘。

振り向いたのは少年だった。蜘蛛の巣のような頭に雪を積もらせ、警戒心のある目で私を見上げた。

「人いたんだ」

少年は小さく呟く。

「私もあなたを見て同じ事を思いました」

少年は黒い着物に積もった雪を振り払い、立ち上がった。

私の目線より遙か上の背丈に少し驚く。

今度は私が少年を見上げる側になった。

少年は私に手を差し出した。私は首をかしげる。

「傘持ちますよ。ご一緒してもいいですか？」

「あ、ええ……」

私は傘を手渡す。傘の中で二人共黙ったまま、ただ黙々と歩く。今会ったばかりの人間と同じ傘に入り共に歩くなんて……。

雪を踏みしめる音だけが静けさの中に溶けてゆく。

傘の紫色が、雪の上に薄紫色の影を落とす。

「この辺りに宿があるかご存じですか？」

私は口を開く。

「ないでしょうね。民家が見つければいい方でしょう」

少年は真つ直ぐ遠くを見たまま言った。

「もしも見つからなかったらどうしましょう」

私は途方に暮れた。

「その時はかまくらでも作るしかないでしょうね」

「かまくら……」

そう考えを巡らせていると、白いもやの中に小さな灯りが見えた。

「民家かもしれないですね」

その灯りに少年も気がついたようだった。

私達はその灯りに向かい歩く。

鳥の鳴き声も虫の音も聞こえない深い山。鳥の声くらい聞こえても良さそうなものなのに。

その灯りの前まで来た。

私は戸を叩き「ごめんください」と呼び掛けた。

すぐに戸が開いた。

中から険しい顔をした体格のいい老人が出てきた。白髪の頭と白髭。足が悪いようで背中を曲げ杖をついている。

老人は眉間に皺を寄せながら私を見て、それから少年を見た。

「何のようだ」

ぶつきらぼつに老人は言う。

「どうか一晩こちらに泊めて頂けないでしょうか」

私は頭を下げお願いした。

「……一晩だけだ」

老人はそう言うと言った家の中へ入って行った。良かった。こんな人はいない山奥に人が訪ねて来たものだから、もしかしたら気の毒に思ってくれたのかもしれない。

少年は私の背中をそつと押し私を先に家に入れると、傘を折り畳んで玄関口に立て掛けた。

老人は相変わらず険しい表情をしているが、せつせと私達に食

べるものを作ってくれた。

そしてそれらを私達の前に黙って出すと自分は部屋にすぐ引込んで行った。

囲炉裏を囲んで私達二人は座り、黙々と食べる。

「あなたはあんなところで何してたんですか？」

少年が私に言った。

「あなたこそ一人で何をしていたのですか？」

私も聞き返す。

「俺はあなたが通るのを待っていたんですよ」

「……なぜ？」

「あなたはある物を探して歩き続けているんですよ」

私はハツとした。

「なぜそれを？」

「不老不死の薬。そんな物本当にあると思っっているのですか？」

「……あると信じたいのです。私の身体は病に侵されもう長くありません」

「それが自然淘汰というものでしょう」

「無慈悲な事をおっしゃいます。私はもっと長く生きられるはず。

せめてもうあと二百年は」

「当てはあるんですか」

「噂で……」

「どんな噂ですか？」

「ある人間の肉を食らうと不老不死の身体を手に入れる事が出来る」と

そう。噂。ただの噂。雲を掴むようなものかもしれない。それでも私はそれに望みを託したい。

「人間て一体誰の？」

「その人間は……時代や場所を越えて渡り歩くという不老不死の不思議なお方なのだそうです」

私は静かに語った。

そんな人間いるはずもない。
でもいるかもしれない。

私のその話を聞いても少年は驚く様子もなく静かな眼差しで味噌汁をすすっていた。

私は笑った。

「私だつて分かっています。そんな人間いるはずがないと。でも、それでも信じたいのです」

「もし本当にいたら、あなたはどうするつもりなんですか？」

少年は椀を床に置くと、今度は箸で魚をつつき始めた。

「もしいたら……」

「殺すの？」

「……ええ」

私は心の中の雑念を振り払い、己の決心が鈍らぬよう強く返事をした。

「不老不死なのにどうやって殺すの？」

「完全に命を絶つ事は出来ないのだけど、短い時間だけ仮死状態にする事が出来るらしいの。その後また生き返るのだけど」

「……完全に死ねたらいいのに」

少年はかすかな声で呟いた。

「え？」

「その人間はどこにいるんです？」

「分からないわ……」

「そうなんだ。ごちそうさまでした」

少年は突然そう言うと立ち上がり、老人の部屋に向かって行った。

「じいさん、風呂はあるの？」

向こうで少年が老人に話しかける声がする。

少年は老人と共に部屋から出てくると、二人で風呂と思われる方へ向かって行った。

老人は一人勝手口から外に出ると、薪を両手に抱えて窯に放り

込み始めた。

私は囲炉裏の火を見つめながら、窯にくべられた薪が外でパチパチと音を立てるのを聞いていた。

食事を済ませ、廁を探して風呂の方へ行くと、半分開いた風呂の扉の向こうに少年の後姿が見えた。

私が見たちょうどその時、彼は着物を羽織ったところだったのだが、羽織う瞬間、その背中には、首の付け根から腰まで背骨に沿って真っ直ぐお経のような文字が並んでいたのが一瞬見えた。

私はすぐに目をそらし、廁を探した。

廁から戻ると、少年は囲炉裏の前で横になって眠っていた。

私の足音に気づきうつすらと目を開けこちらを見た。

「あなたのその背中には何が書いてあるの？」

私は気になり思い切って聞いてみた。

「さあ。何でしょうね」

そう言うと、少年はまた目を閉じた。

聞いてはいけないのかもしれない。

すぐに外は日が暮れ、雪景色は闇に包まれた。

少年は囲炉裏のそばで眠り、私は別の部屋で畳みの上に布団を敷いて寝た。

何時間経ったのだろう。

ふと目が覚めた。

そつと窓を開けて外を見ると月が黒い雲に隠れ鈍い光を放っていた。

私は少しはだけた着物を直そうと着物に手をやった。

「.....つきゃああああー!!!」

私は思わず叫び声を上げた。

早く、早くしなければ、このままでは私は.....

その時、少年が部屋に飛び込んできた。

少年は私の全身を見た。

そして表情も変えず私に近づくと、私の手を取り着物の袖をまくり、私の腕やらのひらやらを丹念に見た。

その私の手には無数の黒い斑点が出来ていた。

腕だけではない。顔も足も背中も全身だ。

おびただしい数のおぞましい黒い斑点が全身に．．．．．まるで虫が這っているかのように出来ていた。

「早くしなければならいのです。私はもう．．．．．」

以前は白く綺麗だと言われたこの肌が、今は化け物のように成り果ててしまった。

「早く不老不死のお方を見つければ．．．．．」

「その人間を食べても不老不死になることは出来ませんよ」

少年はまるで何かを知っているかのような口ぶりで言った。

「あなたは何か知っているのですね？　お願いです。教えて．．．

．私にそのお方に会わせて下さい」

私は少年の手を取り必死に懇願した。

いつの間にか、月が雲から顔を出し、少年の姿を照らしていた。

金色に光るその目で真っ直ぐと私を見ている。

「無駄です。その人間に他人を不老不死にする力なんてない。まして、仮死状態になることもない。死ねないんですよ」

私は悟った。

私の目の前にいるこの少年がそのお方なのだ、と。

「あなた様なのですね！？　お願いです．．．．．私はまだ死に

たくないのです！　私にあなた様の力を授けて下さい！」

「だから今言ったでしょ。無理なんです。そんな能力、俺にはない」

「嘘をおっしゃらないで下さい！　どうかどうか私を見殺しにしないで下さい！　助けて下さい！」

私にはこの目の前にいるこのお方しか希望は残されていなかった。

私はまた皆から、綺麗な白い肌だと言われうっとりされたい。

私は無力な己にただただ泣くしかなかった。

「不老不死には出来ません。でも、寿命を延ばすことは出来るかも知れません」

「分かりました．．．．．それでもいい。もう一度だけでもあなたにまた綺麗だと言われてから死にたい．．．．．」

「．．．．．向こうで寝てるじいさんですね？」

この少年は私の何もかもをすでに知っていた。

私はあの老人と初対面を装っていたけど、違う。私は幾度も幾度もこの何十年あなたの方にお会いしている。

あの方が赤ん坊の頃から。

少年は私の両手を取ると目を閉じた。

その瞬間、

私の全身の斑点から黒い虫が一斉に這い出した。

私は声にならない悲鳴を上げた。

少年はそれにも動じず、死んだような目で私の両手を見つめ握り締めている。

たくさん黒い虫達は私の肌の上を駆け回っていたが、やがて苦しみはじめた。

月明かりが私と少年を照らすと、おぞましい数の黒い虫たちがまるで、月明かりに燃やされるがごとく灰になり灰になり、次々と風に散っていった。

私はその神の仕業のようなめまぐるしい光景をただ震えながら見ていた。

一瞬の静けさ。

私はそっと少年の顔を見る。さつきと顔色も変わらず少年は私の手を握っていたが、やがて離すと私の目を見た。

その目には私を安堵させるものがあつた。

私は自分の体を見た。

黒い斑点たちは消え去っていた

白い肌が．．．．戻っていた。

「不老不死にはなつてませんよ」

私は全身の緊張が溶け、笑った。

「あの、あなた様のお名前は．．．．？」

「山田時雨」

ありがとう。

ありがとう。

夜が明け、雪景色が宝石のように輝いている。

「じいさん、あれは何？」

少年の言葉に老人は寝起きの目をこすり、雪景色を見る。

老人の目の色が変わった。

「．．．．あれは．．．．何てことだ」

私を見て彼は思わず裸足のまま外へ飛び出した。

自分の足が悪いことを忘れてしまったのか、冷たい雪をものともせず彼は転びそうになりながらも子供のように走ってきた。

彼は私に手で触れた。

「．．．．もう朽ち果ててしまったと思っていたのに。何て美しい白い花だ．．．．」

少年が後からやってきて私を見上げる。

また私が見下ろす側になってしまったわね。

「これはわしが生まれた時からずっとあったものなんだよ」

彼は昨日まで眉間に皺を寄せてあんなに険しい顔をしていたのに、無垢な目に涙を浮かべ微笑んでいる。

あなたのその笑顔が見たかった、ずっと。

「何て木なの？」

「白木蓮だ」

「ふーん」

「そういや、お前と一緒に来た女性はどうしたんだ？」

「目の前にいるでしょ」

そんな突拍子もない言葉を少年から言われたのに、彼は一瞬目を丸くしてからゆっくり笑った。

「道理で、綺麗な人だと思ったよ」

私は泣く。嬉しさに泣く。

「じゃあね、じいさん」

「何だ、もう行くのか？ 行く当てはあるのか？」

彼は心なしか寂しげな表情をしている。孫でも出来た気分だったのかしら。

「行く当てなんていつもないよ。おばあさん、たまには人の姿でこのじいさんに会いに行つてやってよ」

少年は私を見上げて言った。

この少年は笑うことは決してないが、それは、顔色も変えずただ静かにいつまでも祈り続ける菩薩のようなものだった。

少年は去つてゆく。

少年の後姿が小さく消えて行つた。

「時雨、何やってんの？」

何も無い地面の土を見つめ立ちつくす俺を見てデッダーが言った。

「不老不死は．．．．．無理だよな」

俺が呟くと、デッダーは笑った。

「けど、その後五十年は生きてたんですよ。十分ですよ。目的はじいさんにもう一度花を見せたかったって事なんだし。いくら白木蓮が何百年生きたところで、じいさんはそんなに生きれんよ？」

「ま、そうだけど」

「お前その後もちよくちよく様子見に行つてたもんな。その二人

を親みたいに思ってたんじゃないの？」

俺の中に闇が広がる。

「さあな」

今は何もないこのただの土。ここにあの白木蓮は立っていた。

時代が流れに流れ、今ここはただの道路脇の土だ。

「それに、不老不死なんて何がいいわけ？ 退屈で退屈で死にそう

だよ……あ、死ねないんだっただよ

デッターはそう言って一人で笑っている。

「……お前って、本当バカだな」

俺がしみじみ怪訝な顔で言うと、奴は更に面白そうに笑った。

俺は今日もまた、こいつのこのバカさに救われる。

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。
彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

八歳の姿で二十年分の心を生きてしまった少女、亞厂^{あかり}。身内もなく、
引き取られた先の一家からはひどい扱いを受け、救いのない日々を
送っていた。そこに一人の見知らぬ少年が現れ、彼女の人生は好転
していくように思えたが・・・

(原稿用紙18枚)

>登場人物<

山田^{やまだ} 時雨^{しぐれ}・・・謎の少年

亞厂^{あかり}・・・八歳にして二十年分の心を生きてしまった身内のない少
女。

霧島一家・・・亞厂が引き取られた先の冷たい家族。

デッター・・・時雨の家に遊びにくる友達らしき人。

夕日に照らされ真つ赤に燃える空。

丘の上から見下ろした街並みも全て赤一色だった。

どこかの小学校から下校の音楽が流れ、子供達の笑い声が聞こえる。

有刺鉄線が巻きついたフェンスの向こうにはさびれた空き地が広がっていた。

「亞厂」
あかり

名前を呼ばれ私は振り向く。

鬼のような顔をした女が冷たい眼差しを向けている。

私の姿は丁度八歳くらいの女兒の姿だった。

黒髪はおかつぱに切りそろえられ、血のつながっていない姉たちが捨てたお古のみすぼらしい服を着せられていた。

どこからどう見ても、私は小学生の姿をした子供だった。

しかし、私の心はとうに二十歳にはなっていた。

私に血のつながった肉親はいない。

私は、実の父の愛人の女の子供だった。実の母は私が赤ん坊の頃に病で亡くなっただけだが、亡くなる前に今の私の偽の家族に私と全財産を託し死んで行った。父は行方知れず。

偽の家族、霧島一家は、父親、母親、中学生と高校生の姉が二人、大学生の兄、七歳の弟という家族構成。この家族の中に私は当時赤ん坊の頃放り出された。

この家族が私を引き取ったのは言うまでもなく、財産目当てだった。

が、その財産が私の手に渡る事はなく、自分達で好き放題に使っていた。

私は幼稚園も小学校にも通ったことがない。

毎日毎日一人でこうしてさまよっているのだ。

一日中行く当てもなく、ただ一人、外をうろろしている。

「邪魔、どいてよ」

重い気持ちで家に帰ると、中学生の姉に睨まれ突き飛ばされた。

継母は自分の子供達には優しく接し、私をゴミのように扱った。

継父は見て見ぬ振り。兄も弟も私をバカにした。

「お前達、夕飯が出来たよ」

継母は笑顔で子供達を呼びに行く。

そして四畳一間の私の部屋に入ると、味噌汁をぶっかけた猫まんまのような飯を無言で置いて行き、ふすまを勢いよく閉めて去っていた。

毎日の事だ。私は他の家族と共に食卓に足を踏み入れることは許されなかった。

夜になり、ボロキレのような薄い布団の中で私は無心で天井を見つめる。

もう悲しいとか苦しいなんていう感情も忘れ去った。感じなくなっていた。

私はずっとこのままなのだろうか。きっと十五歳辺りになったら、家族は私を家から追い出すだろう。何とかすれば自分で働いていける年齢だからだ。家族はその時を待っているのだ。

もちろん今すぐに追い出し捨てる事も出来るが、近所の目もありやっかいな事になるので、面倒なことは避けたいのだ。

「十五．．．．．」

私は指折り数える。果てしない年月に思える。

一日でさえ一年のように長く感じるというのに。

たぶん五歳くらいまでは私の心はその年相応の幼いものだった。

けれど、この過酷な毎日を生きる術として、幼いこの身体を守る為、他の部分でそれらを補おうとしたのか、心だけが急速に成長を遂げていった。

私はこの八年で、二十年生きた心を持っていた。

「亞厂、家にいるんじゃないよ。またどっか行ってきた。夕方まで帰ってくるんじゃないよ」

翌朝も私は外に出る。

継母は強引に私の腕を掴むと私を外に追い出した。

六歳になったあたりから、私は毎日外に出されるようになった。

雨の日も雪の日も毎日外に出された。時間をもてあまし、本屋や図書館へ行つては、たくさんの本を読んだりもした。

幸いまだ雪は降っていないが、もう外は十二月下旬にさしかかる冬の空気で覆われていた。

一枚しか与えてもらえないこの服で、私は何とか寒さを凌ごうとなるべく風の吹かない場所を探して歩く。

いつそ死んでしまいたい。

けれど死ねなかった。十五になれば自由と幸せを初めて手にすることが出来るやもしれないという希望を握っていたからだ。

私は、いつも行く空き地へと向かう。フェンスの破れた箇所からもぐりこみ、大きな木の下にうずくまる。

そして木に向かって一人で話しかける。

だんだん日が沈み、辺りは凍えるように寒さを増していく。

肌が切れるように痛い。

私は自分の両腕をさすり丸くなる。

誰も助けてはくれない。

みんな通り過ぎてゆく。

ふと気がつくと、私の足元の土の上に黒い影があった。

私は顔を上げた。

そこには見知らぬ少年が立っていた。

少年はその場にしゃがむと、うつろな目で私を見た。

「おいで」

一言そう言うと、少年はまた立ち上がり歩いてゆく。

私は自分でも分からぬまま、その少年の後を追いかけた。

どこまで行くのだろう。どこへ行くのだろう。

偽の家族のいる私の家の前を通り過ぎる。ちらりと家の窓を見ると、偽の家族たちが談笑しているのが見えた。

「この家に戻りたいの？」

少年は立ち止まり振り返ると言った。

この少年は私の事を知っているのかもしれない。

少年の質問に私は無言で首を横に振る。

また再び歩き出す彼の後を私もまた追いかけた。

私は無意識に彼の左手を握った。少年は何も言わず前を向いたまま私の手を握り返した。

電車を乗り継ぎ乗り継ぎ、少し都会の方へと出る。電車からの景色がだんだん煌びやかになっていった。

私が少年を見失いそうになり慌てて走ると、彼は必ず足を止めそこで待っていてくれた。

やがてマンションや住宅が建ち並ぶ通りに入ると、あるアパートの前で彼は足を止め、目の前の階段を上がって行った。

角の部屋のドアの前で止まる。中に入ると少年が玄関の電気をつけた。

部屋は六畳一間のシンプルな部屋。ベッドにテレビにソファに小さな木の机が一つあるだけの部屋。

私は風呂に入った。何日ぶりの風呂だろうか。あの家では毎日風呂を使うことも許されなかったからだ。

風呂から出ると、脱衣所に少年のものと思われる半袖の大きな白いトレーナーとタオルが用意してあった。トレーナーは私が着ると足首までの長さがあった。

部屋に戻ると食事が用意されていた。味噌汁と白飯だけではない。いろいろないろんな見たことのないおかずに、ジュースも。

私はいつの間にか顔をくしゃくしゃにして泣いていた。少年が私の頭をなでた。

少年と一緒にごはんを食べた。

こんな些細な小さな事も、私には幸福そのものだった。

私の感情はもう死んでると思っていたのに、自分の中から湧き出る喜びに打ち震えた。

少年は私にベッドを使わせ、自分はソファで眠っていた。

広くてふかふかのベッド。ほのかに石鹸みたいな香りがする。

けれどそのベッドは少し私には広く広く感じた。孤独のようなものを感じた。

なぜか眠れず暗闇の中で目を開けていた。

すると、少年が私のベッド脇に来て座った。

「眠れないの？」

少年が私を見下ろす。迷惑をかけてはいけない。私は慌てて「眠れる」と答え目を閉じ布団を頭からかぶった。

「亞」

布団の向こうから私の名前。少年は私の名前も知っていた。

私は布団から顔を出す。

少年は私の隣に横たわると、何も言わず眠り始めた。

私は心が温かさに満たされ少し涙ぐみながら眠った。彼の手をそっと握って眠った。

翌目目が覚めると、少年は台所に立ってフライパン片手に何かを作っていた。

私が顔を洗い戻ってくると、朝食が用意されていた。

私はその朝食に向かって丁寧に手を合わせ頭を下げる。

「……あなたは神様ですか？」

私は小さな声で彼に聞いた。

少年は黙々と食べながら、

「そんなわけないでしょ。」

と一言呟いた。

「あなたのお名前は？」

「山田時雨」

「漢字は、時間の時に、雨ですか？」

「よく知ってるね。一回で俺の名前を聞き取ってそのうえ漢字まで当てた人はあなたが最初だよ」

「山田さん、なぜ私を……」

私はいつまでここにいられるのだろう。迷惑はかけられない。

でもあの家には二度と戻りたくない。でももし捜索願いが出ていたら？

「あなたの心はもう二十年くらい生きてしまったみたいだね」

私は食べる手を止め少年の顔を見た。

「……なぜ知っているんですか」

「さあね」

「やっぱり神様なんですか」

「違う」

「捜索願いとか出てるでしょうか……？」

「見に行ってみる？」

私は頷いた。

きのう来た道をまた戻る。電車を乗り継ぎ乗り継ぎ戻る。

偽の家族のいる家の前に私は立った。少年の上着の裾を握り後ろに隠れる。もしもまた連れ戻されたらどうしよう。小さく体が震えた。

窓からちらりと継母の姿が見えた。目が合ってしまった。

継母は鬼のような形相になると駆け足で玄関の外へと飛び出してきた。

「おまえどこ行ってたんだよ！？ 本当にやっかいなガキだね！

あんたがこの子を見つけてくれたの？」

継母は訝しげな目で少年を見た。たぶん少年が私を連れ回したとでも思っているのだろう。

「ええ。誘拐してました」

少年はさらりと言った。

「ふざけんじゃないよ！！ 警察呼ぶからね！」

その叫び声に家の中から兄弟たちもぞろぞろ出てきた。

「おまえどこ行ってたんだよ」

兄弟たちは私を蔑んだ目で見た。

「あんたたち本当にこの子が必要なの？ 憂さ晴らしするペットが欲しいだけでしょ。そのペットがいなければあなたたちは自分の存在の均整を保てないからでしょ」

少年は表情も変えず言った。

母は激怒した。本音を言い当てられたからだろう。

「誘拐犯のくせに何もってもらしい事言ってたんだよ！？」

継母は少年に食ってかかると、私の腕をちぎらばかりの力で引っ張った。

少年は継母の腕を掴み返すと私から引き離し、暴れ狂う猛獣のような彼女を突き離れた。

兄弟たちは母に駆け寄り私たちをもろすごい形相で睨んだ。

「あんたたちは人の苦しみを身を持ってよくお勉強する事だね。頑張ってね」

少年は腹を立てる様子もなく淡々とそう言う私の手を取り、元来た道をまた歩き出した。

「この誘拐犯のガキが！！ 警察に訴えてやる！！」

どす黒く渦巻く魂から絞り出されるような悪魔のような声で継母は言った。

少年は私の手をひいたまま継母の方を振り返り横目で見た。

その死んだような目は、無言で人をひれ伏す空気と、刀の切っ先のような光を放っていた。

継母はその目に一瞬たじろぎ黙ってしまった。

一週間が経った頃、私は少年の家でテレビを見ていて信じられない光景を目にした。

私の偽の家族の継父、いつも我関せずな態度でたいてい新聞を読んで座っていたあの継父がニュースに出ていた。

少年の家に遊びに来ていた友達のデッダーさんという人が、パソコンで同じニュースを見てその記事を読み上げた。

「女子高の男性教諭、霧島新一、五十四歳。校内で更衣室などを盗撮。教員資格取り上げ、解雇処分……だって」

その後、それをきっかけに私の事も明るみになり、継母と兄弟達は近所から非難を浴びて、あの家にはいられなくなった。自暴自棄になった継母は子育てを出来る状態ではなくなり、兄弟たちは大學生の兄をのぞいてそれぞれバラバラに施設に預けられ、兄は学校に通うお金もなく退学し、バイトをしながら一人細々と暮らしているらしい。

霧島一家は崩壊した。

継母は今どうしているのだろうか。

私はその後、新しい両親に引き取られた。両親は自分達の実の子のように私を可愛がってくれた。

正直、少年とこれからも暮らしたいと思った。私にとって初めての肉親のような兄のような存在だった。

けれど少年は、

「俺はあちこち転々としてるし、ずっとそばにいる事も出来ないし、学校に通わせてあげる事も出来ない」

と言い、たまに会いに行くと言ってくれた。

ある日の日曜日、少年は私を遊園地に連れて行ってくれると行っ

た。遊園地に行くのは生まれて初めてだった。

遊園地の観覧車が遠くに見えるにつれて人がたくさん増えてきた。私は少年と手をつなぎ心踊らせる。

と、その途中、道の脇に一人のホームレスがうずくまっていた。

汚れた姿に絶望的な眼差しで、道行く人々に必死に物乞いをしていた。

よく見るとそれは女性で、あの継母だった。

私は少年の顔をそっと見上げた。彼は真つ直ぐ前を見ていて継母には気がついてないようだった。

が、継母の前まで来た所で彼はゆっくり立ち止まった。

少年がしゃがみ継母の顔を見ると彼女はハツとして表情を強張らせた。

次に継母は私に気がつくかと体を小さく震わせはじめた。

そんな彼女に少年は一枚の紙切れを渡した。

「ここに行つて働きな。自分の気が向いたら施設にいる子供に会いに行けばいい」

その後聞いた話では、継母は少年から渡された紙に記されていた小さな工場で働き始め、まるで心が死んでしまったかのように大人しく一人で暮らし、たまに大学生の兄が会いに行つてるといふ。

少年は紙を手渡すと、また私の手を引いて歩き出した。

私は何とも言えぬ複雑な心境で継母の姿を見送った。

一つ不思議な事がある。

その後、何年間に渡つて私は少年と定期的に会い続けた。

けれど、どんどん成長していく私の隣で、少年はいつも、初めて会った当時と同じ若さだった。

そして私が十九歳に成長した時、私は初めてその事について言及した。

すると少年は、

「今頃？　今まで何年もあったのに今頃その事について気になりましたの？」

と昔と変わらぬ淡々とした口調で言った。

私は笑った。

「やっぱりあなたは神様が何かなんですね」

「いいえ。何者でもありませんよ」

しかし、

その後にはそれは起こった。

私が二十歳の誕生日を迎えた時だった。

その日の朝、私は鏡に映る自分を見て愕然とした。

私は少年と出会った頃の八歳の姿に戻っていた。

> 続く <

第5話 「亞厂（あかり）>後編<」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。

彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

>前回までのあらすじ<

八歳の姿で二十年分の心を生きてしまった少女、あかり亞厂。身内もなく、
引き取られた先の一家からはひどい扱いを受け、救いのない日々を
送っていた。そこに一人の見知らぬ少年が現れ、彼女の人生は好転
していくように思えた。しかし二十歳の誕生日を迎えた朝、彼女の
姿は少年と出会った頃の八歳の姿に戻っていた

（原稿用紙 20枚）

>登場人物<

山田 やまた 時雨 しぐれ・・・謎の少年

亞厂 あかり・・・八歳にして二十年分の心を生きてしまった身内のない少
女。

源 みなもと 伊織 いおり・・・以前、山田時雨と会ったことがある人間（第一話に
て）。

デッター・・・時雨の友達らしき人。

二十歳の誕生日を迎えた朝、私は鏡に映る自分を見て愕然とした。私は少年と出会った頃の八歳の姿に戻っていた

瞬きをした次の瞬間、目を開けた私は声にならない悲鳴を上げた。夕日に照らされ真っ赤に燃える空。

丘の上から見下ろした赤一色の街並み。

小学校から下校の音楽が流れ、子供達の笑い声が聞こえ、有刺鉄線が巻きついたフェンスの向こうにはさびれた空き地が広がっていた。

「亞厂」

名前を呼ばれ私は振り向く。

鬼のような顔をした女が冷たい眼差しを向けていた。

継母だった

嘘だ。

嘘だ.....

八歳の時に見たあの光景。同じ状況。同じ場所。

私は、あの冷たい一家の元で苦しい毎日を送っていた八歳の頃に、また舞い戻っていた。

私は継母の声から必死に逃れ、死に物狂いで走った。

「山田さん！！ 山田さん！！ 助けて！！」

私は叫んだ。

その時、私の脳裏にある不安がよぎった。

もしかしたら.....もしかしたら、私はこれを繰り返しているのではないだろうか？

私は八歳の時すでに心だけ二十年生きたかのように成長していた。それは違う。

実際に二十年間生きたのだ。

そして二十歳になるとまた八歳の時のこの同じ地点に戻ってくる。

それを何度も何度も永遠に繰り返しているのではないだろうか？
でも、前回八歳だった時に自分が二十年生きた記憶など一切な
った。なのに今回はしつかりとその記憶がある。
なぜ……………。

そしてもし、

「もう二度と山田さんが現れなかったら……………」
いつの間にか私の足は止まっていた。

呆然とする私の目の前に継母が立っていた。

私はまた霧島家へと連れ戻された

翌日、前回と同じ時刻に同じ空き地へ行き、同じ木の下で山田さ
んを待った。

しかし、

彼が現れる事はなかった。

「おい、源伊織。何さぼってんだ」

耳元に突然響いたその声に私は慌てて飛び起きる。

「すみません！ あの、別に寝ていたわけでは……………」
顔を上げ声の主を見る。

一瞬私の中で時が止まる。息を止める。声の主を凝視する。

「山田時雨！！」

考えるより先に心の叫びが声になった。

「何でわざわざフルネームで……………」

山田は段ボールの上に座り頬杖をついてこっちを見ていた。

「会いに来てくれたんだ！」

「相変わらず自信過剰な人だね。暇だからこの辺ふらふらしてただ
け」

山田も相変わらず死んだようなぼーとした目で私を見ながら、
低い声で淡々と言った。

彼とは八ヶ月前にたった三回会っただけ。何者かはいまだに分か

「あつそ。じゃあね」

さくつとそう言つと、山田は躊躇もせずさつと立ち上がり潔く倉庫を出て行つた。

「ぎゃー！！ 待つて！ 嘘だつてば！！ 待てー！！」

私はクマの頭の中から声を出して山田に呼び掛けたが、屋上内の音楽にかき消されて届かない。

着ぐるみのクマの手で叩くとやつと彼は振り返つた。

が、振り返つた山田は私の背後に視線を向け、何かに言葉を失い呆然としていた。

そして私を通り過ぎるとその視線の方へと走つて行つた。

「待つて。どうしたの？」

私も追いかける。

そこには、小学校二年生くらいのおかっぱの女の子が一人で立っていた。

山田はその子の手を取るとしゃがんだ。

「………亞厂？」

あかり？ 誰だろう。

「私は自分のこの姿を見て思いました。私は二十歳の誕生日を迎えるたび八歳に戻るのではないかと。そしてそれが永遠に繰り返されているのではないだろうかと」

小学生にしてはやたらに大人びた落ち着いた口調で少女は言った。

少女は何もかもを失つたかのような魂の抜け殻のような顔をしていた。

その途端

少女は幻影のように突然消えた。

山田の手からするりと少女の手が消え、空を掴むような形をしたその手をゆっくり下ろした。

「どういふことだ………」

山田は呟くと、力なく立ち上がった。

いつもの彼らしくない。

「今の子は？ 何かあったの？」

「あなたには関係ないから。気にしないで」

そう言っただけは屋上出口へと向かって行った。

その出口の向こうにはデッダーくんが立っていた。

「時雨」

デッダーくんの声に気付く、山田は顔を上げた。

「時雨、もしかしたら伊織ちゃんも関係あるかもしれない」

私は仮病を使い仕事を早退した。

山田とデッダーくん連れられ、あるさびれた空き地へとやって来た。

真つ赤な夕日に街並みが染まっている。

デッダーくんは廃材の上に腰掛けながら山田を見て言った。

「時雨。最近、おまえが記憶を消去しなかった人間は？」

「この人と、亞」

山田は私を指差した。

「うーん」

「まさか、それが関係してんの？」

山田は宙を見ながら考え込んでいた。

「いや分からん。けど、やっぱまずいと思う。そういう些細な事が大きなゆがみを生むんだよ。過去も変えるんだよ。伊織ちゃんの中にあるおまえの記憶も消去すべきだったし、亞ちゃんにしても、新しい両親に引き取られた時点で消去すべきだった」

デッダーくんは山田を責める口調ではない。しかしその言葉にも、山田は何も答えず宙を見たままだ。

「何で消去しなかった？ 今までは何も言わず消去してきた。なのに伊織ちゃんの時、おまえは自ら、記憶を消去しなければならぬ事を伊織ちゃんに告げ、彼女がそれを拒否するようにもっていった。まるで、その言葉を……伊織ちゃんが消去しないでくれと

頼むその言葉を待つていたかのように。何で？」

まだ山田は黙ったままだ。

「時雨？ 聞いてんの？」

「聞いている」

「何で？」

「.....」

私は二人のその会話をただ聞いているしか出来なかった。

私の中にある山田の記憶は消されてしまっただろうか。

デッターくんは小さく溜め息をついた。

「ま、何で、なんて質問は愚問だつて分かつてるよ。理由は分かつてる。けど消去しないと。きっと亞厂ちゃんと同じ事を繰り返すと思っ永遠に」

「他に方法は？」

山田がやつと口を開いた。

「分からん」

私には一体何の話なのか理解できない。けど何か大変な事が起きているという事は、山田のいつもの彼らしくない雰囲気に分かった。

「伊織ちゃん、そういうことだから」

デッターくんが立ち上がり私に言う。

「.....私の中の山田時雨の記憶を消去するってこと？」

「と言つても、俺には出来ない。時雨しか出来ない。時雨」

デッターくんは山田の顔を見た。

「もし消去しても変わらなかつたら？」

山田もデッターくんを見て言った。

「その時は他を考える。けどだからと言って、また自分の記憶を残す為に一度記憶を消去した人間の前に再度現れるつてもだめだよ」

山田が私の方を振り返った。

私はゆっくり後ずさる。

嫌だ。

けど私のせいで亞厂ちゃんという子が大変な事になっている.....

でも、でも、そんな

山田が私を見下ろす。無表情の死んだような目で。

「君がそういう目をしているのはこういう事だったんだね。いちいち感情を持つていたら心が揺らぐからでしょ？」

私は悟った。涙を流しながら微笑んだ。

私の想像の及ばない場所に彼はいる。けど、きっと仕方ない事なのだ。私は自分に言い聞かせ、意を決した。

山田の瞳の奥にある表情が、私の言葉にわずかに揺れるのを感じた。

「時雨」

デッカーくんも彼の中のその小さな揺らぎを感じたのだろう。もう一度声をかけた。

山田は私を見つめた。

「さようなら。山田時雨」

「さようなら．．．．伊織」

私はもう一度微笑んだ。

私の中から彼の姿が霧のように消えていく

「時雨、おまえが亞厂ちゃんの元にもう一度行かないと、彼女はきつとおまえを待っている。前回とはまた違う次元、もう一つの亞厂ちゃんの人生だ。そこではおまえの記憶があるままだ。おまえが行かないと、今度の彼女の人生は前回のようにはいかない。霧島家が崩壊する事はないだろう。あれはおまえがやった事なんだから」

「分かってる」

「彼女は前回八歳だった時点では、他の人間と同じように普通に一度きりの人生を送っていただけだった。が、おまえが現れて彼女を救い、二人の記憶を消去しなかったことで何らかのゆがみを生じ、彼女の過去を変えてしまった。彼女はエンドレスで二十歳までの人

生を何度も繰り返す．．．．．という過去に変わった」

「でも前回の時点でも亞厂は、二十年生きた心を持った」

「．．．．．それはたぶん、俺の推測だけど、心のどこかでおまえが自分を救いにくることを感じていたのかもしれない。そしておまえが来ること二十歳までおまえと会い続けるという未来を予知していたのかもしれない」

「それが何で二十歳という区切りなんだ？」

俺とデッダーは考えた。

そして俺達は二人とも同じ考えに到達した。

「亞厂の人生は元々二十歳までだったのか．．．．．？」

二十歳までしか予想できなかったのは、元々二十歳で死ぬ運命だったからだ。

「亞厂ちゃんが新しい両親に引き取られた時点でおまえが彼女の中のおまえの記憶を消去したとする。その後彼女は普通に人生を送り二十歳でこの世を去る運命だったんだ」

「そこに伊織がどう関係してくる？」

「これも俺の推測だけど、直感で正しい答えだと感じる。もし亞厂ちゃんの記憶だけ消去し、伊織ちゃんだけ残していた場合もまた同じ事を繰り返すだろう」

「何で？」

「不公平だろう亞厂ちゃんからすれば」

「不公平？」

「おまえは亞厂ちゃんと会う前の地点で伊織ちゃんにすでに会っている。亞厂ちゃんの中の未来予知の中にはその映像も含まれていた」

「まさか．．．．．。ていうか混乱してきた」

「八歳の亞厂ちゃんが自分の未来映像を見た時、そこには、自分が二十歳で死んだ後も、伊織ちゃんとおまえは会い続けている映像があった。自分が死んだ後、伊織ちゃんだけが唯一おまえの記憶を持った人間だったからだ。そして二十歳で死ぬその日を迎えた時に、

その死を避けまた八歳に戻る。そうすればまたおまえが来てくれるけど永遠にそれを繰り返すわけにはいかない。そこでおまえはどうしたらいいかと考える。で、今の俺達の会話に辿りつくんだよ」

「二人の記憶を両方消去しなかったからだって考えるわけだ」

「そう。だから伊織ちゃんの記憶を消去するまでは永遠に繰り返される」

「それってつまり……」

「亞厂ちゃんはおまえの事が好きだった。でも本人は気づいてないみたいだね。亞厂ちゃんの記憶だけ消そうが残そうが、自分は何の道二十歳で死ぬ。そのあとの未来を見て伊織ちゃんに嫉妬したんだ。」

俺は一日遅れで八歳の亞厂の元へまた会いに行った。

そして亞厂が新しい両親に引き取られた時点で、何も言わず、彼女の中から俺の記憶を消去した。

彼女は二十歳まで幸せな毎日を送り、二十歳の誕生日を迎えた日、突然の脳梗塞でこの世を去った。

彼女が八歳に戻ることはもう二度となかった。

俺はデパートの屋上へ足を運ぶ。

伊織は今までと変わらずそこで働き、遊具の前で子供達の世話をしていた。

彼女の中にもう俺の記憶はない。

俺と以前会った事も知らない。

俺と会ったことがきっかけでOLから転職したわけだが、今の伊織の記憶の中では、ただ気が変わって転職をした、くらいなものになっていと思う。

と突然後ろから腕を引っ張られた。デッダーだった。

「時雨、おまえ何やってんの」

「何も」

「何もじゃないよ。バカなことは考えるな」

「やれやれという感じで、奴は俺の腕を引っ張る。」

「時雨、おまえ最近、柘植文人みたいになってるぞ」

「誰だっけ、それ」

俺はソファーに仰向けになってマンガを読みながらとぼけて適当に答えた。

「とぼけるなよ！ 伊織ちゃんのストーカーだった男だよ！」

デッダーは俺に詰め寄って呆れ顔で言った。

「ああ、あれね。一緒にすんな」

「一緒だろ！ ったく、ちよこちよこ伊織ちゃんを見に行きやがって」

俺はそれを聞いてマンガを床に置き、ソファーから起き上がってデッダーを見た。

「ちよこちよこって……ってことは、おまえが俺のストーカーじゃねーかよ？ 何おまえ俺のこと尾行してんだよ？」

俺達は睨み合いになる。奴は言葉に詰まり、冷や汗を流している。俺も奴も返す言葉がない。しかし負けたくない。どっちも引けない。が、デッダーは俺の目にたじろいで引き下がった。

「ま、まあ、いいわ。そのうちどんな事になっても知らないからね。奴は俺に負けた事を認めたくないようで強がりと言った。」

俺はまたソファーに寝転がってマンガの続きを読み始めた。
「……………一度記憶を消去した人間のところにもう一度会いに行ったら、どうなるんだろ」

俺があくまで独り言のように呟くと、奴は俺の胸元を掴んできてメンチを切ってきた。アニメみたいな可笑しい顔になっている。

「落ち着け。今のは俺の独り言でしょ」

俺は冷めた目で言う。

「ああ？ どこがだよてめー?!」

こっぴつして今日も暮れてゆく。

Vol.7 「空のカケラ」(前書き)

第7話 「空のカケラ」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。

彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

ミュージシャンとしてバンド「SKY」で天下を目指す流しゅうだったが、
実際はそれとは程遠い現実。そこへある少年が現れ、バンドは流れ
を変えてゆくが・・・

(原稿用紙26枚)

>登場人物<

山田やまた 時雨しぐれ・・・謎の少年

流しゅう・・・売れないバンド「SKY」のボーカル兼ギター

紅くれな・・・SKYのベース

雷らい・・・SKYのドラム

俺は自分のロックバンドでいつか天下を取ることが夢だ。

日本中に俺達の名前を知らしめる。

いつか必ず、俺等のバンドの名前が日本中の至るところで見れる日が来るのだ。

そう信じ、がむしゃらにやってきた。

明けても暮れても俺の頭の中には音楽しかなかった。

しかし現実はどうだ。

高校一年の時からやってきて二十七歳になった今でも、ワンマンライブさえ出来ない。客が百人も入れないほどの小さなライブハウスで月に一回ライブが出来ればいい方で、いつも他のバンド達と一緒にのタイバンだ。

「今度は何色に染めようかな」

俺は鏡に映る自分の赤い髪を見て言った。ここはライブハウスの薄汚れた楽屋。

「おい、流。んな何回も染めてたら、そのうちハゲっぞ」

ドラムの雷が笑った。

その後ろで、ベースの紅も笑っている。紅はどっちかと言うとビジュアル系な女の子。細身な外見でボーイッシュなショートカットの黒髪。目の周りに黒いラインを入れて念入りにメイクをしている。うちのバンドは、ボーカル兼ギターが俺で、ドラムが高校時代からの同級生の雷。ベースは紅一点の紅。「SKY」という分かりやすい名前のスリーピースバンド。俺達個人のそれぞれの名前は三人とも本名じゃない。

俺等の出番になり狭い舞台へと出て行く。

もうすっかり見慣れた光景だが、客は五十人ほどしかいない。しかもタイバンなので、この全部が俺等のバンドのファンなわけではない。虚しいものだ。

歌っている途中、ふと客の一番後ろのはじにいる男に目がいった。どっからどう見てもロックが好きそうな奴には見えない。というか、音楽自体に興味なさそうな顔をして、黒いフードを頭からかぶりただっ立っている。

男は俺をじつと見ていた。何なんだあいつ。
四曲演奏して出番が終わりライブも終わり、俺達は後片付けに入っていた。

その時、視界の片隅にさっきのあの男の後姿が見えた。黒いフードをかぶった背のどかい後姿が去って行く。

俺はなぜだが奴の後を追いかけていた。

ちようどライブハウスを出た所で追いついた。

俺が声をかけようとする前に奴の方が振り向き横目で俺を見た。

一瞬体が凍りつくような冷たいうつろな目をしていた。奴は立ち止まり俺が何か言うのを待っている。が、俺は何も言えなくなってしまう、ただ奴のその目に動けなくなっていた。

「何？」

ついに奴の方から口を開いた。

「ロックとか好きなの？」

俺も何とか言葉を探して喋る。奴の目に負かされそうになり、強気な態度でガンを飛ばしながら言う。

「別に」

「じゃあ、何でライブなんて見に来てたの？ 知り合いがいたとか？」

「いいや」

「じゃ、何で？」

「あなたは誰なの？」

誰って……失礼な奴だな。

「さっき演奏してただけだ」

「ああ、あの人ね」

「どうだったうちのバンド？」

「心がこもってなかった」

「は？ うちのバンド全部がか？」

「いや、あなただけ。何か他の事でも考えてたんじゃない？」

俺は否定できず腹が立った。

「ロックも知らねー奴に何が分かんたよ？」

「ジャンルは問題じゃないでしょ」

奴は全く表情も変えずそう言うと、去って行くこととした。俺は奴の腕を掴んだ。

「だったら、お前は何か出来るのかよ。歌えんのかよ？」

「あなたが、うちのバンドどうだったって聞くから思ったこと言うただけでしょ」

俺はまだ黙ってしまった。

「流、何やってんの？」

向こうから紅が俺を呼ぶ声がして俺は振り向いた。

「あの人がボーカルやった方がいいんじゃない？」

奴が俺の後ろで呟いた。

「は？」

俺が奴の方を向き直すと、奴の姿はなかった。

一週間経っても俺の頭から奴の言葉が離れなかった。

スタジオでの練習の休憩中、俺は思い切って提案してみた。

「紅、おまえボーカルやってみない？」

「え、何言ってるの？ 出来るわけないじゃん」

紅は首を横に振って笑った。

「急にどうしたの？」

雷がドラムスティックをてのひらの上で回しながら笑った。

「いや、試しに一回だけ歌の方やってみて欲しいんだけど」

俺が真剣な顔で言うと、紅の顔から笑顔が消えた。

「マジで言ってるの？」

紅がベースを弾く手を止めて言うと、

「俺そういえば紅の歌って聞いたことなかったかも」と雷は面白がる様子で言った。

「無理だから。下手だし」

「一回だけでいいから。うちのバンドの曲で歌ってみて。ベースはとりあえず置いて」

紅はものすごく嫌がったが、俺のしつこい頼みについに折れた。

「一回だけね。笑わないでよ」

紅は大きな溜め息をつきマイクの前に立った。

俺はギターを弾き、雷がドラムスティックを打ち鳴らし、ベースはなしで演奏を始めた。

紅の声が演奏に乗る。

普段は割と低めの声の紅なのだが、歌うと細い透明感のある声に変わった。

俺はギターを弾きながらその不思議な旋律に聞き入った。

ドラムを叩きながら雷も思わず目を丸くしていた。

歌唱力は天才というほどのレベルではないが、そこそこ上手だ。

この何とも言えない歌声は何だろう。

何ていうか……

俺等のバンドの曲に、完璧に調和していた。

翌月、俺達は先月ライブをやった同じライブハウスでライブをやる事になった。

しかし先月とは違う。

新しく男のベースメンバーをもう一人加入させ、ボーカルは紅だった。

舞台上上がり、紅の声に乗せ俺はギターを弾いた。

今まで感じた事のない高揚感を俺は感じた。まるで何かが自分の中に降りてきたかのような最高の感覚だった。

こんなに小さい舞台なのに、まるででっかいドームとかで何万人を前にしてやっているかのような異様な感覚。

自分が生きている事に感謝し、喜びに全身が打ち震えた。

その神の領域にでも踏み込んだかのような音楽は、客にもそのまま伝わった。

客から驚きの拍手喝采がわき起こった。

俺は汗を流しながらその余韻に酔いしれた。他のメンバーも皆同じだった。

何かを成し遂げた、何かに辿りついたという核心に触れたような気がした。

それから、まるで嘘のような事が次々と起こりだした。

俺達のバンドをたまたま見に来ていたプロデューサーが俺達をスカウトすると言い、念願のCDデビュー。

テレビ番組に初めて出場し一度演奏しただけで、またたくまにあちこちからオファーがかかり、雑誌にラジオに取材にと俺達は毎日飛びまくった。

あっという間に俺達は天下に上りつめ、何万人を前にライブをするという夢は現実となった。

街中のあちこちに俺達のポスターが貼られ、バンドの「SKY」という名前のロゴを街で探すのは容易な事だった。

その日も俺達はライブを大成功させ、メンバーやスタッフと飲み屋で打ち上げをして盛り上がっていた。

ふと隣に目をやると、俺達の椅子席から少し離れた向こうの座敷席に見たことのある男がもう一人の男と一緒にいた。

「あつ、あれは……」

俺は椅子から立ち上がり、その男の元へ駆け寄った。

「あの」

俺が緊張しながら声をかけると、男は箸で漬物を口に運んだまま

俺を見上げた。

「何？」

あの日見たあの目と同じ。死んだようなうつろな目で男は俺を見た。

「数ヶ月前になるのですが、ライブハウスであなたに声をかけて、それで、うちのバンドの事でアドバイスをもらい……」

俺はたどたどしい言葉をつなげて敬語を使い必死に説明した。

男は自分の向かいに座る眼鏡をかけた男の方を見た。眼鏡男は無言で酒を飲んでいる。

「思い出せない。会ったっけ？」

男は俺を見ずに答えた。芸能人としての俺の事もどうやら知らない様子だ。

「その時は俺がボーカル担当だったんですが、あなたがうちのメンバーの女の子の方がボーカルをやった方がいいって……。それで本当にそうしてみたら、すごいブレイクしてデビュー出来たんです」

俺は興奮ぎみに言った。

「ふーん」

男は興味なさそうな声で、相変わらず漬物を食べながら言った。

「時雨、おまえバンドとか興味あったっけ？」

眼鏡男が笑って言った。

「ない」

男は短く答える。

「流、もしかしてその人って！」
後ろから紅と雷が来た。

「あなたがアドバイス下さった方ですか？ 流からあなたのこと聞いていてお礼を言いたいってずっと思ってたんです！」

紅が感極まった目で言った。

「そんな事あったような気もするような、しないような」

男が適当に言うと、紅は笑った。

「もし良かったらライブ見に来て下さいませんか？ チケット無料でお渡しますので！」

紅の言葉に、

「いや、興味ないので、すみません」

と男は頭を軽く下げて答えた。

「じゃあ、なぜあの日ライブハウスにいたのですか？」

紅は不思議そうに聞く。

「何となくふらっと立ち寄っただけだから」

男はテーブルに視線を向けたまま言った。

「それに、あのままいったら何か……………」

「あのまま？」

「あのまま売れなかったら……………」

男はそこで言葉を止めると、また食べた。また食べた。

紅も雷も黙ってしまった。

「まあ、もういいんじゃない？ 売れたみたいだし」

男は淡々と答えた。

「あの、お名前は？」

紅が聞くと、

「山田時雨。時の雨でしぐれ」

「山田時雨……………素敵なお名前ですね」

あの日、この山田という不思議な男は俺をじっと舞台の下から見ていた。

あのまま売れなかったら、俺が人生を脱落した廃人になるとでも思ったのかもしれない。

正直、あの時の俺は精神的に限界が来ていた。もうこのまま永遠に自分は成功なんかしないという破壊的な闇に包まれそうな危うい所にいたからだ。

その翌週、紅の強い希望で山田時雨をうちのバンドメンバーの飲

みに誘った。もちろん彼は嫌がったが、紅は彼が折れるまでしつこく誘っていた。紅は、彼は私達の救世主だ、と言った。

夜も十二時をまわり、飲み屋からカラオケに場所を移してまた飲み直しだいぶ酒も回ってきた頃、山田は電話だと言って携帯片手に部屋を出て行った。

その後バレバレな不自然さで紅も部屋を出て行った。

「あいつ絶対、山田くんのこと好きだよね」

雷が酒で顔を赤くして笑った。

誰が見ても紅の態度はバレバレだった。

俺はこっそりと部屋を抜け出し、二人の様子を野次馬精神で見に行った。

山田は誰も居ないエレベーター前で階段に座り、壁にもたれながら携帯で電話をしていた。

紅は彼の電話が終わった頃を見計らうと、横に座り話しかけた。何を話しているかは分からない。

と、大胆にも紅は彼に抱きつきキスをした。

「あいつ何やってんだ……」

俺は溜め息をついて小声で呟く。

が、山田は抵抗する様子もなくされるがまま無表情なうつろな目で紅を見ている。

紅は何の反応も見せない彼を見て涙を浮かべ、更に大胆にも、彼の頬や手の指にもキスをして抱きついた。まるでキリストを崇める信者のごとく。

「紅ってあんな大胆な女だったのか。相当惚れてんな……」俺はちよつと笑う。後で雷にも教えてやろうと思った。

山田はやがて自分に抱きつく紅の両手を掴むと自分から離し、立ち上がった。

俺は慌ててダッシュで部屋に戻る。

その後から、山田が部屋に戻って来た。紅はトイレに行ったらしく、その後、目を少し赤くして戻ってきた。

「何か、満たされないんだよね」

レコーディングスタジオの休憩室で、突然ぼつりと紅が言った。

「急にどうしたんだよ」

俺は煙草を吸いながら彼女を見た。

紅は空虚な目をしている。夢を手にしたはずなのに。むしろ夢を叶える前の方が生き生きしていたかもしれない。

「夢叶えてスターになったのに、満たされないんだよ」

「何で？」

「分かんない」

「山田時雨が関係あるとか？」

俺がからかい半分にそう言うと、紅は喋るのをやめた。

「男なんて他にもいるだろ。今のおまえと付き合いたいて言ってる男は山ほどいるんだし」

「彼は私の救世主なんだよ」

「そうかもしれないけど……………」

「彼がいなかったら……………」

「俺達は売れな……………」

「私は死ぬつもりだった」

俺が喋り終わる前に、紅は言った。

「……………何だつて？」

俺は紅の方を向いた。

「自分が死ぬか、誰かを殺すかだった」

「……………だ、誰を？」

とんでもない言葉を彼女の口から聞き、俺は動転した。

「一体誰を殺すつもりだったんだよ？」

俺が紅の腕を掴むと、彼女はゆっくり俺の方を見た。

何も言わずただじっと俺の目を見た。

「……………まさか、俺？」

何てことだ。こんな事知りたくなかった。聞きたくなかった！

「何で？ 何でだよ？ 俺がおまえに何かしたか！？」

俺は叫んでいた。

「流はいつも自分本位で、自分が目立つ事ばっか、自分が売れる事ばっか、それしか頭になかった。正直、私はあるに才能があるとは思えなかった。私が歌った方が絶対売れると思った！ でも我慢してきた！」

紅は堰を切ったように不満をぶちまけ始めた。

「私はある日、ライブが終わったらあんたを殺るか、自分が死ぬかどうかを実行しようと思ってた。もう限界だった。けど、その日のライブで彼がいた。舞台から彼の姿が見えたの。あの人を私を救ってくれるような気がした……………」

紅もあの男に気がついていたので。

「そして彼は私を救ってくれた」

紅は病的な笑みを浮かべた。

「だったら何が不満なんだよ？」

俺の背中を汗が流れていた。

「とぼけないでよ」

紅の目の色が変わった。殺気を感じた。

「何をだよ……………」

「あんた、このバンド抜けて、自分一人でソロで活動して行くことしてんでしょ」

俺はごくりと唾を飲んだ。

「しかもそれだけじゃない。私の悪い噂をネットとかで流して、私をつぶそうとしている。私を妬んでね。私はあるに世に出る為の道具にすぎないんだよね」

紅はまた笑った。

「本当あんたって男は…………どこまで腐ってるわけ？」

その後のことをよく覚えていない。

逆上した紅はテーブルにあつた大きなガラスの灰皿で俺の頭を何度も強打した。

俺の意識はそこで途絶えた。

あの男が言つてたのは俺の事じゃなかつたんだ。

紅の事だつたんだ。

あのまま売れなかつたら．．．．．というあの男のセリフの後に続く言葉は

「あのまま売れなかつたら．．．．．あの子はあるを殺つてただろうね」

俺は自分の意識が覚めるのを感じ、はつと目を開けた。

ぼやけた白い視界に、見慣れたあの男。山田時雨の姿があつた。

「俺は生きてるのか．．．．．？　ここはあの世か？」

俺は辺りを見回した。どうやらあの世ではないようだ。白い壁に白いカーテン。ごく普通の病院のベッドに俺は横たわっていた。

「雷くんが助けに入つてかろうじて助かつたんだよ」

山田は椅子に座つて足を組みながら雑誌をパラパラめくつて言った。

「紅は．．．．．？」

俺が震える声で言うと、山田は手に持っていた週刊雑誌を俺に見せた。

「え？」

そこには見知らぬ女性が家族らしき人間たちと笑う写真だつた。

「この人は誰？」

「紅」

俺は彼の言つてる意味が分からなかつた。

「紅つて．．．．．」

その女性はどう見ても六十年代辺りの年配の女性だつた。

「紅はあの後、一年ぐらいは芸能界を離れていたけど、その後復帰して、あんだのいないあの元のバンドで活動を続けて、更にその後結婚、芸能界引退をして、今は一般人として幸せな主婦になつた

とさ………」

山田は他人事のように淡々と言った。

「……何を言ってるんださつきから？」

俺は身体を起こそうとした。鉛のように重くて動かない。

すると山田は俺に鏡を見せた。

その鏡に映ったものは、

白髪の老人だった。

俺は必死に身体を起こし、自分の顔や手足を触った。

「あんたはかろうじて助かったが、植物人間になり何十年も眠り続

けた。もちろんその間、雷くんも紅も見舞いには来たよ何度もね。

紅は自分のした事を償おうと自傷した事もあった」

「待ってくれ!!! じゃ……俺の人生は………」

「目が覚めた事だし、まだこれからがあるでしょ」

山田は椅子から立ち上がり、立ち去ろうとした。

俺はベッドから転がり落ちながらも彼の足を掴み、懇願した。

「俺は確かに最低な人間だった! けど、それにしてもこの仕打ち

はひどすぎる!」

俺は何度も彼に手を合わせ、許してくれと繰り返した。

足元にしがみつくそんな俺を上から見下ろした山田時雨の目が忘

れられない。

感情のない死んだような目だった。

次の瞬間目を覚ますと、またベッドの上だった。

もしかしたらあの頃に帰ってやり直せるかもしれない思ったが、

甘かった。

俺は老人のままだった。

きつと、俺が目覚めた事に気がついて医者や看護婦が走ってくる

事だろう。

しかし、

俺の耳に飛び込んできたのは拍手と歓声だった。

「何だ？」

急に目の眩むような光に照らされ、俺はその光を手でさえぎった。どうにか目をこじ開けまわりを見渡すと、俺の目に飛び込んできたのは、大勢の人間だった。

俺はベッドから立ち上がる。どうやら俺はどこかの舞台にいるらしい。

わけも分からなまま目の前の幕が下り、俺は足が勝手に進むまま歩いた。そこは楽屋だった。

顔を洗い終わり鏡をのぞくと、そこには二十七歳の自分がいた。ふと横の壁に目をやると、演劇の舞台のちらしが貼ってあり「S KY」というタイトルが書かれていた。

ストーリーの欄には「ミュージシャンを目指す男が苦悩の果てに辿り着く人生の最後とは――」などと書かれていた。

「……夢？」

「あなたはあなたが本当に願う人生を創造してその舞台を生きて下さい」

声の方にいたのは山田時雨。

彼が俺を抱きしめると、俺はまた気が遠くなった。

「流！ 流！！ お願い目を覚まして！！」

名前を呼ばれ目を開ける。またベッドの上だ。

しかし今度俺の目に飛び込んできたのは、目を腫らす紅。そしてバンドメンバーやスタッフたちだった。

俺は初めて自分の口から紅に謝罪の言葉を述べた。

「もう一度全部最初からやり直したい……」

紅は泣いて言った。

俺達の中でいつの間にか粉々になってたそれぞれの感情の破片、

忘れてしまった破片。それによってお互いがお互いを傷つけ合っていた。

最初に見た景色を忘れていた。自分達で壊し続けていた。そのカケラたちは歩み寄り、大切な事を思い出し、初めに夢見ていたあの輝いた景色をもう一度織り成す。

今日もまたライブを大成功させ、俺達は打ち上げで盛り上がる。そして俺達は、何かを思い出せずにいる。そんな気がする。

「この前、誰かもう一人、ここにいたような……」
紅が呟く。

「気のせいだろ」
俺は笑った。

Vol. 8 「埋められた鍵」 (前書き)

第8話 「埋められた鍵」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。

彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

菅生は定年退職を迎えたばかりの男。が、家族も身寄りもなく生き
がいない。そこへ見知らぬ少年が「そこに落ちていた」という赤
ん坊を連れて現れ、菅生の家に居座るようになる。段々二人に対し
て自分の子のような愛情を感じ始める菅生だったが、妙な夢を毎晩
見るようになる。

(原稿用紙27枚)

>登場人物<

山田 時雨・・・謎の少年

菅生・・・定年退職を迎えた一人暮らしの男。

俺は今日定年退職を迎えた。

しかし、

妻もいない。子供もいない。親は両方とつくに死に、一人っ子なので兄弟もいない。

親戚は遠くにいて付き合いなんてないし、近所付き合いもない。友達もいない。会社の人間との付き合いもない。恋人もいない。ペットもいない。

その上、趣味も何もない。酒もやらない。タバコもやらない。ギャンブルもやらない。女遊びもした事がない。

行きたい場所もない。夢もない。目標もない。

ただ毎日がそこにあるから、会社に毎日行き、毎日同じ事を繰り返して、働いてきた。

かと言って、会社や働く事に情熱を持ってバリバリ働いたわけでもない。

ただ、生きているから働く。それだけの事だった。

これからは更に何もなくなるだろう。

けど死にたいという考えも全くなかった。死にたいなどと思うほど、人生を真剣に生きたり悩んだり苦悩したりもしていなかったからだ。

俺は生きているが生きていなかった。

神はこんな人生を俺に与えて、一体何を学ばせようとしているのだろう。

定年退職を迎えた翌朝。

いつも起きる時間に自然と目が覚め、顔を洗い、何をするでもなく外に出てみる。

「その公園にでも行ってみるか」

俺は独り言で呟き、小さな公園に向かう。別に行きたいわけではないが、何もする事がないので何となく歩いてみる。

誰もいない朝七時の公園。

ベンチに座り無心になる。

何もする事も考える事もない。

「静かだな」

また独り言でつぶやく。

と突然、俺の膝の上にドサリと何かが降ってきた。

「うわあっ！！」

俺は心臓が止まりそうになって声を上げた。

俺の膝に置かれたそれは、赤ん坊だった。ぐずって今にも泣きそ
うだ。

「泣きそうですよ」

すぐ横で聞こえたその声に振り向くと、いつの間にか隣に見知らぬ少年が座っていた。年は二十歳くらいだろうか。風船ガムをふくらませて、俺の膝の上の赤ん坊を見ている。

「こ、この赤ん坊は？」

「落ちてた」

「……………お、落ちてた??」

「うん。向こうの草むらに落ちてた」

少年はまるで、赤ん坊を物のように言った。これだから若い奴は……。

と言っても俺も赤ん坊の扱いなんて分からない。見よう見まねに腕に抱きあやしてみる。何でこんな事に……………。

が、赤ん坊はついに大声で泣き出してしまった。

「おーよしよし。泣くな泣くな」

俺は苦手な笑顔を必死に作り泣き止ませようとしたが、そんな努力も虚しく、赤ん坊は更に激しく泣く。

「この子は警察に届けないと」

少年に向かって言ったが、少年はガムを噛みながら赤ん坊を見つめたままだ。

赤ん坊は近所中に響き渡る声を上げた。こんな所を人に見られたら怪しまれる。とにかく早く警察に行こう。

そう思った時、少年がひよいと赤ん坊を子猫のようにつまみあげた。そして腕に抱くと赤ん坊は嘘のように泣きやんだ。

こんな笑いもしない仏頂面の少年に抱かれてなぜ泣き止んだのか理解出来なかった。

「よし。泣きやんだ事だし、警察に届けよう」

俺は立ち上がり少年の肩を叩いた。

すると少年は表情のないうつろな目で俺を見上げた。

「だめだよ。おじさんと俺で飼うんだから」

あれから毎日、少年は俺の家に入り浸るようになった。

「これは犯罪だぞ。早く警察に……」

そう言っただけで俺が赤ん坊を抱くと赤ん坊は狂ったように泣き、

「おじさんと離れたくないんだよ」

と少年は他人事のようにのん気に言った。

俺も寂しかったのだろうか。

こんな事はいけないと分かっているのに、この赤ん坊を家に連れ帰り世話をしていた。

「……何てこった」

少年は家出をしてきて住む所もないと言う。

俺が今住んでる家は一応マイホームだ。別にマイホームというものに夢を持っていただけでも何でもない。ただ引越すのも面倒だし住みたい場所もないので、死ぬまでの家を確保しておこうと若い時に買ったものだった。そのローンも去年やっと払い終わった。

一人で住むには少し広い家。部屋もあまってるので少年を住まわせてやっている。

身も知らぬ子供が二人増えた。一体これからどうすればいいのかわからない。

「おじさん、腹減った」

テレビを見ながら赤ん坊にミルクをやっていると、少年が俺の隣に座って言った。

「冷蔵庫に何か入ってるだろ。それよりこの赤ん坊の名前は？」

「知るわけないじゃん。男だしポチでいいんじゃない？」

少年は冷蔵庫をあさりながら言った。

「ポチって、犬じゃないんだから。いつまでもここに置いておくわけにはいかないだよ」

「別にいいじゃん。どうせ落ちてたんだし」

「おまえな、落ちてた落ちてたって、赤ん坊を物みたいに言うな。早くどうにかしないと」

俺は赤ん坊をあやししながら溜め息をついた。すると赤ん坊がまた泣き始めた。

「ポチ」

少年はそう言って、泣きわめく赤ん坊を俺の手から抱き上げた。するとまた赤ん坊は泣きやんだ。

「ポチはやめろ、ポチは」

あれから二週間、少年はすっかり俺の家に居つき、当たり前のように生活をしている。

少年の名前は山田時雨と聞いた。

仕方ないのであいつ専用の茶碗やらを買って置いてやった。

朝リビングのソファで目が覚めると、俺が寝る隣で絨毯の上に布団を敷き、時雨が赤ん坊を抱いて二人ですやすや眠っていた。

正直、可愛いものだと思った。

俺にも子供がいたらこういう生活があったのかなとふと想像して、一人で笑った。

時雨が自分の息子のようには思えてきた。全く笑わない奴だし生意気な喋り方もするが、いい子だ。

「菅生さん」

声をかけられ振り向くと、たまに挨拶をかわす程度の付き合いだが、すぐ近所に住むおばあさんだった。

「おはようございます」

「その子は？」

時雨と、時雨の腕に抱かれ目を丸くする赤ん坊の姿を見て言った。

「あ、えーと、親戚の子がちょっと遊びに来てて……」

俺は怪しまれないよう苦し紛れに必死に嘘を並べた。

「まあ、そうですか」

俺の言葉を信じたようで笑顔で去って行った。

「危なかった……」

俺はひやひやしながら言った。

「ポチ、散歩に行くか」

時雨は赤ん坊のおでこに自分のおでこをつけて言った。

「だからポチはやめろって！　ますます犬みたいだろうが」

しかし、そんな時雨の顔を見て赤ん坊は楽しそうにキヤッキヤと笑っている。

時雨は俺の言葉を無視して歩いて行った。

「おい、あんまり人が多いところに行くな！　見られたらまずい！」

毎日毎日この繰り返し。

この少年はいつまでここに居る気なのだろうか。

そして赤ん坊をどうするつもりなんだろうか。早く警察に届けないよ。

そう思っているのに行動に移せない自分がいた。

夕方になり夕飯を作る。もちろん時雨の分もだ。赤ん坊のミルクは時雨が作っている。

「おまえそろそろ家に帰らなくていいのか？ 親が心配してるんじゃないのか？」

時雨と夕飯を食べながら俺は聞いた。

「家もない。親もない」

「えっ？ だって家出して来たって……」

「嘘」

「嘘？ じゃあ、今までどこにいたんだ？」

「いろんなところを転々と」

「年はいくつなんだ？」

「さあね。忘れた」

「それで、いつまでここに居る気なんだ？」

「迷惑なんだ？」

「いやいや、そういう意味で言ったんじゃないよ。一生いるのか？」

「おじさんが思い出すまで」

「………思い出す？」

「何を思い出せばいいかも思い出せないんですよ」

「何の話だ？」

「さあね」

少年は意味の分からない事を言った。

その夜、俺は夢を見た。

浮かぬ顔をして草むらに立ち尽くす自分がいた。夢の中の俺はこつちを見ていた。

ほんの数秒の短い映像。

ふと目を覚ますと、もう朝だった。

「またソファで寝てしまった」

俺は体を起こしあくびをした。

隣に目をやると、布団では時雨が寝ていた。自分の部屋があるのに、いつもここで寝る。

赤ん坊は寝てるかなと時雨の腕の中をそっと覗いた俺は、呼吸が止まった。

一瞬、時雨が抱いているのが赤ん坊ではなく子犬に見えたからだが、もう一度目を細めて見てみると、いつもの赤ん坊だった。「だいぶ老眼がすすんでるな最近。いや、時雨が赤ん坊をポチ呼ばわりしすぎるからだ……」

しかし、ある日を境に時雨は姿を消した。赤ん坊と共に。「きつとあいつが何とかしてくれたはずだ……」

面倒な赤ん坊もいなくなったし、時雨もどこか他の場所を見つけたんだろーし、これでまた今までどおりの日々が戻ってきた。そう胸をなでおろした。

そう思ったはずなのに、人生で初めて味わう感覚が自分の中でしこりとなって残っている事に気がついた。

寂しい。

それから道歩いてて赤ん坊の泣き声がすると反応してしまったり、時雨と後姿が似た少年を見つけると思わず本人か確かめようとしてしまう自分がいた。

その日も俺は二人の面影を探しその辺をうろろ歩き、何となく一日が暮れてゆき、家に戻ってきた。

家に入ろうとして異変に気付く。

「ん？」

家に明かりが点っている。それにいい匂いがする。

鍵でドアを開けようとして、もう開いている事に気がつく。

台所に向かうとそこには、赤ん坊を背中に背負って夕飯を作る時雨の姿があった。

「……時雨」

俺は駆け寄った。

「おじさん、おかえり」

時雨はいつもの無表情な顔でこっちを見ずに言った。

「おまえ急にいなくなっでどこ行ってたんだ？」

「心配してくれてたの？」

「ま、まあ．．．．．」

「用事があったから他のところろろしてた」

「そうだったのか」

俺は時雨と赤ん坊の頭を順番になでた。

その夜、俺はまた夢を見た。

浮かない顔をした俺は草むらに立ち尽くしこっちを見ていたが、その場にしゃがみ何かを拾っていた。

その手には鍵が握られていた。

俺はそこで目を覚ました。

「あの鍵どこかで．．．．．」

俺は目を開けて咳いた。

「どうしたの、おじさん．．．．．」

時雨が俺の声に目を覚まし、薄目を開けてこっちを見た。

「いや、何でもない」

「何か思い出した？」

時雨はまたこの間と同じような意味の分からない事を言い出したが、赤ん坊を抱き寄せるとまた眠ってしまった。

「ポチ、散歩行くか」

時雨は相変わらず赤ん坊をポチ呼ばわりする。

「せめてもつと人間らしい名前と呼んでやれよ」

「じゃあ、海は？」

「おお、海いいな」

俺はそう言っただけで笑った所で、何か引かかった。何か分からないが、何か引かかる。

「どうしたの？ やっぱポチがいい？」

考え込む俺を見て時雨が言った。

「いやいや、ポチはやめろって。海か．．．．．。時雨、海行っ

てみるか？」

「別にいいけど」

いい具合に涼しさを感じる残暑の海。日の光を反射して光る波がどこか寂しげに感じた。

砂浜は、たまに犬を散歩してる人が一人来るくらいだった。

時雨は赤ん坊を砂浜に下ろすと自分も裸足になって座り、砂遊びをして遊んでやってる。赤ん坊は手足を動かして嬉しそうにはしゃいでいる。俺は二人のその後ろ姿を微笑みながら見つめた。

その夜、俺はまた同じ夢を見た。この前の続きのようだった。

草むらから鍵を拾った俺は古い作りの家に入り、棚から小さな木の箱を取り出すと箱についてる鍵穴にその鍵を差し込んだ。

そこで目が覚めた。夜が明けていた。

「あの箱もどこかで……」

頭をひねったが思い出せなかった。

隣を見ると、時雨はまだ眠っているが赤ん坊は自分で起き上がったのか布団の上に座っていた。無邪気な笑顔で笑い、時雨の頭を叩いている。

「よし、抱っこしてやる」

俺は赤ん坊を抱き上げた。赤ん坊は声をたてて笑った。

「おまえはいずれちゃんとした施設に届けなといけない。いつまでもここにはいられないんだよ？」

俺はため息をつきながら赤ん坊に話しかけた。

その途端、赤ん坊は泣き出した。

「おじさんが変な事言うからだよ」

布団にうつ伏せになりながら横目で俺を見て時雨が言った。

「何だ、起きてたのか」

「どうせ落ちてたんだからもらっていいんだよ。誰かが捨てたわけだし」

「……またおまえ。落ちてたとか物みたいに言うなって」

俺はため息をつきながら腕の中の赤ん坊を見た。

「えっ……」

赤ん坊がない。部屋の中を見渡したがどこにもいない。

……手の中に何かがある事に気がついた。

見ると、それは古びた鍵だった。

「だってそれ、物だし」

時雨が俺の手にある鍵を指差して言った。

「どついう事だ……」

思考が停止してしまい、何が何だかさっぱり分からない。

俺はもう一度その鍵を見つめ、はっとなった。

「この鍵……夢の中に出てきた鍵に似ている……」

その時、俺の中の記憶が走馬灯のようにものすごいスピードで昔にさかのぼった。

夢に出てきたあの木の箱。あれは実家で見たような気がする。し

かし、実家はもう何十年も誰も住んでおらず、廃墟と化しているはずだ。その映像が頭をよぎった途端、手の中から鍵が消えていた。

俺はすぐに出掛ける支度を始めた。

「急にどうしたの。どっか行くの？」

時雨が頬杖をついて言った。

「おまえも来るか？」

「どこに？」

「うちの実家だ。と言ってもまだ残ってるか分からないけどな」

「何か思い出したの？」

時雨はまた同じ言葉を口にした。俺はゆっくり彼の目を見る。

「……おまえ、何か知ってるんだな？」

この子は何かを俺に知らせようとして現れたのか？

「さあ……」

東京駅から特急列車に乗り、三時間かけて実家へと向かった。

もしもまだ実家が残っていて、もしもあの木の箱があれば、きつと近くに鍵があるはずだ。

そうだ。夢の中で俺は、家の庭らしき草むらで鍵を拾っていた。

もしかしたら落ちているのかもしれない。

俺の心臓は不安で高鳴っていた。

何か触れてはいけないものがあの箱に入っているような気がしてならなかったからだ。

実家のある地元駅に着き、タクシーで家に向かった。

親は二人共、二十年前に亡くなった。それ以来一度も帰っていないかった。

タクシーの窓から流れる風景は昔と何も変わらず、緑豊かな田舎風景だった。

実家が段々と近づく。それは遠くからでもすぐに分かった。

草が生い茂り、荒れ果てたぼろぼろの木の家が見えた。

タクシーから降り、草をかきわけかきわけ庭の奥へと侵入する。

「蚊に刺された」

時雨が呟く。

「草が荒れ放題だからな」

俺は夢で見た辺りの草をかきわける。この荒れ放題の草むらから鍵を探すことは相当困難に思えた。

が、何か光るものが視界に入った。以外に早く見つかるかもしれない。草をかきわけると、それは空き缶だった。肩を落とす。

時雨はというと、廃墟となった実家に靴のまま上がり、中を散策しているようだった。

俺は汗をかきながら手が泥だらけになりながら黙々と探し続けた。

その時、

「……あ、あった」

俺は小声で呟いた。夢で見た物が本当にそこにあった。

泥だらけのその鍵を持って玄関の裏に行き、井戸水で洗った。

その鍵を手にそのまま家に上がり、木の箱を探した。

「おい、時雨どこだ」

俺が呼ぶと彼は奥から出てきた。

時雨が出てきた部屋に見覚えがあった。

「この部屋かもしれない」

俺は部屋に入ると夢の中と同じ棚を探した。

タンスの一番上の小さな引き戸。それだと確信した。

木が傷んでなかなか開かないその引き戸をこじあけた。

木の小箱だ――。

鍵穴がついている。

何もかも夢の中と同じだ。

俺は手が震え、それを開ける決心がつかなかった。開けるべきなのだろうか。鍵がかかっているという事は開けてはいけないという警告ではないのか？

「開けないの？」

時雨が言う。

いや、夢に何度も出てきたという事は、やはり見なくてはならない何かがあるからだ。

俺は決心すると鍵を差し込み蓋を開けた

すぐに目に飛び込んできたそれに、俺の呼吸は一気に激しくなる。理性を失いそうになり悲痛な声を上げた。

俺は立っている事が出来ずその場に崩れ落ちた。

呼吸が乱れ涙が次々と顔を流れた。

震える手でそれを手に取る。

――これは、俺の息子だ。

色褪せた写真。笑顔の赤ん坊。

名前は、海だった。

その写真の下に、小さな白い紙に包まれた何かがあった。

それを開けるまでもなく中身はすでに思い出していた。

中には小さな小さな骨が入っていた。海の骨のほんの一部だ。

海は生まれてからたった一歳で重い病にかかりあつけなく死んだ。俺が四十歳の時だった。

その悲しみは想像を遙かに越えていた。

妻も親も、そして俺もどんなにこの子の誕生を喜んでいた事か。

あの無垢な笑い顔。小さな儂い体。柔らかい頬。

それがたったの一年で奪われた。

俺の悲しみは、悲しみを悲しみと感じる感覚さえも奪い、ある日、海の写真と骨の一部を箱に入れ鍵をかけ、その鍵を実家の庭の土に埋めた。箱の方を埋めなかったのは、心のどこかで海が死んだという現実を認めたくないという気持ちがあったからだった。その骨だけは土に返したくなかった。

海の記憶や自分に妻がいたという記憶さえも、俺はそこで海の死と共に葬り去った。

俺の記憶の中から完全に抹消した。

そうしなければとても生きてはいかれないほどの、気の狂うような悲しみだったからだ。

その日を境に俺は感情を捨て死んだようにただ一人で生きてきた。

「彼は自分の記憶をあなたに葬り去られた事を悲しんでいたんだよ」

顔を覆い全身を震わせながら泣く俺に時雨が言った。

「たった一年でも彼はあなたの愛情をちゃんと感じていた。だからあなたの記憶から消された事が悲しくて、あなたに思い出して欲しかった。その彼の念が鍵に宿り、赤ん坊の姿をとってあなたの前に現れた」

「でも、おまえが連れてきた赤ん坊は海とは似ていなかった……」

「そりゃ、あなたが彼の面影をも完全に消していたから。彼はその鍵を思い出させたかった。自分の事を忘れないでいて欲しかったんだよ」

子供のように大声で泣く俺を、時雨はいつまでも抱きしめていた。

まるで成長した海がそこにいて、この弱い俺の全てを許してくれているかのようにだった。

東京に戻り、親の仏壇の隣に小さな海の仏壇を作った。

海が亡くなったあと初めての墓参りに行き、墓を丹念に掃除し、包みの中にあつた小さな骨も一緒に納めた。

線香を焚き手を合わせながら、俺は時雨に聞いた。

「おまえはどこの子か知らないが、もう行ってしまふのか？」

彼に背中を向けたまま聞いた。

「……」

時雨は黙ったままだった。

「そうか。寂しくなるな……」

俺は立ち上がり、涙をこらえ笑顔を向けた。

「……また会いに行つてあげるよ。おじさんが死ぬまで」

思いも寄らない言葉を耳にし、俺は言葉を失った。

「……無理しなくていいんだぞ」

本当は会いに来て欲しい。でも彼の重荷になつてはいけなないと思
い俺はそう言った。

「おじさんこそ無理してんじゃないの？」

「何を？」

「本当はまた俺に会いに来て欲しいんですよ」

時雨の言葉に俺は笑った。この子に嘘をついても全て見抜かれ
てしまふ。

「そういえばおまえ、あの赤ん坊、俺の息子をとんでもない名前で
呼んでくれてたな？」

俺はふと思いついて更に笑った。

「だってあれ自体は幻影みたいなもんだし。ただの鍵で物だから。
彼の魂の源はちゃんと別の場所にあるし」

時雨は不思議な事ばかり言う。

それから時雨はちよくちよく俺に会いに来てくれている。
海が生きていたら、丁度これくらいの年齢になっていたのだろう。

今初めて、自分が生きている事を実感する。

自分には感情があり呼吸をしているのだと感ぜられる。

これからは笑顔で海の写真に向かう。海を毎日思い出す。

時雨がいる事で、俺は強くなるうと思えた。

そして、自分の愛情から目をそらさず怖がらず、俺を救ってくれたこの子に、俺に生きる事を取り戻させてくれたこの子に、その愛情を、俺が死ぬまで注ぎ続けていこうと思う。

Vol. 9 「孤独の結末」(前書き)

第9話 「孤独の結末」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。
彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
短編小説。

バカにされ続けた自分を変えるため行動を起こす芹沢冬。そこで偶然出会った少年から彼女の道は広がっていくが、孤独の中にある闇は知らず知らずのうちに深まっていた。そして孤独の先に待つ結末は……

(原稿用紙48枚)

>登場人物<

山田 時雨やまた しぐれ……謎の少年。

芹沢 冬せしざわ ふゆ……自分を変えようと決意し、殻を破るため行動を起こす少女。

デッダー……時雨の友人。

源 伊織みなもと いおり……時雨とは以前から知り合いで、彼に思いを寄せる少女。

息を吹き返したように意識が戻ると、もう朝。
でも私の腕の中にあの背中はない。

「帰っちゃったか」

ふっと笑みがこぼれる。

「何をそんなに焦ってるの」という彼の言葉を頭の中でもう一度再生して、胸がしめつけられた。

笑っているのに涙が流れる。

部屋に一人取り残された自分。誰も私を気にかける者などいない。私の悩みなんてものは他人からすれば、どうでもいいこと。

よろよろとした足取りで風呂にむかい、バスタブに熱いお湯を張って入ると、その中でまた泣いた。

とりあえず家に帰ろう。家に帰っても一人ぼっちだけど。

脱衣所の鏡の前でまたきのうと同じ服を着て、ドライヤーで髪を乾かす。

風呂場の扉を開けると、カーテン越しに漏れる朝日が眩しくて頭痛がしそうだった。

ベッドに置いてあるカバンとコートを取りに部屋に入る。

「長い風呂だね」

低い声。

はっと息を吸い込み顔を上げる。ベッドの上で寝っ転がり目を閉じる彼の姿

。ここまでのいきさつはこうだ。

私は必ず変わってみせる。

日の当たらない影でびくびくしながら生きるのもう嫌だ。
もっと堂々と自信満々に街を歩きたい。

今まで私の事を、暗い女とか地味だとか、ブスだとか、つまらない奴だとか、真面目すぎだとか言って笑って見下してた人達を必ず驚かせてやるんだ。

私は前の私とは違う。

生まれ変わるんだ。そう情熱を持って私は自分に打ち勝つ決意を固めていた。

「芹沢冬。二十歳です！」

私はかすかに震える両手を膝の上で合わせ、はきはきと答えた。

「元気がいいのはいいんだけど……。君、こういう仕事する子には見えないんだけど、大丈夫？」

「大丈夫です！」

この面接を落とされてはならない。私は無駄に声だけ張って明るさをアピールしようとした。

「仕事するようになったら、もっと着飾ってもらわないと。メイクとかした事あるの？ それ今すっぴんだよね？」

「はい。働かせて頂く事になったらちゃんとメイクとかしてきます！」

「男の客と喋ったりできるの？」

「はい、頑張ります！」

「何で君みたいな真面目そうな子がこの仕事したいと思ったの？」

「ええと……。変わりたいんです！」

「なるほどねえ……」

店長はため息混じりに言った。

店長が困るのも無理はないだろう。今の私は黒ぶち眼鏡に黒髪を後ろで一つに束ね、地味なトレーナーにズボン姿。とてもキヤバ嬢なんてガラじゃない。

「今の感じじゃ何とも言えないからさ、髪セットしてメイクとかもした姿を来週一度見せに来てくれる？」

来週の約束の日まであと一週間。私はその日までに見違えるほど変身して、店長をあっと言わせるんだ。

そして私はナンバーワンになってやるんだ。けど、私には何よりも初めに越えなければならぬ大きな壁があった。

私は今まで一度も男の人と付き合った事がない。つまり、一度も何の経験もした事がない。

まわりの子達はみんな経験がある。二十歳になってもまだなんて恥ずかしすぎる。二十歳なんてまだまだこれからだと言う人もいるけど、私はそれを早く捨て去りたかった。

もし店のお客さんとそういう話になったり、万が一そういう場面になって、経験がない事がバレてしまったらと思うと恥ずかしくて死んでしまいたくなる。

私はその壁を早く越えてしまいたい。

私は冬の夜の街をうろついた。誰かに声をかけられるのを待った。

と言ってもまだ初めだ。

最初から派手に着飾って行って、私の事を経験豊富な女だと勘違いして怖い男が来てしまったら嫌だ。

だから私はなるべく清楚な慣れてない雰囲気を出すべく、見た目に気を使った。

黒髪はたらし、花柄のワンピースを着て上に白いロングコート
を羽織り、少しだけ薄いメイクをしてコンタクトをつけた。

全身が震えていた。

寒さのためじゃない。怖くて怖くて震えが止まらなかった。

でもそれでも、その怖さを上回るほど私は経験者に早くなりたかった。胸を張って堂々としていたい。今のままじゃ自分が人生の敗者になったような惨めな気分だった。

そんな私の心配とは裏腹に、いくら待てども私に声をかけてくる男の人は誰もいなかった。

だんだん心が折れそうになる。やはり私には魅力がないのだろうか。真面目に見えるのだろうか。

こうなったら、自分から声をかけるしかない。私には時間がないのだから。

しかしそれはそれで難しかった。

どの人に声をかければいいのか真剣に悩んだ。もし警察に連れて行かれたら終わりだし、もし変な男だったら命が危険だ。もし逆に説教されたらどうしよう。もし私が初めてだと言って引かれたらどうしよう。

怒濤のように雑念が頭の中を飛び交った。

いまだき風な派手な男の人もだめだ。かと言って、おじさん？ 仮にも初めてなのだからおじさんは嫌だ。何歳くらいの人がいいだろう。真面目そうな人？ でも待つて。真面目そうな人に声をかけて、もし向こうも初めてだったら？ それも嫌だ！

私の思考は収拾がつかなくなっていた。

その時だった。

私の目の前を背の高い男の子が通りすぎた。

フードを頭からかぶり、黒い上着のポケットに両手を突っ込んで寒そうに体を丸めて歩いていた。

地味で大人しそうな感じだ。でも背は高いし、そこそこかっこいいかもしれない。けど、未経験者だったら？

と、いつまでもうろろろしていても埒が明かない。

私は全ての勇気を出して、後ろから震える声で呼び止めた。

「あの、すみません……………」

男の子が振り向いた。冷めた目つきで、横目でじろりと私を見た。その目に一瞬気がひるむ。

「あの、少しお時間頂けませんか？」

「何で？」

「お話しだけでも聞いて頂きたいのですが……………」

「寒いから早くして」

ぶつきらぼうに男の子は言った。怖いな．．．．．失敗したかな、と心で思う。

ガムを噛みながら彼は私をじつと見下ろす。

「えっと、何ていうか．．．．．初対面の方に突然こんな事言うのは何なのですが。驚かれるかもしれないのですが．．．．．」

私はその時気がついた。気持ちばかりが前のめりに突っ走ってしまつて、声をかけた時に何て言えばいいかセリフを用意しておくのを忘れていた。

「要点だけ早く言ってくれる？」

男の子はまたもやぶつきらぼうに言った。

「要点．．．．．つまり、そのですね．．．．．私と、その．．．．．」

「寒いからもう帰っていい？」

私の言葉をさえぎって彼は淡々と言い放つと去って行くとした。

「えっ、待って、ちょっと待って下さい！」

「何？」

じろりと私を見るも決して足は止めず、さつさと歩いて行く。私は必死に追いかける。

「ここにー！」

私はそこにあつたラブホテルを指差して言った。彼はやっと足を止め、私の指差すほうに視線をやった。

「ここに、私と入ってほしいんです．．．．．」

「何で？」

「何でって、それは、その．．．．．そのままの意味です」

「だから何で？」

「何でと聞かれても．．．．．とにかくお願いします。一晩だけでもいいので」

「俺、金とかないし」

「あ、いえ！ お金はいりません！ だからお願いします」

「あなたの目的が読めないんだけど」

「目的は．．．．．」

「ただやりたいから？」

「．．．．．ま、まあ、そんなところです」

「嘘つくな」

彼は私何か発言するたび、それを簡単にスパツと切り捨てた。

「嘘じゃありません。本当です！」

私は彼を逃すものかと必死だった。

「顔に嘘だつて書いてあるよ」

「嘘じゃありませんてば！」

私はまた無駄に声を張った。

「何でもいいけど、寒いから帰るね」

彼は再び去って行く！

「待つて下さいって言ってるのが分からないんですか！？」

私は少し腹が立って、おもいきり彼の腕を掴んだ。

「目的を言え」

私の必死な強気の状態にも全く動じず、冷めた目を私に向けて彼

は言った。

「目的は．．．．．経験した事がまだないので、経験者になりた

いんです」

私は観念して本当の事を言った。とても恥ずかしかった。

「何で？」

「何で何では分かりですね！」

私はだんだん喧嘩ごしになる。

「彼氏とすればいいでしょ」

「彼氏なんていません。時間がないんです。来週までに変わりたい

んです」

「何で？」

私は泣きたくなくなってきた。何なのこの人はっ！

「何が何でも変わらないとけないんです！」

「あつそ。他の男に声かけなよ」

再び去ろうとする彼の腕を私はがっしり掴み離さなかった。

「しつこい女だな」

彼は困り果て呆れた様子で言った。心がめらめら燃えてる私とは逆に彼は相当寒いらしく、首をすくめ下を向いている。吐く息が白くけむっていた。

「寒い．．．．．」小さく呟く彼。

「寒いなら早く中に入りましようよ?」

強引に連れ込もうとする私を、彼は上目遣いで見た。

「言つとくけど、中に入つても何もしないよ」

「え．．．．．」

それじゃ意味がないんだけど。いやいや、でもとりあえず入ろう。その後の事はまたそれからだ。

「とりあえず中に入りましよう」

私は彼の腕を引つ張った。

「あと宿泊料も出さないよ」

「分かつてますよ、そんな事!」

私はぶんぶん怒りながら中に入った。

しかし、入ったはいいがそこでしどろもどろになってしまう私。

何せこんな場所来た事ないのだから。

「ホテル入ったことさえないわけ?」

入り口でおるおるする私の後ろから彼は冷めた口調で言った。だるそうに壁にもたれて相変わらずガムを噛んでいる。

「はあ．．．．．」

思わず溜め息がもれる私。

何とか部屋に辿り着く事が出来た。

中は温かい。テレビやなんかでしか見た事のない景色が目の前に現実に広がる。緊張が高まってきた。

「あの、あなたのお名前は．．．．．」

と振り向くと、彼はさっさと風呂に入っていた。

「えゝ．．．．．」

私は家を出る前に風呂には入ったばかりだった。落ち着きなく部屋を見てまわり、うろろろする。

少しすると彼が風呂から出てきた。服はさっきのままだ。

と、彼はそのままベッドへ直行し、向こうを向いて寝てしまった。

．．．．．

「ちょっと待って下さい！ 寝ないで下さいよ！」

私はベッドに上がり、彼の背中を両手で揺さぶり、目を閉じる彼の顔を覗きこんだ。

「さっき言った事聞いてなかったの？」

彼は目を閉じたままと言った。

「何もしない．．．．．って言うあれですか？」

「そう」

何とかしなければ。でもどうやって？

私はぽつんと一人取り残され放置され、呆然となった。

「．．．．．そんなに私は魅力がないのでしょうか？」

さっきまでの情熱はどこへやら、すっかり弱気になった私はうつむき力なく呟いた。

彼はゆっくりこつちに体を向け腕枕をすると、うつむく私を見上げた。

「一体何でそんなに焦ってるの？」

「．．．．．自信を持ちたいんです。魅力的な女の子になりたいんです。二十歳になってまだ未経験とか嫌なんです。他の可愛い子たちみたいに私もなりたいんです」

私はうつむいたまま、素直に思ってる事を喋った。

「ふーん」

「私ってやっぱり魅力ないでしょうか？ ブスなんでしょうか？」

私は彼の目を見た。

「可愛いと思うよ」

唐突な彼のその言葉に私は不覚にも赤くなってしまう目をそらし

た。

「じゃあ、なぜ私を．．．抱いてくれないんですか？」

「それとこれとは別でしょ。それが望みならそれ目的の男誘ってきなよ」

「．．．．．そうですか」

「キスもないの？」

「．．．．．はい、すみません」

「いや、別に謝られても」

彼は溜め息をついて起き上がると私の目の前にあぐらをかいて座り、そのままこっちに顔を近づけてきた。私はびっくりして身構える。緊張が走り呼吸が止まりそうだ。彼の冷めたような目が見つめている。

私はどうしたらいいのか分からず、ただただ動かず固まっていた。そして．．．．．

あろう事か、目の前にせまる彼の顔をとっさに両手でおしのけてしまった。私の手の平に彼の唇が触れている。

「おい．．．．．」

彼はその体勢のまま呟くと私から顔を離し、また溜め息をついた。

「そんなんでよく．．．．．」

「すみません．．．．．」

私は自分の情けなさにますます自信が奪われていくようだった。あれだけ大きな事を言っただけ彼を無理やり誘ったのに、このざまだ。

と肩を落す暇もなく、私は両手首を掴まれそのまま後ろへ押し倒された。腕を動かそうとしてみたが、まるでびくともしない。

恐々と目を開けると、彼の目が私を真っ直ぐと見下ろしていた。両手首を押さえつけられたままもう一度彼の顔が私に近づいてくる。私は呼吸とそつと整え覚悟を決める。彼の甘い匂いがふつと鼻先をかすめた。私は目をぎゅつと閉じてその瞬間を待つ。

しかし、その瞬間が訪れない。両手首にかかっていた重みが解かれ私の腕は自由になる。片目をゆっくり開けて確かめると、彼はま

た向こうへ体を向けて寝ていた。

「……………どうしてやめるんですか？」

「無理」

「なぜですか？」

「その一線踏み越えたら、その先までやりたくなっちゃうから」

「私はそれが望みなんです」

「俺が無理なんだって」

「罪悪感……………とかですか？」

「まあ、そんなとこ」

なぜか、そんな彼の背中が愛おしく感じた。冷たい人かと思いきや、なんだか脆い部分を感じる。

「……………何してんの」

彼が小さく呟く。その愛おしく脆く見える背中を私はぎゅっと包む。恋愛というより母性みたいな感覚だろうか。

「別に何もしてません」

「いや、してるでしょ」

彼の声が、私の頬に触れている大きな背中に響いて伝わってくる。そのまま私は眠ってしまった。何も考えたくなかった。そのまどろみの中に溶けて消えたかった……………。

……………これがいきさつの全てだ。そして翌朝起きると、消えたと思ってた彼はまだベッドにいた。

私はもう一人だと、そう信じ切ってたから、彼の何気ない声が想像以上に温かくて、自分が自分で思っている以上に孤独を感じてたことを実感してしまい、緊張の糸がぶつつり切れてしまった。

その場につつ立ったままバカみたいに泣く私。

「……………え、俺が風呂が長いつて言ったから？」

ベッドから起き上がった彼は私の元へ歩いてきて言う。

「そ、そんなわけ……………うう、ないじゃ……………ないで

すか．．．．．」

言葉にならない言葉で泣きながら喋る私の頭に彼はぼんと手を置いた。

「あなたがまだ寝てたから起こしたら悪いと思って、部屋の外で電話してた」

「．．．．．だ、誰に．．．．．ですか．．．．．うう。彼女．．．．．か、彼女さんですか．．．．．?」

「とりあえず泣きやんでから喋ってくれ」

「はい」と答え、私は何度も深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

そんな私にタオルを手渡す彼。

「彼女さんですか?」

タオルで顔をおさえ、目だけ覗かせ彼の方を見てもう一度聞く。

「違う。友達」

「もう行っちゃうんですか?」

「何で?」

ここでわがままを存分に言いたくなる衝動がうずいてきた。いけないいけない。

「私はこれから家に帰ります。でも一人です」

「うん。それで?」

彼は困るでも怒るでもなく、淡々とした声で言う。

「寂しいです」

本当に単刀直入に全てを一言に凝縮させ伝えてみる。彼の反応を待つ。

「それで?」

どうして欲しいかって事か。私は一体彼に何をどうして欲しいのだ?

「つまり、まだ一緒にいたいです」

とりあえず、まだこの場を去って欲しくない事をだけ伝えてみる。

「無理って言ったら?」

そう来たか．．．．．。

「ついて行きます」

「うーん」

彼がやっと困ったような声を出す。

私は彼の名前も知らない。彼も私の名前を知らない。この二人はこの一時間後どこで何をしているのだろう。何も見えないすぐ先の未来へと思いを馳せた。

「まあ、ついてくる分には構わないけど」
「やった。」

「でも、どこ行くか分かってて言うてんの？」

ホテルを出て、早朝六時のまだ少し静かな繁華街を二人で歩きながら彼は言った。

早朝はきのこの夜よりも寒く、二人の息が白く空にのぼっている。
「え、分かりませんが。どこなんですか？」

ポケットに手をつ突っ込み、寒そうに体を丸める背の高い彼を見上げ、私はちよつと幸せな気分になった。どこに行くか分からない、何が待ち受けているか分からない。冒険のような何かが待っている気がして。

私のこの地味な人生でこんな経験はなかったからかもしれない。

「おーい、時雨」

向こうから誰かが手を振る。眼鏡の男の人。誰だろう。ああ、さつき言ってた友達か。

「……時雨、おまえ今どこから出てきた？」

眼鏡さんは言う。

「見たの？」

「で、その女の子は誰？」

私は慌てて頭を下げる。何て挨拶したらいいのだろう。

「逆ナンされた」

そのまんまを彼は眼鏡さんに伝えた。

平然とした態度でさりとそう言った彼の胸倉を眼鏡さんは掴んだ。

「おまえ、どんだけ女にモテリや気がすむんだ？ そんな地味な顔してやがるくせによ？」

まるでコントのようなやりとりが目の前で繰り広げられ、私は思わず吹き出す。

「それで、何？ 何してたわけ、あなたたち二人は？ もしかしてヤッチャ．．．．．」

言い切る前に眼鏡さんの頭を彼は叩いた。頭を抱える眼鏡さん。

「あの」

手を上げて彼に質問する。「何？」と彼が私を見る。

「あなたのお名前は？」

「この人は山田時雨って言います。僕はデッダーと申します」

眼鏡さんがすらすらと答える。

「山田．．．．．しぐれ？」

「時の雨で時雨」

ああ、と私はその漢字を頭の中に描いて納得する。それにしてもデッダーさんて、何人？ あだ名かな？

「まあ、本当の漢字は、死ぬに黄昏の昏で“死昏”と書くんですけどね。死によって薄暗くなつてゆくイメージですかねえ」

デッダーさんが笑って言った。

「え？」

「変な事教えなくていいから」

山田さんはそう言つて、ポケットからガムを取り出して口に放り込むと、さつさと歩いて行く。

その後が続くデッダーさんの横に私は並ぶ。

「あの、デッダーさんは本名ですか？」

「英語のDEADの変形したやつです。まあ、コードネーム的なものですかね」

「へえ」

よく分からないまま返事をする。

「それでああなたのお名前は？」

「芹沢冬です」

「冬ちゃんか。可愛い名前ですね」

気さくに話しかけてくれるデッダーさん。けど山田さんは私の名前なんて興味ないのか、振り向きもしない。

「これからどこへ行くんですか？」

「そうそう、その事でさつき時雨を電話で呼び出したんですよ。なのでまだ時雨も知らないんだけどね」

「で、何があったわけ？」

前を歩く山田さんが言った。

「いおりん……がね」

デッダーさんのその言葉に、かすかに山田さんに動揺の影がちらついたように見えたが、気のせいだろうか。

「いおりん？」

「あ、伊織ちゃんて女の子で。俺はいおりんて呼んでるんだけどね」
「いつから、そんな呼び方……」

全く振り向きもしない山田さんが声だけこっちに投げかけてくる。

「いおりんがね、記憶消したはずなのに……。おまえまさか、消した振りして消してなかったんじゃないだろうね？」

記憶？ 何の事だか分からないが、デッダーさんが山田さんに疑いの目を向けている。

「そんなわけねーだろ。だから、つまりどういう事？」

「うん、もう単刀直入に言うけど、いおりんがおまえの事思い出してしまった」

急に足を止める彼の背中に顔をぶつけてしまった私。

「い、痛っ……」

鼻をおさえる私に「ごめんね」と謝る彼。

「それでいおりんはおまえを探している。けど、記憶を消された時のことは覚えてないらしくて」

「その伊織さんっていうのは、山田さんの彼女さんですか？ 記憶喪

失になっていたとかですか？」

心の中がざわざわと揺れ動く。楽しい冒険が始まりそうだと思っていたのもつかの間、暗雲が立ち込める。

「時雨の好きな子」

私は両手で耳をふさぎたい思いで目をぎゅっと閉じる。好きな子。どんな子なの。

「好きって．．．．．いつ俺がそんなこと言ったよ？」

「好きじゃないんですか？」

ぱつと顔を上げて、つい期待の眼差しで笑顔になってしまった自分に顔を赤くする。しまった．．．．．。

分かりやすい反応だっただろうか。デッターさんが「冬ちゃん、分かりやすいね」と笑う。

「知り合い」

短くそう答えた彼に、デッターさんが呆れた表情を浮かべる。やっぱり好きな子なんだろうか。

「知り合い程度で、あんなストーカーみたいに．．．．．」

そこで山田さんからまた頭を叩かれるデッターさん。

「その伊織さんの所へ行くんですか？　行きましょよ」

私は悲しみとは反対に元気な口調でやる気満々に振舞う。

悲しい時に悲しいと素直に表現してはいけない時って、どうしたらいいのだろう。

私達は電車に乗り、あるデパートの屋上へとむかった。

休日のせいかな、家族連れや子供達の声でにぎわうのどかな屋上。

その向こうのフェンス前に並ぶベンチに、エプロンをした一人の女の子が缶ジュース片手にぼつんと座っていた。

あの子だ。これを女の勘とでもいうのだろうか。そんなものが自分に備わっていた事の方が驚きだが、それが彼女だと私はすぐに感じた。

サラサラと揺れるセミロングの黒髪。白い肌に小柄な細い体。大人しそうで清楚な雰囲気の漂う女の子。ああいう子がタイプなんだ。

「時雨、どつする?」

小声で言うデッダーさんに対して山田さんは無言。

無言のまま彼の足は前へ進んでいた。彼女の方へ。

私とデッダーさんは影から様子を見る。

山田さんに気づいた彼女は、手に持っていた缶ジュースを横に置くと立ち上がった。

「山田時雨!」

フルネームで彼を呼ぶ彼女。

「私、何か重要なこと忘れてる気がして、それですつとその事を考えてて。きのうやつと思ひ出したの。君の事だつて。でも途中記憶がなかった気がするの。私の記憶消したの? 私の事が嫌いになつたから?」

彼女は細くて綺麗な声で山田さんの腕を掴んでいろいろ言った。

私が入り込む余地などない何か知らないものが二人の間にはあるんだ。この空虚感、埋めることも出来ないその空間に私はただ孤独を痛いほど感じる事しか出来なかった。私は誰からも必要とはされない女だ。

「.....いろいろあつて」

「いろいろつて? はつきり言えよ! 私が邪魔で嫌いになつたんでしょ? だから記憶を消したんだろ!」

急に彼女の口調が変わる。清楚な外見とは真逆な言葉使いに私はぼかんとしてしまい驚く。

「嫌いつていうか、いつ俺があなたのこと好きだつて言つたよ?」

「じゃ嫌いなんだね!」

「ていうか興味ないつて何度も言つてんじゃん」

二人は顔を合わせて間もないのに喧嘩ごしになった。勢いよく言葉が飛び交う。

「.....あの、お二人はどういう関係なんですか?」

私はデッダーさんに小声で聞く。

「何だろうねえ。幼稚園児のカップルみたいなもんかね.....」

「デッダーさんはやれやれと首を横に振った。」

「ていうか、あなたはどこまで覚えてんの？」

ベンチに腰を下ろし、彼女が今の今まで飲んでた缶ジュースを勝手に飲みながら山田さんは言った。

「おい！ 何勝手に人の飲んでんだよ！ 金返せバカ！！」

彼女は彼を指差し怒っている。

「質問に答える」

「私がここでクマの着ぐるみのバイトやってた時、君が現れて・・・

・・・そこまでしか思い出せない」

「ああ、そこまでは覚えてんだ」

「その時に私の記憶消したんだね。消すために来たんでしょどうせ
「！」

「違つって」

「あれほど消さないでって泣いて頼んだのにさ！ ひどいよー！」

山田さんが彼女の記憶を消した、という会話になっている。どう
いう事だろう。

「山田さんは何者なんですか？」

デッダーさんにもう一度質問をしてみる。

「詳しい事は言えないけど、とにかく時雨は、時雨といおりんが出
会った時の記憶は消さないといけなくて消したはずだったんだよね」

「山田さんは超能力者か何かですか？」

「まあ、変な男だよ」

「まったく話の意図が掴めない。」

「変な男とは何だ」

すぐ頭上でしたその声にびっくりする。山田さんが上から私達を
見下ろしていた。

彼の隣にいる彼女に視線を移す。彼女がぺこりと頭を下げたので、
私も慌てて頭を下げる。

目の前で見れば見るほど透き通るような透明感があって妖精のよ

うに可愛かった。

彼が好きになるのも無理はなかった。私はみじめな思いを噛みしめる。

「デッダーくん説明して本当の事を」

伊織さんはデッダーさんに詰め寄った。

「時雨は確かにいおりんの記憶を消した。でもそれ……」

彼がまだ喋ってる途中で、伊織さんは山田さんを突き飛ばした。

「やっぱり!!」

怒る彼女の手を掴んで攻撃を阻止する山田さん。手を掴まれジタバタする伊織さん。

「いおりん、でもそれはどうしても仕方ない理由があって、俺が時雨にやらしたことなんだ。時雨は反対した」

最後まで説明し終わったデッダーさんのその言葉に、伊織さんの手が力なく下に下がった。

伊織さんの目から涙がぼろぼろこぼれた。彼女は確実に山田さんの事が好きなんだ。

「……もし、このまま私が思い出さなかったら、君は私の元にはもう二度と現れないつもりだったの？」

純粹なほど真っ直ぐ見つめるその彼女の目にも、山田さんは表情を変えない。

「いやいや、まさか。時雨がどんだけここに足を運んでたことか」

デッダーさんがからかうような言い方で口を挟み、山田さんは彼の襟首を掴むと向こうへ連れて行ってしまった。

彼女と二人きりで残されてしまった私。どうしたらいいのだろう。

「あなたは……?」

涙を拭いながら少し微笑んで伊織さんは私に言う。説明しようがない。出来るわけがない。

「えっと……あの」

何も言葉が思い浮かばない。ただただうつむくしか出来ない。ホテルに誘うために逆ナンした、なんて誰が言えるの、この状況で。

「山田の彼女？」

「ち、違います!! まさか!!」

全力で否定する。お願いだから二人とも戻ってきて。場がもたない。

「でも山田のこと好きなんじゃない？」

彼女は優しい顔で笑った。可愛い笑顔だと頭の隅で見当違いなことを思う。

「好きじゃないです。会ったばかりだし」

「嘘。山田を見る目が、なんていうか、ハートマークだったよ」

「ハート……」

そんな顔してたの自分。

そこで二人がやっと戻ってきた。

私達四人はそれから何度か会うようになった。

私と伊織さんの二人で遊びに行くことも増えてきた。

普通の女の子らしく、ショッピングに行ったり、カラオケ行ったり、美味しいもの食べて、お互いの家にお泊りしあったり。

私にとってはこんな事は初めてだった。今まで友達もいなかったし、普通の女の子らしいこんな遊び方もした事がなかったのだ。

彼女は私の癒しとなっていた。

そして、キャバ嬢の仕事の事をいつの間にか忘れてしまっていた。最近楽しそうだね」

四人で池袋の水族館に遊びに来た私達。ぼんやり歩いていたところ、山田さんが私に言った。

デッターさんと伊織さんは、大きな水槽で泳ぐ色とりどりの小さな魚に無邪気に大はしゃぎしている。

「伊織さんという友達が出来たから」

「ふーん」

「伊織さんのこと好きなんですよね？」

私は断言した言い方で笑って言った。

「いや、だから違っつて」

「何でそんなに嘘つくんですか。興味が無いだなんて、嘘だつてばればれですよ」

そうはつきり喋る私の心は広く澄んでいた。なぜだろう。安らぎと幸せが広がっている。ちよつと偉そうだったろうか。

「偉そうにすみません」

「いやいや」

「それで、好きなんですよね？」

彼の困った顔、素の顔を見てみたい。どんな顔するんだろう。

「さあね」

「さあねって事は、やっぱり」

黙る彼。

水槽の水色が彼の瞳に反射して揺れてた。水の中を漂うようなゆつくりとした時間。

「どうにでも好きって言わせたいんだね」

彼の言葉にははと笑う私。そう、それを聞きたい。彼の口からはつきりと。自分の中で確かめたい何かがあったから。

「好き、なんですよね？」

意地でも食い下がらない。絶対言わせてみせる。

「好き、じゃない」

深く溜め息をつく私。思っていた以上に頑固だ。

「分かりました。嫌いなんですよね？」

反対の事を言つて口を割らせる作戦に出る。

「興味ない」

悲しい気持ち私を包む。なぜだろう。

その後、展望台へと移動した私達。

遠く遠く広がるガラス越しのぼんやりした景色。夕日が地を染め上げ、言葉にならない美しさだった。

ずっとずっとこのままでいたい。このまま続いて欲しい。

あつという間に太陽は地平線に沈み、それに代わって真っ暗な空に無数の星が散りばめられていた。

館内が少し薄暗くなり、あっちこっちでカップルがいちゃいちゃしている。あまり見ないように足早に通り過ぎる。

「冬。この上行ってみない？」

伊織さんが私の手を握って言った。

「この上？ まだ上があるんですか？」

「屋上行けるの知らないの？」

「えっ、屋上？」

ここの展望台に来たこと自体初めてだったから、そんなこと知らなかった。

私は伊織さんと階段を駆け上がり屋上へ走った。

私の目に幻想のような景色が広がる。

右も左も上も信じられないほどの光であふれている。何て地球は美しいのだろう。

「見て。あっちデイズニールランドなんだよ」

伊織さんが指差す方向を見ると、本当だ、光がたくさん集まっている箇所が向こうに小さくだけ見える。

「すごいです！！」

景色に感動して涙があふれたのなんて人生で初めてだった。

そして私の目の前にはもうひとつのキラキラした宝石がいた。

妖精みたいな天使みたいな笑顔で私に心から微笑んでくれる女の子が。

「私、伊織さんが大好きです」

私は笑顔で真っ直ぐ伝えた。

「告白されちゃった」

伊織さんは照れながら笑う。

「山田さんのこと好きなんですか？」

ふいに私の口から出た言葉に、彼女は少し驚くと、うん、と頷いた。

「でも山田さんは伊織さんのこと興味ないって言ってます」

なぜそんな意地悪なことを今この場でわざわざ言う必要があるの。

私の心と体が分離し始めた。

「……………うん、知ってる。けど、会い続けていきたいんだ」
「もし山田さんが伊織さん以外の人を好きになってもですか？」

「それは……………考えたことない、って言うか考えたくないよね」

彼女の表情がだんだん悲しげになってゆく。私の意地悪な心が加
速度を増す。

「もし私が取っちゃったらどうします？」

「……………え？」

「いいえ。山田さんをじゃありません。伊織さん、あなたをです」
「どういうこと？」

「さっき言ったじゃないですか。私、伊織さんが大好きなんです」
「え、それって、つまり、そういう意味……………の？」

真剣な顔で頷く私に彼女は頬をちよつと赤らめた。その表情がま
た愛おしく思えた。

「私、伊織さんを手放したくありません」

自分が何を言ってるのかもはや制御出来ない。

「冬。どうしたの……………？」

私の鬼気迫った目に彼女はたじろいでいる。

「冬。やめろ」

はっと我に返る。

振り向くと山田さんが私を見ていた。デッダーさんも後から階段
を上がってきた。

「ここはまた寒いね」

冷たい空気をはらうようにデッダーさんが明るく言った。

ちらりと伊織さんの方を見る。困った顔。もっと困らせたい。も
っともつと。

「山田さん、伊織さんのこと好きなんですよね？」

「やめろ」と目で私を制する彼。やめない。

「冬。どうしたの？」

伊織さんは私の顔を覗きこんだ。

「どうして？ 伊織さんがこんなにあなたに想いを寄せてるのに、あなたはそんなに冷たいんですか？ 贅沢じゃないですか？ 自惚れてるんですか？」

私の中で押さえ込んでた獣がうなるように這い出て来た

自分の目が血走っていることくらい自分で分かる。許せない。どうしてこんな不公平な事があるの？

「……ごうなるんじゃないかと思ったから、本当はあなたの誘いを断りたかった」

山田さんが私を見た。「何の話？」と伊織さんが言う。もうどうなったっていい。

「あなたはあの晩、ホテルに付き合ってくれる男を探してたけど、本当は結局見つからなくて、一人でホテルに入って自殺を図るつもりだったんでしょ」

彼の話にデッターさんは何も言わず黙っている。まるで何もかも知ってたかのように。

「……冬？ 何の話なの？ 自殺なんて考えてたの？」

伊織さんの震える声。もっともつと困ればいい。もっともつと私を想って悲しんでよ。

「だから俺はあなたの誘いに乗った。でも、あなたの孤独の闇の中には獣がいた。俺はそれを感じてたけど、断れなかった。自殺することが確実だったから」

「私に情けをかけてくれたんですか。私を救いたかったんですか」
私は鼻で笑っていた。綺麗事ばかり言っただけ。どうせ誰も本当には私の事なんて気にかけるやないくせに。

「でも伊織のことは想定外だった。俺一人で何とかしようと思ってた」

「どういうこと？ 私が何かしたの？」

本気で心配する伊織さんの顔。けど罪悪感なんて感じない。もっと

と心配して。もっともつとね。

「伊織が出てきたのはまずかったのかもしれない」

彼が滑らせたその言葉に伊織さんの表情が変化した。

「私、やっぱり邪魔だったんだ。君にとつて私はやつかいものなんだね」

黒く渦巻く愛憎の渦の中で、私の鼓動は熱く煮えたぎってくる。

面白すぎる。もっともつと全て崩壊すればいい。

「．．．．．いや、邪魔とかそういう事じゃなくて」

「嫌いなら嫌いつてはつきり言つてよ！ もう一度私の記憶消せばいいでしょ！」

もつと泣き叫べ。もつと崩れる。もつとみんな悲しんで、みんなみんな孤独になって分裂すればいい。

「．．．．．嫌いじゃない」

「嘘つくなよ！！」

「俺だつて．．．．．俺だつて、本心を簡単に言えたら苦労しないんだよ」

いつも淡々とした彼の顔からは今まで一瞬も見たことのなかった表情。

苦々しくしぼりだされるその苦痛な低い声。私の中の獣がおののくほど、それは、とても、悲しい声だった。

地に落とされた彼の視線は死人のようだ。

悲しい声を漏らしたはずなのに、その表情は血も魂も通っていない死人のような顔つきだった。

私だけじゃなく伊織さんもはつと息を飲んでいた。

「．．．．．時雨」

肩を小さく叩くデッターさんの優しい声に、彼は我に返つたよう
で表情に生気が戻る。

今のは、何だったのだろう。

「いおりん、冬ちゃん、あんまり時雨を追い詰めないでね」
デッターさんは優しく微笑んだ。

いや、優しく微笑んだかのように見えた。

が、その優しげな目の奥には、鋭く冷たい何かが見えた。黒い目の奥の闇の深くに沈む何か。触れてはならない何か。私の中の獣をいとも簡単に噛み殺すだろう闇。

私の全身を冷たいものが走る。

この二人は本当に存在しているのだろうか。そんな事がふいに頭をよぎる。

死人ではないのか？

けれど、もう何も言葉に出来ない。言葉を発することを封じられたかのような重い空気。

私の孤独の結末に待っていたものは、私の孤独の闇の中に飼う獣を封じてしまうほどのもつと重い闇だった。

私はまだ孤独の闇の中にいる。けれど、あの二人の闇を目にした今、私がいる場所が優しいものを感じる。

彼等が一体何者なのか分からない。

そして、彼等という者達がどんなだったか思い出せなくなってきた。

きっと、彼等が言ったあの事だろうと思う。

彼等と出会った者は、彼等の記憶を忘れる。

だんだん霧のように遠ざかる彼等の面影。蜃気楼のような日々。

でもこの感覚だけははつきりしている。

私はまだまだ光の中にいる。私には十分な光がまだ残されている。

彼等の闇はそれほど

悲しいものだった。

Vol.10 「山田時雨の過去」(前書き)

(10話のみ、少し「残酷な描写あり」)

第10話 「山田時雨の過去」

時空や時代、場所を越えて渡り歩く少年「山田 時雨」。
彼と出会うあらゆる人間の人生と、その人間の視点から彼を描いた
続編もの短編小説。

山田時雨と友人デッダーが現在に至るまでに一体何があったのか？
その過去の闇が紐解かれる。

(原稿用紙22枚)

>登場人物<

山田 時雨やまだ しづね・・・謎の少年。

源 伊織みなもと いおり・・・時雨のことを想う少女。

デッダー・・・ 時雨の友人。時雨と共にあらゆる場所を渡り歩く。

「山田の下の名前の時雨^{しづね}って、“死昏”って書くの？」

山田といつも一緒にいる眼鏡男のデッダーくんから初めて聞く話に私は耳を傾ける。

ここはデッダーくんの家。まあまあ割りと綺麗なマンションの二階。

私、源伊織は山田時雨と出会ってまだ一年半ほどしか経っていないが、とにかく彼もデッダーくんも普通ではない。

彼等はいろんな場所や時代を越えてあらゆる場所に姿を現し、悲しみや苦悩の中をさまよう人間に会うと救いの道へと手を引いていく。

そして何かしらの道が開けたら、その人間の記憶の中から、自分の記憶を消して去って行く。

私も一度記憶を消されはずなのだが、例外なのか、あるとき全て思い出してしまった。

「死によって薄暗くなっていくイメージ」
デッダーくんは説明する。

「そんなひどい漢字誰があてたの？ 親？」

「いや、違うよ。俺たちがこっちの世界に来た時に誰かわからんけど何者かに与えられたんだよ」

「こっちの世界って、君達二人は一体何者なの？」

「ただの人間だよ」

「普通の人間じゃないよ。お父さんとお母さんは？」

「あ、それ時雨の前であんま言わない方がいいよ」

パソコンでゲームをしながらそう言った彼に、そこで眠っているとばかり思ってた山田がこっちに背中を向けたまま、

「聞こえてる」

と低く呟いた。

「いつから君達はそんな事してるの？ 生まれた時から？」

「いいや。ある時を境にだよ」

「ある時って？ それでそれはいつまで続くの？」

「永遠にだよ」

「……永遠？」

「あなたは本当に質問責めが好きなんだね」

山田はくるりとこっちに体を向けると、いつものうつろな目で私を見て言った。

「永遠で、寿命はどうなるの？」

「そんなもんはとづくに奪われたよ。永遠に生き続けなくならな
い罰を課せられた」

デッターくんは他人事のようにそう言つと、「よっしゃ！」と
ゲーム画面に向かって声を上げた。

「……罰って、君達は何かしたの……？」

心臓が脈打つのを気持ち悪いほど感じた。

彼等の核の中心に手を伸ばそうとしている。

そこには、今まで見た事のなかった山田の深い底無しの間とリン
クする鍵があるのだと直感で感じる。

しかし二人とも何も答えない。

「ねえ。……一体何の罪なの？」

デッターくんが私の目を見る。

「俺達二人は、それぞれ別の件で、人を殺してる」

思考を失う

言葉をなくす。

闇に飲まれてゆく。

あらゆる感情が淘汰され、時間の流れを遮断する。

殺し——。誰かの命を奪った。誰かをこの世から
消した。

「でもおかしいよな。正当防衛と同じもんなのに。明らかに向こう側の方が悪魔なのにさ」

デッダーくんはまたゲームに視線を戻すと淡々とそう言った。

山田は両手を頭の後ろで組み、仰向けになって目を閉じている。デッダーくんは続ける。

「俺は、大学で俺をイジメてた三人を罫にかけて殺った。そして、時雨は自分の親を二人とも殺った」

私の知らない世界。知らない二人。知らない過去。知らない見えない闇。

自分の手が小さく震えている事に気がつく。

「…………お、親つて…………？」

震える声でその一言を発するのがやっとだった。呼吸が乱れてうまく喋れない。過呼吸ぎみになる。

「時雨は生まれた時からずっと親の虐待を受けてきた。一度も愛されず、否定され続け、暴力や暴言で押さえつけられてきた。で、ある時ぶつつり糸が切れちゃったんだよ。そんな時以来、時雨の心は死んだ」

いつの間にか山田は目を開けてぼんやり天井を見ていた。

その死んだような目には、悲しみも怒りも憎しみも何もない。魂を抜かれた人形のようなだった。

「俺も時雨も何も悪い事はしてない。なのにこの罰だよ。この世界はあの世まで不条理だらけなのかねー」

デッダーくんはため息をついた。

「…………それで？」

「人を殺したと自覚した途端、目の前が真っ暗になった。そして何か分からないけど見えない何かにもう一度この世に落とされた。前と見る景色は変わらないし自分も変わってない。けど何かが前とは違っつてすぐに分かった。この世ではないけど、あの世でもない狭間の次元にいる感覚。俺達は元から存在していない事になっていた。俺はそれと同時に自分の本名を忘れた」

「山田も同じ?」

天井をぼんやり見上げる山田に問いかける。

「……俺は本名は忘れなかったけどね」

「そりゃ、おまえが忘れなくなかったんだよ。仮にも親からもらった名前だからね」

「でも、親を憎んでたんでしょ……?」

山田は黙ってしまった。

けど少し間があつてから、

「……その後に、俺の名前が枯れて死んでいく映像が見えた。死昏しぐれ

……、死昏つて漢字に変化して暗くなつていく映像」

と途切れ途切れに思い出しながら喋り出した。

「時雨は永遠に命が続くつて分かった時に即行で自殺を図つたらしいよ」

「……らしいつていうのは?」

「俺と時雨は元々は知り合いでも何でもなかったからね」

「じゃあ、いつ会つたの?」

「俺がこつちの世界に来たばかりのとき路頭に迷つてあちこちうろろしてたらさ、たまたま通りがかつたある家の玄関のドアが開いてるのが見えたんだよ。そんで中を覗いてみたら、時雨が血まみれで床に座つてた。手に父親の刀を持つてね。それが凶器だったらしいけど」

私の脳裏にその時の山田の映像がリアルに浮かぶ。いつの間にか頬を涙が流れていた。体が震える。

「時雨が死んだようなぼんやりした顔してたからさ、一瞬本当に死んでるかと思つたんだよ。そんで一応声かけてみたら、自殺しようとしたらしくて「死ねない」つて一言呟いた」

「自殺……出来ないの?」

「俺はしたことないけど、時雨が言うには、死んだと思つた次の瞬間には再生復活してたらしいよ」

終わりのない永遠の輪。

一体いつまで？

いつまでも？

いつまでもという無限の響きに気を失いそうになる。

「君達が人を救ってるのは誰かに命令されてるから？」

「いや違うけど。永遠の時間があるってなったら、そういう結論に行き着くしかなくなるんだよ。俺達のした事が正当防衛でなく罪だつて言うなら、その反対の事をやるしかないでしょ」

「山田は……今何を考えてるの？」

掴めそうに掴めない、山田の存在はいつでもするりと私をすり抜けて消えていく。

「……何も」

「何もないわけではないよ。何か考えてるんでしょ？」

「別に何も考えてないよ。あえて言うなら、あなたが本当に質問好きな人だつて事についてだね」

「真面目に答えてよ……」

私が真剣な目を向けると、山田は起き上がった後ろの壁にもたれた。

「真面目に答えてるよ。質問が多すぎる」

「だつて、だつて君達の事を知りたいから……」

「人にはさ、聞かれたくない事もあるんだよ」

「君の本当の心が見えない。悲しいのか、憎しみがあるのか、寂しいのか、見えない」

「そんなもん見えなくたっていいでしょ」

「見たいんだよ！」

「何のために？」

だんだんまた喧嘩ごしになる私達に、デッターくんが「まあまあまあ」と間に割って入ってきた。

「好きだからでしょ！！ 何度も言わせんな！！」

山田に飛び付く私を必死に両手で食い止めるデッターくん。

「俺は興味ない」

「だったら、もう一度私の記憶を消してみなよ!」

最後の切り札を叩きつける。

山田はまた黙りこむ。

「いおりん、聞かなくなたって分かってんだから、もういいじゃん」
なだめるデッダーくんの言葉も耳に入らない。本心をどうしても聞きたい。

「中途半端に私から逃げないでよ!」

思わず立ち上がる私。

沈黙が広がる。

「言ったらどうなるの。何かなるわけ?」

仁王立ちする私を見上げ、うつろな目を向ける山田。

私の中で何かがぷつりと静かに燃え尽きた。

「……分かった。もういい」

私は山田のように死んだ顔で、何の感情もない声でそう呟くと、そのまま部屋を後にした。

外はザーザー降りの雨。凍えるような十二月の暮れの夕方。

私は傘もささず前を真っ直ぐ向き、一度も振り返ることなく彼等の部屋を後にした。

デパートの屋上での仕事が終わりに、私はコートに身を包みながら、夜道を歩いていた。

ブーツのコツコツという音が静かな歩道に響く。

歩道橋を上がる。

歩道橋の下を行きかう車のライトが七色を放ち滲んでは消えてゆく。

ちょうど真ん中辺りまで歩いた時、人影が視界に入った。背の高い後姿。

私は白い息を吐きながら静かに通り過ぎる。

「……伊織」

聞きなれた低い声。

私は一瞬だけ足を止めたが、また歩き出す。
後ろから腕を掴まれる。

「……………何か用？」

私は振り向かず目も合わせず背後に言葉を投げかける。

「……………ごめん」

「何が？」

「怒ってんの？」

「うん。何も考えてない。もうどうでもいいの」

冷たい言い方だろうか。そんなこと思わない。

「怒ってんだね」

「手を離してよ」

「……………」

山田が無言になるときは、傷ついた時。

「もう一度言うけど、手を離して」

「伊織」

それでも私は振り向かない。

「離して」

「伊織が年老いても、俺はずっと永遠にこのまんまなんだよ」

ふいに、肩肘張らない素直な言葉が彼の口から漏れた。

「うん。知ってるよ。君は一体何歳なの？」

「二十歳」

「私より五歳も年下だね」

私はゆっくり振り向き、私の腕を掴む彼の手をほどくと、その手を握った。

山田は私の目を見た。

「何て悲しそうなの目してるの君」

私は少し笑う。

その時

彼が、あの山田時雨が初めて、目をふせながら笑った。憂いの帯

びた悲しい目だけど、かすかに微笑んだ。

それが私にとつてどれだけ嬉しかったか分かるだろうか。

私は微笑みながら泣く。

「何で急に泣くの？」

「君が笑ったからだよ」

「俺、今笑ってた？」

自覚がなかったようだ。

私はちよつと可笑しくて吹き出す。山田もつられて笑った。

私はおもいきり背伸びして、自分よりずっと背の高い彼の首に両手を伸ばす。

彼は身を屈めて、私の事を抱き上げた。

「君にこんな抱きついたの初めて！」

何だか変な感じがして笑いが止まらない。

彼はいつ何時どこへ行くか消えてしまつかも分からない。

その恐怖が常につきまとう。

けど、私はこの一瞬でも、彼から逃げたくないのだ。

山田は私の背にまわっていた両手を少しゆるめると、私の顔を見た。

悲しげな死んだような目。表情のない目。

ふせた睫毛。甘い香り。触れる体温。

私に触れるやわらかい彼の唇。

私はその存在を確かめるように、彼の唇に何度も触れる。

吐息が私の唇から漏れるたび、彼はそれをふさぐようにキスをした。

ずっとずっと彼が消えてしまわぬように。

「言って」

私は彼の首に両手を回したまま、強い眼差しを彼にもう一度向ける。

君の本当の言葉が聞きたい。

この耳に残しておきたい。

その言葉が聞きたい。

「好きだよ」

観念したかのように言う彼。

「やっと言ったか。興味ないんじゃないの？」

私はからいながら笑う。

「ないって言わないと無理だった」

「無理？」

「興味ないって言って強制的に自分を抑制しないとダメなほど、好きだった」

心がぐつと傷んだ。幸せに傷んだ。

窓に目をやる。

カーテンの向こうがうつすらと白く明けている。

目の前に視線を戻す。

山田の眠る顔。

私はあえて起こさずに、じっと目の前で観察してみる。

五分経過。飽きない。

十分経過したところで、彼が寝返りを打ち向こうを向いてしまった。

私はその広くてすべすべとした彼の背中に手を滑らせる。

昨晚初めて見たが、彼の背中には異様な刺青があった。

首のつけねから腰まで背骨に沿って真っ直ぐ、お経のような漢字がずらりと彫られている。

私はその文字ひとつひとつを指でなぞる。

「どういう意味があるんだろ……。何でこんなもの彫ったんだろうか」

独り言で呟く。

「……彫ったんじゃないよ」

急に声がして驚く。

「……君は寝たふりが好きだね。起きてたの？」
「ずっと」

「えっ、いつから？」

「十分前ぐらいから」

「なんだと……」

私はもう一度彼の背中に手を伸ばし、すりすりと頬を寄せる。

「……何してんの」

山田はちらつと横目で背後を振り返る。

「気にしないで」

「十分気になるし、くすぐったいんだけど」

「ふーん、あっそ」

気にせず触り続ける。

山田はもう一度こっちに体を向き直し私の背中に片手を回すと、寝はじめた。

急にむずむずするような愛おしさが込み上げてきて、私は自分から彼の唇にキスをする。

山田は薄目を開けると、そのまま私の首筋に唇を滑らせ、私の肩に顔をうずめてまた目を閉じた。

「親に愛されないって、どんな気持ち？」

私の唐突な酷な質問。彼は怒るだろうか。また質問？ とか言っ

つて。
「……自分の存在には何も意味がないって事だよ」

山田は意外にもあっさりとは答えた。

「デッダーくんから聞いたよ」

「何を？」

「最近、君が助けたおじさんの事。おじさんから記憶消してないんだってね。たまに会いに行ってるんでしょ？」

「うん」と山田は小さく答えた。

「すごく優しい人なんだろうね」

「何で分かんのか」

「当たり前じゃない。そうじゃなきゃ、君がそんなに気にかけるわけがない」

「ふーん」

「お父さんみたいに思ってるの？」

間が続く。

少しためらうように、

「……かもね」

と答えた。

「私もその人に会いたい。お父さんで、どんな感じ？」

「親は？」

山田は顔を上げた。

「いないよ」

「本当？」

「意外？ 親二人ともいない。生まれた時から最初から寂しくもないし恋しくもない。親ってどんなのか全然分かんないの」

「そっか」

山田は小さくそう言うと、私を抱きしめた。

「親を殺した時、どんな気持ちだった？」

更に中心に踏み込む。

「……罪悪感」

「嬉しくなかったの？ 憎かったんでしょ？」

「出きるもんなら、好かれたかった……」

本心から言ってるという事が痛いほど伝わってきた。

「もし戻れるなら戻ってやり直したい？」

「……」

「親を生き返らせたい？」

無表情な彼の瞳から涙が零れ落ちた。一点を見つめたまま、彼は黙っている。

私にはあるひとつの推測があった。

それはまだ山田にもデッダーくんにも言っていないけど。

彼等に罰を与え、永遠を生きるよう命じ、苦しむ人を救う立場に置いたその“何者か”というのは、

何者でもなく

彼等自身なのではないか？

彼等の潜在意識の底に眠る罪悪感が、自らを罰に処したのではないだろうか？

私の中からその考えがどうしても消えなかった。

でもそれを彼等に告げる勇気もなかった。

彼等は自らに罰を与え、その永遠の禍々しい運命の中で苦しみ続けている。

私にはそうとしか思えなかった。

けれど、その渦から抜け出す手だてがあるのか、それは私にも分からなかった。

「君はそっちの世界に行ってから何年たったの？」

「あんまり詳しく覚えてないけど、三十年くらいだったと思う」

だとしたら、彼は本当ならば、もうすでに五十歳の年齢になっているはずなのだ。

もしもその世界から抜け出す事が出来た場合、彼は本来の五十歳の姿になるのだろうか。もしそうならまだまだ彼の人生は残っているかもしれない。

でも

ひとつひつかかる。

山田は、親を殺した後に、すでに自殺を図っている――

それがまだ有効だった場合、彼の肉体はもうすでに死んでいるのではないだろうか？

彼等が、自分達に罰を与えているのは彼等自身なのだという事に気がついた時、彼等は解き放たれるのだろうか。

いや、もしかしたら、

心の底ではその事に薄々気づいているのかもしれない。

自覚がありながらもそれを認めず目をそらし、そして尚も、罰
を与えなければならぬという強迫観念に囚われ続けているのかも
しれない。

私は去っていく彼の後ろ姿を雨に打たれながらいつまでも見送る。

付き合って一年になる大好きだった彼氏に今日振られた。

私はうまくいってると思ってた。けど彼の方は随分前から私に我慢してたんだって言った。なぜもっと早く言ってくれなかったのって泣いて責めたけど、君が傷つくだろうから言えなかったって。それはただのエゴだよな。

なす術もなく私は立ちすくむ。

家に帰ってお風呂に入って綺麗になつてから、普段は着ることのない少し華やかなワンピースに身を包み、私はもう一度風呂場へ向かう。

浴槽を染め上げる私の鮮血。私の手首の傷口から滔々と流れる悲しみの赤い涙。私の意識はだんだん遠のいていく――

二度と覚めるはずのない意識が私の中にゆっくり戻るのを感じた。

目を開けるとそこは病院だった。私はベッドに寝ていた。

「……助かつちゃったんだ」

落胆して深いため息をつく。傷口が浅かったのだろうか。もっと深くいくべきだったかとあれこれ考えていて、ふと人の気配に気がつく。

視線を左にずらすと、一人の男の子が椅子に腰掛け少年雑誌を読んでいた。見たこともない男の子。私と同年くらいだろうか、私以上に表情のない死んだような目をしている。私は布団に入ったまま彼をじっと見た。

男の子は私の視線に気がつき私の方を見たが、また雑誌に視線を戻した。

「死ねなかったね」

男の子は呟いた。彼が私を助けたのだろうか。でも部屋は鍵がかかっていたし誰かが侵入することなんて考えられない。なぜ私が死のうとしたことを彼は知っているのだろうか。でもこうして私は病院にいるわけだから、誰かが私を助けたに違いない。

「あなたは誰？」

「さあね」

彼は低い声で小さくそう言うつと椅子から立ち上がった。

「待つて。どこ行くの？」

私は体を起こし彼を呼び止めた。起き上がる時に咄嗟にベッドについた左手がびっくりするほど痛かった。包帯の巻かれた左手首を思わず握る。死のうとした時は悲しみの方が大きすぎてあまり痛みを感じなかったはずなのに。

「何か飲みたいものは？」

振り返り彼は言った。私は「あつたかいの」とだけ答え、またベッドに横になった。

「背高かったな。誰なんだろ」

独り言。

急に別れた彼のことを脳裏をよぎりはじめ、私は嗚咽を漏らして泣いた。なぜ神様は私を死なせてくれなかったのだろう。感情なんてもものさえなければ、こんな苦しみを味わうことなんてないのに。

ふと、頭に温かいぬくもり。目を開けると男の子が私の頭に手を乗せていた。無表情な顔で私を見下ろしている。手を離すと私にホットココアの缶を手渡し自分は椅子に腰掛けた。今度は右手をつき私はもう一度ベッドから起き上がる。そして右手で缶を握って飲んだ。

「あなたの名前は？」

私は涙を拭きながら聞いた。

「山田時雨」
やまだ しぐれ

「しぐれ？ あなたが私を助けたの？」

「救ってほしそうだったから」

よく意味が飲み込めない。

「私は救ってほしいなんて思ってない。死にたかったのに……」

「あなたは道をふらふらしてたよ。誰かに自分の自殺を気づいてほしくて、誰かに自分を救ってほしくて」

一体どういう意味だろうか。私がふらふらしていたって……私の生き霊かなんかでもいたってこと？ そんなバカな。

「生き霊とかドッペルゲンガーみたいな話？」

「まあ、そんなとこ」

「あなたは霊媒師か何か？」

「違うけど」

そのあと、医者や看護婦さんが来て私を叱る言葉や励ましの言葉を言っていた。一週間後、私は退院した。

退院しても私にはもう何も残されていない。大学に行く気もないし、何もする気など起こらない。今回のことは親には言っていない。実家は田舎だから、こんなことがバレたら近所や親戚から親が変な目で見られるだろうし。

病院を後にして久しぶりに外に出る。もうすぐ春が来るとはいえ、まだまだ寒すぎる。

一人暮らしの家に帰る。

以前と何も変わらない。

以前と変わらず、私は一人で、別れた彼が帰ってくることもない。血が滴っていたはずのバスタブは、何事もなかったかのように真っ白だった。

あの山田時雨という少年は一体何だったのだろうか。

病院に入院した初日以降、彼が私を訪ねてくることはなかった。

孤独。

しんと静まり返った部屋。

どこにも行けない私。

膝を抱えてうずくまる。

私の視線は手首の包帯に向けられる。

もう一度やったら今度こそは死ねるだろうか。

その時、

私の前に黒い影。

「山田くん」

見上げると彼が立っていた。彼はその場にしゃがむと、私の頭に手を置いた。

「生きたいんですよ。まだ死にたくないんですよ。だから家に帰ってきたんじゃないの？」

感情のない声で彼は言う。生気の宿ってない目で私を見る。

「家に帰ってきたのは、退院して行くところもなかったからで……」

私はそう言っ、自分の足を見つめた。

「退院なんてしてないよ、あなたは」

私は顔を上げる。

どういうこと？

「あなたは生死の境をまださまよってる最中なんだよ」

彼は「おいで」と言っ、私の手をとって歩き出した。

目の前の景色が闇になったかと思うと、私はいつの間にか、病院にいた。

つい今朝までいたあの病院だ。

「こ、これは……？」

死んだように目を閉じベッドで眠る私。

そのベッド脇には、父と母。私の手を握る友人たち三人。

「日和！」と私の名を何度も呼ぶ悲痛な声。

「……これは夢？」

私は闇に飲みこまれるような悲しみの底からそれを見つめる。受け入れられない、受け入れがたいその光景。

「あなたは退院なんてしてない。まだ眠ったまま」

「じゃ、ここにいる私は？」

「あなたの意識だよ」

「私は死にたい……」

「本気で死にたいと思ってる人はとっくに死んでるよ。あなたの魂はまだ迷ってる」

私を置き去りにして消えたあの彼はそこにはいない。けれど、私を囲む父と母と友人たちの姿は、私の心を痛いほどしめつけた。

「あなたは誰かに気づいてほしくて、ずっとさまよってるんだよ」
「愛を求めながら、愛が怖い。また捨てられるかもしれない。だったら私はずっと一人でいる方がいいのかもしれない。だって……俺だつて怖いよ」

彼が独り言のようにぼつりとつぶやいた。私の心を読んだかのよう
うに。

「君は何者なの？」

「さあね。それより、早く戻りな」

彼は私の背中を押した。生きるということだろうか。

私は彼の手をぎゅっと握ってから、私の元へ向かった。

意識が遠のくと同時に、彼の姿も遠く遠く消えていった。

私をずっと真っ直ぐ見つめる彼の目は、とても悲しそうだった。

心と体がひとつになったのを感じ、私は目を開ける。

みんなの涙と笑顔と優しさがあった。

あたたかさや愛があった。

またいつか死にたいと思う時が来るかもしれない。

でも、今は、今はまだ、生きたいと少し思った。

私の中に確かに、赤く滔々と流れる愛たち。

私の中で少年の名前と姿が遠くなり、だんだん思い出せなくなる。
「まだ名前言ってなかったね。私は、風間日和かまひよりです」
私は空に向かって一人つぶやく。
もう、どんな人だったか誰だったか思い出せないけど、きっと神
様が私を救ってくれたのだ。

夜の十一時。

満員電車でつり革につかまりながら、俺は窓に映る自分の姿に目をやった。

亡霊みたいな顔してんな、と心の中で思った。

小学校の頃なんかは、自分が二十代になった時には夢を叶えて充実した人生を送ってるんだろうなと漠然とだけどそう信じていた。夢と言っても、その時に将来なりたいものは特になかったが、とにかく何かしら自分の好きな仕事に就いて生き甲斐を感じながら働いていることだろうと思っていた。

しかし現実はずっとたくもって希望も夢もなく、生き甲斐も感じない日々。

どこで間違っただらう。

何がいけなかったのだらう。

俺が何か悪いことでもしたのだらうか。

こういう日々があとどれくらい続くのだらうか。

考えてもきりのない思考のスパイラル。

大学を卒業してすぐに、この就職難のなかで職にありつけたことは感謝しなければならぬのかもしれないが……。

果たしてこれが本当に人生というものなのか。こういふものなのか？

入社一年目にして俺はすでに鬱になりかけている。

大学で知り合い付き合い合っていた彼女がいたが、就職してからだんだん人と会うのが苦痛になってきた俺は彼女の誘いを断ることが多くなり、彼女は静かに俺の元から去って行った。

大学時代は仲間同士で飲みに行ったりカラオケ行ったり、普通の若者らしい遊び方をしていた。

けど、今の俺にはそんな気力はない。

俺の感情はどこまで死んでしまったのだろうか。

その時、

窓ガラスに映る俺のすぐ隣に、俺より死んだ目をした男が立っていることに気がついた。

いつからいたんだ？ さっきまでこんな男いなかったはずだ。

男は、俺より少し年下の二十歳くらいだろうか。しかし背は俺より高い。

窓ガラス越しに俺をじつと見ている。何なんだ。

「人生なんてそんなもんですよ」

男がふいに呟いた。

俺に言ってるのか？ なぜ俺が考えてることが分かったんだ。

「おまえ、なんで……」

俺が横を振り向き声をかけると、ちょうど新宿駅に電車が到着したところで、大勢の人間たちがドツと我先にと電車から降りて行き、俺は人々に突き飛ばされた。

さっきの男もその中にまぎれてゆく。

俺は必死に人ごみをかきわけ後を追いかけた。

やっとのことで男に追いつき、俺はその腕を掴んだ。

雑踏の中、男は立ち止まり俺を横目で見ると、話し出した。

「電車には死んだサラリーマンの霊がたくさん乗ってるんです。死んだあとでもまだ、会社に出勤しなければならぬという強迫観念から逃れられず、毎日毎日同じ時刻の電車に永遠に乗り、会社へ通い続けてるんです」

な、何の話だ？

「おまえは誰なんだ？」

「さあ」

男はうつろな目で俺を見下ろした。

「もう会社へ通う必要なんかありませんよ、北村さん」
なぜ俺の名前を知っている？

「いつまで通い続けるんですか？」

男は表情も変えず淡々と言う。

「おまえは誰なんだ？ 会社の奴か？ 名前は？」

「やまだ しぐれ
山田時雨」

やまだしぐれ？

「思い出してください。あなたは、死んでるんですよ」

俺の中の幻想が崩れ、まわりで忙しく行き交っていた人々の群れが、一時停止のように止まった。

「……俺が、死んでいる」

新宿駅の明々とした電灯が次々と消え、辺りが静まり返った。

「もう自由になっていいんですよ」

自由。その響きに不安を感じる。

目を閉じた俺の瞼の裏に、大学時代の光が滲んだ。

「あの頃は楽しかったなあ」

ぼんやりとそう思い、俺はいつの間にか笑っていた。

そして、いつの間にか涙が頬を流れていた。

「どうせなら、そっちに行っただ方がいいんじゃないんですか？」

男が光の方を指差した。

俺は光の中に足を進める。

仲間たちの笑い声が俺を包んだ。

男の姿はもうなかった。

どんな顔だったか、なんて名前だったか、どうしても思い出すことができない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7888w/>

山田時雨

2012年1月11日01時57分発行